

の暹羅の隣國を六昆といひ、此の六昆の國王が兵を率ひまして暹羅國へ攻め込んで來て、一戦に及びました處、暹羅の兵が敗走に及んで六昆の兵は正々堂々として暹羅の都へ今や取詰めんとし、サア國中上へ下へといふ騒ぎ、其處で國王ニモンタムが如何いたさんかと顔の色を變へて軍議評定に及んだ處、時の大臣でカウハムといふ人が、どうも隣國の勢ひ熾にして、本國の兵にては逆も之を防ぐ事覺束ない、先日城北にて猛虎を退治致した山田といふ日本人、之こそ頼むに宜き人なるべしと早速評議一決して、大臣自ら來つて長政へ告げた、長政は之を聞くと天を拜し地を拜し、是ぞ我が志しを遂げる時なりと打喜び、茲で直ちに日本町から義兵を募つて六十餘名、流石に日本人には特有の魂があります。勇氣勃々として戦象を先に立て、御案内でもございませうが、彼の國には象が澤山居りまして、牙へ金箔を打ち、顔へ丹を塗つていろ／＼飾りをして戰場に押出すので、山田長政が大将となつて、六昆の兵へ押向つた、處が此の日本人の何うも、強い強くないの、忽ち敵を

討破りました遂に六昆の都へ攻め込んで、遂々國王を生擒にした、尤も山田長政が指揮をして、日本人ばかりではない、暹羅の兵の中へ日本の義兵を僅かばかり交ぜて戦つたのだ。處が仁左衛門、固より日本に居る中に軍學兵法は學んで居りますから、妙計奇策を心得て居る、乃ち六昆の兵を粉碎し、勝鬨を揚げて暹羅の都へ引返して來た。されば暹羅國王喜び一方ならず。重い官位を始めて長政に與へ、之を厚く用ひる事になり、特に六昆を賜り、數百の人数を従はせるといふ大層な勢ひ、夫れが爲めに日本町の繁昌は一際旺盛に相成りました、是は又山田長政の傳記中猛虎退治の一席であります。(故桃川燕玉遺稿)

【用宗】 一二三哩二、平家物語に、長者の娘千壽の艶事が書かれてある、其の、▼手越の里は汽車が音たて、渡る安部川の西岸であつて、▼安部川は安部川餅で有名である。行手に見ゆる一帶の山は、▼宇津の山と山麓は、▼葛の細道、驛からは一里半あつて馬車賃三十錢である。「うつ、にも夢にも人にあはぬかな」と業平朝臣の歌つた所、▼用宗海岸は南二町、▼大崩海岸は八町、▼吐月峰は西北一里で灰吹竹は、から出るのである。

講名君膝栗毛 (阿部川)

此の府中より後へ廻つて、二里餘り行つて阿部川といふ川へお出でなさる、是は一番越しが徒士渡して六十文、水が減じると四十文にも三十文にもなる、其の時々潮の多少に依つて相場があります、此の川七八町川上より流れて来る、其の川上一名荒科川と申し、府中の方より流れ来る川を阿部川といふ、水上が駿州阿部郡なるが故であります、又八丁上手に落合街道といふのがあり、是を一名おたらひの渡しといふ。鹽に乗つて渡した事が昔ある故で、大水の時は岸に溢れ、往來一面へ水が出る、此の川上に見えるのが船山といつて低い山、阿部川、荒科川の川上に森か見える、是を荒科の森と稱へる、富士川、阿部川の水は温たかいが、荒科川の水は冷やか、北の方に高く雲ある山、是を賤機山、後ろに淺間の社を祀りました、此の阿部川の宿に阿部川といふ名物がある、彼方では是を五文取といつて、上んなされ、

一ツ五文取やといふ、此國では紙子が名物にて、さういふ物などを商なつて居る處、右の川端へお出でなさると、立派な武士で居るから、川越人足大勢〇「エ、お越しになるのでございますが、蓮臺でお越しでございますませう」田村宇平次「如何にも蓮臺越しだ」〇「オー蓮臺だ」と三臺夫へ持つて来たのを見ると、泥だらけになつて汚い宇「コレ殿様はお疳が強いが、モソツと綺麗なのはあるまいか」〇「綺麗なのといつた處で、皆な泥足で乗るから汚い、掃除なんぞは一々して居られませんか」宇「何か他に美麗なものはないか」〇「夫はない事はない、錢次第でどうでもなります」宇「錢は多分に遣はす」〇「那の三代將軍家光公が御上洛をなさる時、御馳走だといつて宿の者が金を集め、朱塗の蓮臺を拵へて、三代公をお越し申したが、其の蓮臺が不用の品で、問屋場へ預けてあるが、役人に酒の一升も奢りやア貸て呉れますかから借りて來ますが、酒代を餘計にお呉んなさい」宇「充分にやるから借りて來て呉れ」是から川越人足が問屋場の役人に此の事をいふと、どうせ明いて居るものだから持

つて行けといふので、借りて来たのを見ると、周囲は朱塗にて桙が出来て居る宇、然らば君は是へお乗り下さるやうに」といつて長君夫へお乗りになり、川越人足八人は是へ付き、宇兵次宅兵衛は只の蓮臺にて四人づゝ附いて居る、川中へ出ると、長君蓮臺が眞赤で綺麗であるから「長」コレ〜人足、只擔いで居ては興がない、身を天下一に見立て、オイ〜ワイ〜揉んで呉れ○「旦那氣樂をいつちやア往けません、をかべから樂に見えけり渡し守、渡し守は樂のやうで居て骨の折れるもの、私チ達ハ斯うして擔いで居たつて、足は底に附けちやア居ません、蓮臺を擔いで立泳ぎをしながら底を流れて来る小石を避けて居るのです、流れて来る石に打附かうものなら、此の蓮臺を引繰返し、貴方を沈めにやアならねえ、流れて来る石を是で避ながら擔いで居るのに、天王様のやうに揉めるもんぢやアございませぬ」長「手前のいふ事は尤ものやうだけれども、今日水の中で渡世をして居る者が、其の位の事が出来ん筈はない、身のいふ事を肯かんと捨て置かんぞ」と頭の上で長光を引き抜い

た○「ヤアお申戯しちやア往けねえ、危ねえ事を、切られて堪まるものぢやアねえ、御家来さん、何とかいつて下さい」宇「君左様な事を遊ばしますな」といつたので、刀を鞘に納める宇「酒代は遣はすによつて、お氣に入るやう少しでも宜いから揉んで參れ」○「サア夫れぢやアやらう」と大勢でオイ〜ワイ〜擔ぎながら揉んで參ります、其中に彼岸へ着いて、シャン〜と手を拍て、○「お目出度いな、コレ〜其方共は水練に餘程妙を得て居るな、何流ぢや」其時分は今のやうにいろ〜の流儀はない、左の手で泳ぐのを左法流、右の手で泳ぐのを正行流といったもので○「手前達は流儀は知りません、川育ちは川で果る河童流といふのでございませぬ」長「河童流とは面白い」○「甘い酒の一ぱいも飲みてえと思ふから憚んな危ねえ眞似をして居るんです、河童に親類が十三人あつて、水の中で生れたやうなものです、どうか酒代を願ひます」長「宇平次遣はせ」宇「ハッ」二兩の金を紙に包み、やらうとすると長君見て居たが長「待て〜何程遣はす」宇「小判二枚を遣はします」長「夫はならんぞ、川崎

宿に於て予が紀州の家來へ金子を遣はさうといたした處、其方身に何と申した、金錢といふものは最尊びといふもので、扶持に離れ、無祿の浪人になつては出處がない、無駄に使ふな、金がなくては道中が出來んと、二度も三度も意見をいたしたてはなにか、其様な大金はやれん、身が遣はす」と紙入から左も恭々しく一匆通用の豆銀を三ツ出して紙に包み、夫へお投げなさる、川人足共は有難う存じますと開いて見ると勿しかない、△「オ、兄弟、南郷美濃此奴を見や、家來が小判二枚呉れるつたのを止せといつて三匆下すつた、是は一人頭か聞いて見やう……エ、殿様へ、是は一人頭へ三ツ宛てございますか、夫とも是だけの頭へ分配をするのでございますか、貴所には八人付いて跡の御家來へ四人宛て八人、二十六人の頭で三匆と切ア割付けやうがございせんが、一人頭ですか」長「一同の者にて其の三匆を配當いたせ」×「そんな馬鹿な事をいつちア往けません、家來が二兩呉れるといつたのを、主人が三兩やれといつたのなら分つて居るが、況して朱塗の蓮臺まで借りさせて置いて、今に

なつて是ぢやア仕様がございせん、先の三兩を下さりやア、一人頭に二朱や其處邊は付くものを、三匆ぢやア勘辨が出來ねえ」長「いはして置けば不埒の高言、勘辨出來ないとは何だ、武士に向つて何が勘辨出來ぬのだ」×「貴殿怒つたつて無理ぢやアございせんか、揉めないといふのを酒代をやるからといつて、天王様のやうに揉まして置きながら、今になつて其様な事をいつたつて、勘辨が出來ねえぢやアございせんか」長「汝等は旅人を見て無心合力を頼み、金銀を貪る悪者と見えるな、武士に向つて無禮を申さば手は見せんぞ」×「ナニ手は見せん、色氣の付いた濕瘡ツかさぢやアあるめえし、二本差が怖くつちや焼豆腐は食へねえ、氣の利いた鰻は五本も六本も刺して居る、サア切れるものなら切つて見ろ、そんな事を恐れて居ちやア川越し人足雲助なんざア出來ねえ、俺を誰だと思つて居やアがる、憚りながら東海道で名の高い禿山源太とは俺の事だ、先の二兩を渡しやア宜し、渡さにやア、三人の武士、此處を通す事は出來ねえ」長「悪口雜言なさは命はないぞ」×「何を吐しやア

がる、仕事をした揚句に手前達の當がひ扶持を食つて堪るものか、サア切れるものなら切つて見ろ」と腕を捲くり足を突出す、長君長光の柄に手を掛け長「己れ憎くい奴、左様申さば捨て置かんぞ」と關口居合の御名人、川人足が肩口を二三寸、殺す氣はないから微傷を付けた○「ヤア大變だ」源太が切られた、皆な來い「ヤー」一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ、忽ち川越人足共數多集まり、平常交際つて居るから、川越人足雲助馬士人足一同集まり、ドン／＼石を以て礮を打つが中々上手だ、暇の時に石を投げて稽古をして居るから上手だ、長君は長光の一刀を持つて左右に薙拂ふ宇平次宅兵衛は來る奴を取つては投げ、川中へ投げ込む、水練は何れも心得て居るから少しも恐れず直ぐに飛上つて來る、石は益々雨霰の如くに打附け、長君の御尊體に怪我過ちを生じなば、此の人足共は打首になる、夫ゆへ是を庇び、お怪我をさせないやうにして居る、ソレ阿部川の喧嘩といふので大騒ぎに相成つたから、此の事を川役所へ告げる者あり、是に依つて川番所の役人其處へ駈出して來て 役「コレ

、お武家へ手向ひをしてはならない、私が事を分けてやるから騒ぐな」といふと、人足共「ソレ番所の役人が出張した、番所のお役人が來たから靜かにしろ」といつたので、一同手を引いて終ふ 役「イヤお武家、どういふ譯で斯様な事になりました」長「憎くき所の川人足共、身が遣はしたる酒代を少いと申し、悪口雜言をなし、身の前で腕を突張り出し、切れるものなら切つて見ろなぞ申したに依つて斯く怪我をいたしました」役「假令一人でも二人でも斯うして怪我をして見れば、此儘には濟まされません、人足共皆人別があつて役所へ届け出でになつて居る者でございませぬ、無籍者ではございませぬ、代官の手許に人別のある者でございませぬ」長「黙れ、彼等如き千人や二十人切つたとて物の數とも致す身ではない、當役所を預かる代官は何者ぢや」役人は其の權式に驚いて「天野宮内様支配にございます」長「ウム、天野宮内へ左様申せ、以來斯様な事があると身分に障るぞ、武家へ對してさへ此のやうな悪口雜言をいたす、町人なれば何のやうな事を言ひ掛けて、人を苦しめまいものでもない、

是も畢竟宮内政治が届かんからである、今日は此儘許し取らすから左様存ぜい……宇平次宅兵衛参れ」其の勢ひに驚き、殊には葵の御紋附を召して在つしやるから迂濶手は出せん役「手前達も怪我をして居るものだけに依つて、何とか處置を付けて薬代位は取つてやらう」と是より代官天野宮内少輔殿の屋敷へ急いで参り役「お訴へ申します、私は川役人太田作左衛門にございます」△「ウム」役「最前川人足が武士と喧嘩をいたしました、段々取鎮めて聞いて見ますと、三人を十六人の人足にて川越え致し、一匁銀を三ツ出したる處、是は法外なり、酒代が少いといふ所から、一言二言が争ひとなり、人足三四人切られました」甲「ウム」役「併し、一命はございます、手前取扱はんといたせしに、其の權式一通りでございます、此儘では濟まされんと申した處彼等如き十人や二十人切つたとて、物の數ともいたす身でない、當所の代官は誰ちやと申しますから、天野宮内様御支配でございますと申すと、宮内は甚だ行届かん、政治が悪い、以來斯様な事があると、宮内身分に關はると申せと、餘り權式

が恐ろしく、當所の代官様を呼附けいたしました」甲「呼附けにいたしましたか」役「へい、宮内々々々と三九二十七……」甲「黙れ、不埒をいふな 何しろ夫は容易ならん譯だ、御主人へ申上げやう」と是より家來が天野宮内殿へ此の由を申上げる、すると天野宮内殿に於ては「宮」不埒な奴だ、直ちに召捕るやうに」と申附け、夫から尋ねたが何處へ行つたか知れない、夫れから大井川御代官石子内匠殿方へ急使を以て注進に及ばれたには、阿部川原に於て武家三人人足へ怪我いたさせ、其の賃金も拂はず、雜言いたしたるのみならず、代官天野宮内様を三度も四度も呼附けにいたしましたる段其罪輕からず、是に依つて右の者御地へ参り候は、早々御召捕り下さるべく云々といふ書物、年齢二十歳位、外二十五六歳の家來二名、黒紋附の衣類に細見の兩腰、深編笠と風體までも申送つたから、石子内匠殿御代官の手代二人を呼出し、是々の譯にて只今大井川へ二十歳位の者に、外に二十五六歳の家來二名附いて参る筈、是は容易ならん曲者にて、阿部川に於て人足三人に怪我をいたさせ、天野宮内

殿を呼付けになしたる不屈きの奴、取遁してはならぬに依つて、人足共に申付け、搦め取つて参れ、抜刀に及び手に餘らば眼つぶしの石を投げて面部へ傷を付けても苦しくないといふ申付け、是を川越人足共へ傳へ、召捕れば褒美を遣はすといふので、人足共大いに喜び、阿部川よりは人足も五層倍居るから麵棒半棒六尺棒と、何れも得物々々を持つて石を積み上げ礫を投げんと待構へて居る、處へ長君お出でなされば、どのやうな怪我をなさるか、又人足共は残らず大罪に陥らねばならぬのだが、茲に御老中の仰せとして當時の御奉行佐久間主膳正殿よりのお達しに、

一、尊き御方様御公達二十歳位の君、外二十五六歳の家來二名主従三人、其他同行相成りしやも計り難く、其砌は諸役人に申付け、必ず其のお方に失禮なきやうに、可憐にいたすべく、尤も御馳走にも及ばず、只見知らぬ振りにてお通し申上ぐべく、御病氣の體にて相見え候へば大切に御介抱いたすべき事、月番老中より早を以て相達すべき旨沙汰有之候。

色白き方、鼻高く、目大きく、口耳常體、黒葵御紋附の衣類、他に家來二名として長君の人相は書いてあつて、家來の人相は書いてない、石子内匠殿大いに驚き、内「這は容易ならん事なり、松平長七郎様へ阿部川の人足共無禮をいたしたるに依つて、斯様な事に相成つたと見える、若し人足共長七郎様へ對し手向ひいたさば、手前身にも及ぶ、大事なり」と手代の者に仰せられ、大井川へ罷り越し、大勢の人足へ其由を申付け、右の御方御通行に相成らば、必ず〴〵落度之なき様、大勢にて警護いたし御通し申上ぐべしと、大井川へ御沙汰に及びました。茲に遠州と駿州の堺に流れる川を昔は大猪川といひ、甲州の山より流れ出し、此より南へ流れる、今日では大井川といふ、昔の歌に『思ひ出る都の事を大井川、いく瀬の石に類も及ばず』といふ斯う詠んだのがある、扱も大勢の人足が得物〴〵を持つて、武士が來たら打倒せと待構へて居る處へ、一丁二丁位に見張りの人足が出て居るから、ドン〴〵駈けて來て、『ヤア來た〴〵人相書の廻つた立派な武士が來やアがつた』といつて人足

共綱を張つて待つて居る處へ、眼の色變へて代官の手代が二人ドン／＼駆けて来て
 役「コレ／＼人足共、夫にお出でなさるのが、手前達に昨日申し渡した二十歳位のお
 武士、二十五六歳位の家來兩名」△「へい、夫は今向ふへ來ましたから、ぶつちめて
 踏ん縛り、御役所へ連れて行きます」役「黙れ、此方のいふ事を聞け、其お方へ手向
 ひをなすと、其方達は逆礮けになるぞ、容易ならんお身分のお方様、どのやうな事
 があらうとも、言葉返しはならんぞ、御機嫌能く此川をお通し申せ、一人にても無
 禮あらば曲事たるべきもの、曲事と言へば、其方首が飛ぶぞ」△「へえー是ア驚いた、
 昨日は武士を取逃がしてはならぬ、吳々も申付けたといひながら、今日は叮嚀にお
 通し申せと、何だかお役人は猫の眼のやうにクル／＼變る」役「何を申す、夫れには
 仔細がある、昨日は御身分も分らなかつた」○「何處の人です」役「そんな事を聞くに
 は及ばん、慥にいひ渡したぞ」と其儘二人は歸つて來る、此方は人足△「此國のお代
 官様位分らねえのはねえ、昨日はあれ程厳しくいつて置きながら、今日になつて叮

嚀にしろとは、一體何の事だ』といつて居る處へ、長君お出でなさる、宇平次宅兵
 衛「コレ／＼人足共」△「ソレござつた、阿部川で人を切つた怖い人だ…蓮臺を持
 つて來ねえ」と鉢巻を取つて叮嚀に蓮臺を持つて來る、阿部川の人足とは丸で違ふ
 ×「どうぞ是へお乗り下さい」長「是は見苦しい、三代家光殿御上洛をなすつた時の、
 朱塗の蓮臺を持て」×「戲談いつちやア往けません、そんな蓮臺はありません、さう
 いふ事を仰つしやつては困ります」長「何が困る、是より川巾の狭い阿部川にてさへ、
 其の蓮臺があるに、此處に蓮臺のない事はあるまい、夫れに出さんと許さんぞ」×「夫
 れは往けません、阿部川には朱塗の蓮臺がある筈です、此の大井川にないといふ譯
 は、此の興津の領主興津河内守といふ人が駿河大納言様を三代の將軍にしたいとい
 つて、今の將軍家光公を殺さうと浮橋を拵へ、其の橋へ乗つた處で、其の橋を切つ
 て流して終ふといふ計略で、處が三代様は御明君だから、我上洛をいたす爲めに、
 此の大井川へ橋を架けて渡つたとあつては、主上への恐れ之あるに依つて、渡らぬ

と仰しやつて、通常の蓮臺でお越しになりました、夫れゆえ謀叛人の興津河内守が、大金を費けて拵へた浮橋も晝餅になり、計略が手違ひになつたのでございます、夫れゆえ茲には朱塗の蓮臺はございませぬ、人足の話聞いて長君はお胸塞がり、我父を將軍にしたい爲め、興津河内が悪計を廻らし、此處に浮橋を架けたのか、淺猿しき事やと、大いに心沈み、常の蓮臺にてお越しなさる、川役所より沙汰もあつたから、川中へ出て鼻歌一ツ唄はず、神妙にして長君の蓮臺を十八人警護なし、宇平次宅兵衛の兩名には六名づゝ警護して向ふへ無事に渡すと、長君に御苦勞であつた、宇平次酒代を取らせい、『酒代は一文も要りませぬでございます此儘お通りを願ひます』とドン／＼馳けて行つて終つた、長君意味合を御存じないから、『宇平次宅兵衛、當所は誰の預かる所ぢや』『石子内匠殿お預かりの場所にございます』『ウム、石子内匠は政治が届いて居るから、人足共の人氣が宜い、感心の事ぢや』とお賞めになつて、神谷宿へお這入り遊ばしたのは、誰か彼かの夕間暮、鳥も時に歸る頃でございます。(故桃川三玉遺稿)

頃でございます。(故桃川三玉遺稿)

お江戸々々土産に阿部川帯子々々、ありやこりやよい、きてはこそ／＼と、さあんなさあんへくわん／＼や／＼しやつき／＼しや、ちんから／＼、此まては走り出て見れば／＼、ありやこりや戀の中やどさあおるせ、これさ／＼着てはこそ／＼と、さあんなさあんへ／＼つがらてくせ、天照大神御出なされて目出度いな (阿部川帯子隠)

【焼津】 一七哩五、東行天皇の皇子日本武尊が東夷征伐の趾として有名な此の地は、當時茫々たる一面の平原、葦荻生ひ茂り、折しも冬の初めて皆末枯でザラ／＼と風に戦いてをったのである。夷酋の欺計の火炎の中に立たせ給へる尊の雄姿、御叔母なる倭姫命からお授かりになつた天叢雲の御剣を抜かせ玉ひ、同じめぐみの御靈の煙を打つて、向ひ火を放つて夷軍に對し玉へる往古の事蹟は今も尙目前に偲ばれるのである。夷軍は尊の放ち玉へる火、自ら放つた火に焚かれ、又は尊の刃に斃れて殆んど滅滅してしまつたのである。尊即ち其の屍を集めて焼き捨て玉ふたといふので此地を焼津といふのである。其の舊蹟として驛の南八町、▼焼津神社 があつて、尊の靈を祀つてある。▼阿部町 は二里半馬車賃十二錢である。

【藤枝】 一三一哩六、藤相鐵道の接續點、▼志太鐵泉 は西北一里、輕鐵賃金四錢、▼蓮生寺 は北三十二町、▼中村製茶工場 は藤相鐵道神戸村驛から五町、▼片岡青年會 は四四里、▼勝間田青年會

は四六里、▼青島高洲整理耕地は驛の前、▼千葉澤砂防工事 は西北二里、名産は茶と茶葉とである。
 【島田】 一三六哩三、島田人車軌道の接續點、▼大井川 は四半里、駿遠二州の境をなしてなる巨流で、幕府時代には橋梁舟筏の禁があつたから、旅人は對岸の金谷へ渡るには蓮臺に乗るか、肩によるか、背中に負はるゝかして渡つたものである。例の雲助どもの書き入れの場所、講談などにはよく出て来る所である。雨が少し降りつゞけば川留となる、義太夫の朝顔日記で誰も知る朝顔が川留めの歎き、遊子の袖を濡らして通るのは此處らであらう。▼大津谷川砂防工事 は北一里半、名産は木材である。
 蛙鳴く淺瀬もありや大井川 子規

義太夫 朝顔日記 (島田より大井川)

詞 『朝顔殿召まする朝顔殿』と叫ぶる、むざんなるかや秋月の娘深雪は身にも
 る歎きの數の重なりて時失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし淺香は暮ろく朝露と消え
 残りたる身一つを、道に捨も椽先の飛石さぐる足元も危ふき木曾の丸木橋渡りぐる
 しき風情にてやうゝ座して手をつかへ 詞 『召しましたは此御座敷でござりますか
 拙いしらべもお笑ひ草おはもじさまやと會釋する顔も深雪が成の果不便の者やとせ

ぐりくる涙呑み込み控へ居る岩代は夫と知らず 詞 『ヤア見苦しい其ざまて我々が目
 通りへうせは聞及んだ朝顔めなエ、きりゝ立つてうせおらふ、アイヤゝゝ岩代
 氏、そうもぎどうに仰せられな此方が呼立たればこそ思ひがけの身アイヤ思ひがけ
 の身来た者を呵るは武士の情にあらずコリヤゝゝ女太儀ながら其朝顔とやらの歌サ
 ア早くうたふて聞かせいと望む心は千萬無量知らぬ岩代頼ふくらし 詞 『さてゝ駒
 澤氏にはイヤモきつい御執心コリヤゝゝ目くら何成りともエ、歌へゝサ、早く早
 く、ハイゝゝ諷ひまするでござりますとこがる、夫の有ぞ共しらぬ目くらの探
 り手に戀ゆる心盡し琴誰かは憂を斗爲吟の糸より細き指先にさす爪さへも八ッ橋の
 やつれ果たる身をかこち涙に曇る爪しらべ露のひぬ間の朝顔を照す日かげのつれな
 きに哀れ一むら雨のはらゝとふれかし 詞 『ム、夫を慕ふ音律の我々が身に思ひや
 られて思はずも感涙いたしたのふ岩代殿いか様琴といひ器量といひイヤモ中々感心
 仕るイヤナニ朝顔とやらそこは定めて冷へるであらう身共が傍で今一曲サアゝゝ

所望だ、ア、ヤ岩代殿モウゆるしておやりなされい去りとは駒澤氏身共が望
 みをとめさつしやるはソリヤ意地の悪いと申すものイヤ左様ではござらねど彼も定
 めて勞れませうと存じてハ、ア然らば曲はやめにしてコリヤ、女そちも腹からの
 非人でもあるまい身の上嘸も又一興嘸て聞かせサ、どうだ、ハイ、よふ問ふ
 て下さりますお詞にあまへお嘸し申すも恥しながら元私に中國生れ様子有つて都
 の住居一年宇治の螢狩に焦れ初めたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の短い契りのほ
 ない別れ所尋ねる便さへ思ふに任せぬ國の迎ひ 詞『親々にいざなはれ難波の浦を船
 出して身を盡したる憂き思ひ泣いて明石の風待にたま、逢は逢ひながらつれなき
 嵐に吹きわけられ國へ歸れば父母の 詞『思ひもよらぬ夫定め立てる操を破らじと、
 屋敷をぬけて數々の憂目をしのぎ都路へ登つて聞けば其人はあづまの旅と聞く悲し
 さ又も都を迷ひ出でいつかは巡り逢坂の關路を跡に近江路や美濃尾張さへ定めなく
 戀し、目に泣きつぶし物のあいらも水とりの陸にさまよふ悲しさはいつの世い

か成る報ひにて重ねの歡きの數あはれみ給へとはかりにて聲をしのびて歎きけ
 る 詞『ア扱哀れなはなし併し男日照もない世界にエ、氣のせまい女だ、イヤもしず
 んだ話して氣がめいつた寢酒でもたべ氣を晴さうイヤナニ女暇をくれる立歸れハイ
 有難うござります左様なればお客様もうお暇申しますオ、朝顔とやら太儀であ
 った初て聞いた身の上話もし其夫が聞いたならば嘸満足に思ふであらうノウ岩代
 殿左様、ハ、ア是はマア御深切なお詞有難ふ存じますと杖さぐり取り立ちながら
 蟲がしらすか何とやら耳に残りし情の詞名殘惜しさに泣くも心は跡に探り行く
 折しも奥より若侍 詞『最早餘程深更に及び候 御兩所共に早お休みいか様明日
 は正七ツの出立イザ駒澤氏おやすみなされぬかイヤ拙者は今暫し用事ござればお構
 ひなく先づお先へ左様なればお先へふせらう御免下されと立上がりしが胸に一物心
 を跡に奥の間へ伴はれてぞ入りにける、行く間おそしと駒澤手をならして女を呼び
 詞『コリヤ、徳右衛門に急ぎ對面したし呼んでくりやれと呟付けやり旅硯の墨摺

流し以前の扇押開いて何か書きつけ用意の金子薬の包取認める程もなく廊下傳ひに
 來かゝる亭主夫と見るより手をつかへ 詞「エ、只今召しましたは何の御用でござり
 ますオ、徳右衛門折入つて頼み度は先刻の朝顔といふ女今一應呼び寄せてたもる
 まいか、ハイ畏まりましたはござりますが彼は直に清水と申す方へ参りました御用な
 らば呼には遣はしもせうがア、どうで今夜の間にはム、ハテ残念至極身は正七ツ
 の出立つモよく縁の、エ、何と御意なされますアイヤナニ徳右衛門今の女に謝
 禮の爲め此三品を其方にしつかと預け置く間朝顔が参らば渡してくりやれハイ、
 オ、コリヤマアおびたいしいお金其上結構な女子扇に薬までもオ、サ其薬は大明國
 秘法の目薬甲子の年に出生せし男子の生血を取て服すればいかなる眼病も即座に平
 癒朝顔に渡してくりやれコレハ、何から何までお心をこめられた下されもの参り
 次第相渡し悦ばしますでござりましょと請取る折しも時計の七ツ 詞「ム、アリヤも
 う七ツの刻限とかぞふる内に岩代多喜太装束改め旅立同勢引連れ立ち出て 詞「イ

ザ駒澤氏出立仕らうと勧める詞に治郎左衛門衣服繕ひ立出れば見送る亭主が暇乞
 そぐわぬ駒澤岩代打連れてこそ出て行く跡見送つて徳右衛門 詞「ハ、ア同じ侍で
 も黒白の違ひ意地くね悪い岩代に引かへ情深い駒澤殿ア、適れの侍じやなヤそれ
 はさうと朝顔に今夜の禮にはそぐはぬ下され物ハア何ぞ様子の有そうな事と思案の
 折柄深雪は何か氣にかゝり座敷仕舞うていそくと又立歸る切戸の内徳右衛門目早
 に見て 詞「オ、朝顔かおそかつた宵のお客さまが最一度呼にやつてくれいとおつし
 やつたれど清水へ行つたと聞いたゆるお断り申したれば今の先お立なされ併しマア
 悦びや大まいのお金と扇又結構な目薬わがみにやつてくれいとお預けなされたわい
 の、是はマア冥加にあまる事お禮申さひで残り多いが申し、旦那様此扇に何か書
 いてはござりませぬかちよつと見て下されませオ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔露
 のひぬ間が書いてある裏に宮城阿曾次郎事駒澤次郎左衛門と書いてあるぞやエ、ア
 ノ宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と其扇にオイノ、ハ、アはつとばかりに俄に仰天

詞「エ、知らなんだ〜わいな道理でよふ似たお聲と思ふたがそんならやつぱり阿曾次郎様であつたか申し〜旦那様其のお客はいつお立なされたへオ、今の先ぢや我が身は又おなじみかエ、なじみな所か年月尋ねる夫でござんすわいな斯ういふ中も心がせく追ついてたつた一言と行かんとするを引とやめ」詞「ア、コレ〜コレマア〜〜待ちや〜エ、折悪ふ雨もふり出し此くらひに一人はあぶない〜イエ〜〜譬死んでもいとせぬサ、夫はそれでも目くらの身では危ない危ないイヤ〜放して〜と突きのけ刎ねのけ杖を力にふる雨もいつかないとはぬ女の念力跡をしたふて追ふて行く名に高き街道一の大井川篠を亂してふる雨に打まじりなる 雷 漲りおつる水音は物凄くも又すさまじき夫をしたふ念力に道の難所も見えぬ目もいとぬ深雪が轉つ轉びつ漸く爰に川の傍」詞「ノウ川越達駒澤次郎左衛門といふお侍もふ川をお越しなされたか未だか聞かして〜といふ聲さへも息切れの聲に川越口々に」詞「オ、其侍は今の先渡つたが俄の大水で川は留つた笑止

〜とばかりにて皆散り〜行すぎる 詞「ヤアナニ川が留つたハ、ア悲しやと張詰めし力も落て伏まるび前後ふかくに泣きけるが又起立つて見えぬ目に空をにらんで」詞「天道様エ、聞えませぬ〜わいな此年月艱難辛苦もどうぞ最一度其人に逢はしてたへ片時も祈らぬ間ともないものを、けふに限つて此大雨、川留とはエ、何事ぞいの思へば此身は先の世でいか成る事の罪せしぞ扱も〜味氣なや、こがれ〜た其人に逢ふても知らぬ盲目の此目はいかなる悪業ぞや、夫の跡を戀したい、石に成つたる松浦瀧ひれふる山の悲しみも身にくらべては數ならず三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世にあるべきかわとくどき立て拳をにぎり身をふるはし泣涕こがれ嘆きしは、よその見る目も哀れなり。

箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川

(追分節)

【金谷】

一三九哩五、驛の西端から南に開けて茶園がある。▼牧ノ原茶園 がそれである。承久の

宗行、元弘の俊基朝臣の歌や詩で名高い、▼菊川は驛の西二十二町、汽車が金谷驛を出て直ぐに隧道を通ると一小溪流がある、その川が菊川で、附近が菊川の里である。隧道の上は武田徳川の古戦場、牧野の城跡だといふ。▼小夜中山夜泣石は驛の西三十二町、名物は小夜中山子育館である。

傳 小夜の中山夜泣石 (金谷)

往昔、東海道小夜の中山に、悪い盜賊が棲んで居て、往來のものを苦しめた、或夕べ、一人の女が通りかゝつた、女は、京都の、然るべき人の姫であつたが、妊娠中であつた、盜賊は何の容赦もなく飛び出して來て姫をとらへた『さあ、身ぐるみぬいて置いて行け』と、姫は怖さに身をふるはして泣いた、盜賊は遂に面倒と思つたか、大刀をひらめかして切り殺した、さうして金を奪つて逃走した、暫らくして一人の坊さんが通りかゝつた、何やら暗の中に子供の泣き聲が聞えた、近よると一人の女が切られて、その腹から小兒が出て泣いて居たのだ 坊『ア、氣の毒な南無阿彌陀佛々々々々々』と子供を抱き上げて、死骸を道の傍に埋め、上に石の塚

を建て、やつた、さうしてその坊さんは小兒を育て、やる事になつた、併し乳がないのでその中山の宿の館を買つて夫によつて育てあげた、盜賊は、姫を殺した場所へ尺八を落して行つた、それが證據で、後に此の小兒が母の仇を報じたといふ、夜泣き石とは、その母の死骸を埋づめた塚の上の石である、毎夜、小兒の泣き聲がその石の附近でしたといふので、後に夜泣き石といつた、館が名物になつて居るのは、その小兒を育てた、子育ての館だといふ。(傳説)

【堀の内】 一四五哩三、城東馬車鐵道接續點、▼應西教院 は西南三十町、人力車賃三十五錢、▼櫻ヶ池 は東南五里二十町、人力車賃一圓、馬車賃四十錢である。

【掛川】 一四九哩七、▼秋葉神社 西北十里、馬車賃七十五錢である。人力車賃は二圓で、神社の西、天龍川から川船を備ふて下ると三時位で池田の宿に達し、それから天龍川驛に出られるのである。池田には謡曲に名高い熊野の墓がある。

彌次郎きた八藤栗毛

彌次郎 きた八藤 栗毛 (掛川より袋井)

【掛川ヨリ袋井へ二里十六丁】東雲まだき驛路の、いそがしげにひきつる、朝出の馬の嘶きに、旅勞れの目をこすりながら彌次郎北八おき出で支度する内、相宿のいち子が顔ふくらかし居るもおかしく、爰を立出なるみや譽田の八幡を打過ぎ、右にしようとの畑姫が田といへる見ゆれば彌次郎兵衛

干しからびしうとの畑に引かへて

水澤山のよめが田ぞよき

それより鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋おちけるにや行かふ人みづから股引をとりあげて、爰をわたるに彌次郎北八も、いざや引つれ涉なんとする折柄、京のぼりの座頭二人づれ、此川の歩わたりなる事を聞きけるにや一人の座頭、大市『モン川は膝きりもござりますかな』北『さやう〜、併し水がよいから

彌次郎きた八藤栗毛

おめへ方アあぶない、用心して渡りなせへ』大市『ハア成程、水の音がよつほどよい』と言ひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げ込んで考へ大市『イヤ、此邊がどうか浅いようだ、コリヤ猿市、二人ながら脚絆をとるも面倒だ、おぬし若役に俺を負ぶつて渡れ』猿市『ハ、、、、、、狩い事をぬかす、拳で參らう、なんでも負けた者が負ぶつて渡るのだ、よし』大市『コリヤ面白い、サア来いさんなむめて』猿市『りやんごうさい〜』と片手で拳を打ちながら、兩方から左りの手を出し、互ひに拳を打ち手を振り合ひ大市『サア勝つたぞ〜』猿市『エ、いま〜しい、そんなら此風呂敷包みを貴様一緒に春負つせへ、ソレよし』大市『サア来い〜』と支度して春中をむける、彌次郎是は有難いと猿市に負ぶされば、猿市は連れの犬市と心得てサツ〜と川へ入り、難なく向ふへ渡ると、此方の岸に残りたる犬市大市『ヤイ猿市よ、どうする、早く川を渡さぬか』猿市向ふの岸にて聞きつけ腹をたて猿市『コリヤ冗戲な奴だ、只た今おぶつて渡したに又其方へ行つて俺を騷るな』大市『馬鹿アいへ、己ればかり渡つて太い奴だ』猿市

彌次郎きた八藤栗毛

「イヤ太いと其方のことだ」猿市「コリヤ汝、兄弟子に向つて言語同断な、早く来て渡さぬか」と白い眼をむき出し、腹立つるゆる、猿市仕方なく又此方へ渡りて歸り猿市「そんなら負ぶさりなさろ」と背中を出す、北八しめたと手を掛けて負ぶされば、猿市又サツ〜と川へ入る、犬市は大きに急込みて犬市「コレ猿市、何處に居る」猿市川の中にて猿市「イヤ、此奴は誰だ」と北八を川の中へドンブリ落す北「ヤアイ助けてくれ〜」と手足をもがき流れるゆる、彌次郎飛込み引あげれば、頭から骨までくさるほど濡れ北「エ、座頭めが、飛んだ目に遣はしやアがつた」彌「ハ、、、先づ着物をぬぎやれ、しぼつてやらう」北「全體彌次さんが悪い、なんの負ぶさらずとも宜いことに、お前が手本を出したから、ツイ俺も」彌「川へはまつたが氣の毒なハハ、、、夫て一首やらかした、

はまりけり目のなき人とあなどりて

むくひは早き川の流れに

北「エ、聞きたくもねえ、止して呉んな、ア、寒い〜と」裸體になり、ガタ〜顫えながら着物をしぼる。此中座頭は川を渡り行き過ぎる。(東海道中藤栗毛三芳屋發行ヨリ)

【袋井】

一五五二、中遠鐵道及秋葉馬車鐵道接續點、▼秋葉神社 北十里、森町まで馬車賃二十四錢、森町から若身平まで馬車賃六十五錢、人力車賃驛より若身平まで二圓、神社は秋葉山上に在る、天を摩するやうな老櫓古杉の中に、千年の廟宇おそかに立つてなる幽遠なる屋外の境である。▼可睡寮三尺坊は北二十八町、馬車鐵道賃九錢、秋葉神社から三尺坊威徳大権現を遷したもので、參詣の人多く、境内の牡丹は一段の麗を添えてゐる。▼油山寺 北東一里十四町で境内に瑠璃の瀑がある。▼横須賀町 是兩二里半、輕鐵賃金二十錢、漱水浴によろしく、▼横籠村敷地村 是北方三里半、人力車賃七十錢、▼大日山遺林 是秋葉山の北方にあつて驛から七里、鬱蒼たる美林である。

曲謠 熊

野 (袋井)

ワキ(平宗盛)詞
「これは平の宗盛なり、さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候、久しく都に留め置きて候が、老母の病とて度々暇を乞ひ候へども、此春

熊野

ばかりの花見の友と思ひ留め置きて候、いかに誰かある、トモ(太刀持)『御前に候
ワキ』熊野來りてあらば此方へ申し候へ、トモ『畏まつて候』

ツレ(朝顔)『夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん、
これは遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候』さて
も熊野久しく都に御入り候が、此ほど老母の御病とて、度々人を御上せ候へども、
更に御下りもなく候ほどに、此度は朝顔が御迎へに上り候、道行、『此ほどの旅
の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明
し暮らして程もなく、都に早く着きにけり、都に早く着きにけり、』これははや急
ぎ候ほどに、都に着きて候、これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに
候、まづ、案内を申さばやと思ひ候、いかに案内申候、池田の宿より朝顔
が參りて候、それ、御申し候へ。

シテ(熊野)『草木は雨露の恵、養ひえては花の父母たり、況んや人間においてをや、

あら御心許なや何とか御入り候らん。

ツレ、詞『池田の宿より朝顔が參りて候、』なに朝顔と申すかあら珍らしや、さ
て御病は何と御入りあるぞ、ツレ『以ての外に御入り候、これに御文の候、御覽
候へ、シテ』あら嬉しやまづ、御文を見らざるにて候、あら笑止や、此御文のや
うも頼み少う見えて候、ツレ『さやうに御入り候、シテ』此上は朝顔をも連れて參
り、又此文をも御目にかけて、御暇を申さうするにてあるぞ此方へ來り候へ、誰が
わたり候、誰にてわたり候ぞや、熊野の御參りにて候、シテ『わらはが參り
たる由御申し候へ、トモ』心得申し候、いかに申し上げ候、熊野の御參りにて候
ワキ『此方へ來れと申し候へ、トモ』畏まつて候、此方へ御參りあれとの御事にて候
シテ『いかに申し上げ候、老母の病以ての外に候とて、此度は朝顔に文を上
せて候、便無う候へどもと見參に入れ候べし、ワキ』なにと故郷よりの文と
候や、見るまでもなしそれにて高らかに讀み候へ。

シテ、謠 『甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず、末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず、過ぎにし二月の頃申し、如く、何とやらん此春は、年古りまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の鶯、逢ふ事も涙に咽ふばかりなり、唯然るべくは好きやうに申し、こぼしの御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ、さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずば、孝行にも外れ給ふべし、唯返す返すも命の中に今一度見参らせたくこそ候へとよ、老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〜見まくほしき君かなと、古事までの思ひでの、涙ながら書き留む、
地 『そも此歌と申すは、そも此歌と申すは、在原の業平の、其身は朝に暇なきを、長岡に住み給ふ、老母の詠める歌なり、さてこそ業平も、さらぬ別れのなくもかな、千世もと祈る子の爲と、詠みし事こそ哀れなれ、詠みし事こそ哀れなれ。
シテ、謠 『今はかやうに候へば、御暇を賜はり、東に下り候べし、ワキ、詞 『老母の

病はさる事なれどもさりながら、此春ばかりの花見の友、いかてか見捨て給ふべき、シテ、謠 『御詞を返せば恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず、これは徒なる玉の緒の、永き別れとなりやせん、唯御暇を賜はり候へ、ワキ、詞 『いや〜さやうに心弱き身に任せては適ふまじ、いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、』と
地 『牛飼、車寄せよとて、牛飼、車寄せとて、これも思ひの家のうちに、はや御出でと勸むれど、心は前に行きかぬる、足弱車の、力なき花見なりけり。
シテ、謠 『名も清き水のまに〜とめぐれば、地 『河は音羽の山櫻、シテ、謠 『東路とても東山、せめて其方のなつかしや、地 『春前に雨あつて花の開くる事早し、秋後に霜無うして葉の落つること遅し、山外に山あつて山盡きず、路中に道多うして道極まりなし、シテ、謠 『山青く山白くして雲來去す、地 『人樂み人愁ふ、是皆世上の有様なり、誰か
いひし春の色、げに長閑なる東山、四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を列ねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重

の花盛り、名に負ふ春の景色かな、名に負ふ春の景色かな。

地、謠 『河原面をすぎ行けば、急ぐ心の程もなく、東大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む、シテ』 観音も同座あり、闍提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや、

地 『げにや守りの末直ぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうちすぎぬ、六道の辻とかや、シテ』 『げに恐ろしや此道は、冥途に通ふものなるを、心ぼそ鳥部山、地』 『煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、シテ』 『北斗の星の曇なき、地』 『御法の花も開くなる、シテ』 『經書堂はそれかとよ、地』 『そのたらちねを尋ぬなる、不安の塔をすぎ行けば、シテ』 『春の

ひまゆく駒の道、地』 『はや程もなくこれぞ此、シテ』 『車宿、地』 『馬留め、こころより花車、

おりるの衣播磨湯、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して母の祈誓を申さん、

ワキ、詞 『いかに誰かある、トモ』 『御前に候、ワキ』 『熊野はいづくにあるぞ、トモ』 『未だ御堂に御座候』 『何とて遅なはりたるぞ、急いで此方へと申し候へ、トモ』 『畏まつて候、いかに朝顔に申し候、はや花のものと御酒宴の始まりて候、急いで御参

りあれとの御事には候、其由仰せられ候へ、ツレ』 『心得申し候、いかに申し候、はや花のものと御酒宴の始まりて候、急いで御参りあれとの御事にて候、シテ』 『何

とはや御酒宴の始まりたると申すか、ツレ』 『さん候、シテ』 『さらば参らうするにて候、のうく皆々近う御参り候へ、あら面白の花や候、今を盛りと見えて候

に、何とて御當座などをも遊ばされ候はぬぞ、』 『げにや思ひ内であれば、色外に顯はる、地』 『よしやよしなき世の習ひ、歎きても亦餘りあり、シテ』 『花前に蝶舞ふ紛々た

る雪、地』 『柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の來る事速し、鐘は寒雪を隔て、聲の出る事おそし、清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の聲

やらん、地主権現の花の色、娑羅双樹の理なり、生者必滅の世の習ひ、げにためしある粧ひ、佛も元は捨てし世の、半は雪に上見えぬ、鷲の大山の名を残す、寺は

桂の橋柱、立ち出でて峰の雪、花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原、シテ』 『南を遙に眺むれば、地』 『大悲擁護の薄霞、熊野権現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の

薄紅葉の、青かりし葉の秋、又花の春は清水の、唯頼もしき、春も千々の花盛り、
シテ、『山の名の、音羽嵐の花の雪、』地、『深き情を人や知る。』
シテ、詞、『わらは御酌に参り候べし、』ソキ、『いかに熊野ひとさし舞ひ候へ、』地、『深

き情を人やしる、イエロ掛中の舞。』
シテ、詞、『のう〜俄に急雨のして花の散り候はいかに、』ソキ、『げに〜急雨來つて

花をちらし候よ、』シテ、詞、『あら心なの急雨やな、春雨の、』地、『ふるは涙か、ふるは

涙か櫻花、散るを惜まぬ人やある、』ソキ、詞、『由ありげなる詞の程取りあげ見れば、』
詞、『いかにせん都の春も惜けれど、』シテ、『馴れし東の花やあるらん、』ソキ、詞、『げに道理な

り哀れなり、はや〜暇とらするぞ東に下り候へ、』シテ、詞、『なに御暇と候や、』ソキ、詞

『なか〜の事と〜下り給ふべし、』シテ、詞、『あら嬉しや貴やな、是観音の御利生な

り、これまでなりや嬉しやな、か〜て都に御供せば、

又もや御意の變るべき、唯此ま〜に御暇と、木綿つけの鳥が鳴く、東路さして行く

【中泉】一六〇哩、中泉人車鐵道接続點、▼熊野の墓は西北一里、池田の熊野寺境内にある。藤の花の名所である。

【天龍川】一六四哩二、▼天龍川は東海道第一の大河、中泉驛と本驛との間の鐵橋は長さ三千八百尺、蜿蜒長蛇の如くである。『すはの湖の水解くらし遠つあふみ、天の中川なきさまされり。』といふ定隆の歌にも詠まれてあるとほり、源を信州諏訪湖に發するもので、沿岸の殖林、本流支流の沿岸にある人工杉、扁柏林四萬二千町歩、蓄積材量は千五百八十五萬尺に達し、本邦三大美林の一と稱せられてなる。天龍川下りの壯遊をする、舟の中から座ながらにして此の美觀を賞することが出来るのである。

【瀧松】一六六哩九、濱松輕便鐵道及大日本軌道の接続點、古の曳馬の里、家康が武田氏を討つ時此の地に據つて、それから天正十八年に江戸に移封せられたのである。其の遺蹟、▼濱松城跡は西北十五町一隅に東照宮がある。▼三方ヶ原は北一里、家康が信玄と戈を交へた古戰場で、元龜の昔を颯々の松風に止め今は多く茶園になつてゐる。▼日本樂器製造會社は北三町、▼日本形染會社は東北十六町、▼帝國製帽會社は南二町、▼濱松市役所は西北八町、▼歌舞伎座は西四町、▼二俣町は東北五里

同町宇鹿島まで輕便鐵道の便があつて、賃金は三十錢である。二俣城跡は町の西方にあつて家康の將中根

道の、やがて休らふ逢坂の、關の戸さしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見捨つるかりがねの、それは越路われは又、東に歸る名殘かな、東に歸る名殘かな。

正照が檢守して信玄の兵に抗した所である。名産は、茶及樂器の産出が多く、其の他には礪石、綿布、落花生、繭、帽子、葉煙草等て濱納豆は誰も知る此處の名物である。

講談 酒井の太鼓 (濱松)

徳川勢勢ひ利あらず、大敗軍となつて、命から〜濱松城へ引揚げる、鳥居彦右衛門は最前天神林にて太股を打ちぬかれ、清水の爲めに膝頭を突き碎かれ、其場は馬にて逃げのびたるが、途中にて流れ矢に馬を射られ、餘儀なく歩立立ちとなり、鎧にすがつて跛足ひき〜漸く城中へ来て『恐れながら彦右衛門、お目通り願ひたう存ずる』家康ガバとはね起き 家康『彦右衛門、存命であつたか、目出度い〜』
『ハ、ツ、先づ以て今日の御合戦、珍らしき御急難、御尊體御別條なく、恐悦至極に存じまする』家康『如何にも、汝のおかげで命を拾ふた、シテ負傷は』彦『何の是しきの事、仔細はござりませぬ、時に今宵は節分、恐れながら手前年男を相勤めたう』

ござりまする』家康『オ、如何さま例年の通りいたすがよい 一寸待て、例は終に赤鯛をさすのだが、今宵は品をかへ柀の代りに柀をさせ』彦右衛門眉を顰め『恐れながら柀と申すものは、佛花と申し、佛事より外に用ひません、甚だ不吉な花。』家康『されば、其方孫子の 諺を忘れたるか、是れを死地に入つて、而して後に生きる、十死を出て、一生を保つといへり、今日の有様、誠に十死一生の合戦である、依つて今宵は柀を用ひよ』彦『恐れ入りましたる仰せ畏まつて候、然らば兎も角も四方の御門を閉めきり、敵の附入らぬやうにいたしませう』家康『イヤ待て彦右衛門、今宵は八文字に押しひらき、門内には箒をたけ』彦『恐れながら君の仰せとも存ぜず未だ甲州勢の揚貝も聞えず、必定敵は當御城へ付け入る所存と相見えませぬ、急ぎ四方の門を打切り、大手の橋を焼き落し、籠城の用意第一と存じます』家康『イヤ彦右衛門夫は不覺である、何は兎も角今日の合戦、味方は四方に散亂し、俄のこゝにて今朝より兵糧を用ひず、殊更雪中に挑み戦ひ、身體悉く勞れ、命カラ〜』

引き取り来る、其の時大手の橋もなし、門はしめ切り、城内は眞暗となる時は、一同ハツと力を落し、途方にくれミス〜敵に討たるべし、假令門をしめたりとて、數萬の大軍味方は小勢、中々籠城思ひもよらず、命を的に樂しんで、城を目當てに歸る者を、其の儘入れずに置けやうか、死なば諸共主従が、此の城内にて相果てん、早や〜門を押し開き、篝を所々に焚き、追々歸り来るものを、早く城内へ入れるやう、取り計らひてとらせよ』流石の彦右衛門ハラ〜と涙を流し家康公の仁心に感じ入りました『早速仰せの如くに取計らひます』此折酒井左衛門忠次は、お太鼓櫓へ駆けあがり、敵味方の様子如何あらんかと思渡せば、日はトツブリと暮れ、殊に雪空にて、慥とは分らねども、霞に見ゆる旗馬章は大道と桔梗の赤旗、其の勢約そ五六千人、是れぞ正しく馬場山縣、跡についで數萬の大軍、陣鉦太鼓関の聲、天地に轟き、山岳も爲めに崩る、ばかりであります、左衛門忠次、齒がみをなし、眼を血走らせて打眺めて居ります折柄、バタリ〜と人の来る氣色、

ハツと振返ると、お坊主が、六ツの太鼓を叩かんとて上つて参ります、何分敵の勢ひに怖れ、ガタ〜震えながら、足も爪足立つて地に付かぬばかりであります、忠次は聲をかけて『何ぢや』坊主『へエ、六ツの太鼓を打ちに上りました』『さうか、早く打て』坊主『へエ』太鼓に近付いたが、何分震えが止らないから太鼓も打てないドロ〜』『何故、そんな打ち方をする、シツカリ打て』坊主『へエ、シツカリ打たいのでございますが、何分身體が細かく震えました』『意氣地のない奴だ、サア、俺が打つてやる、撥を出せ』坊主『へエ』忠次は撥を坊主の手から奪ひとると、全身の力をこめて、ドーン、ドーンドーン、ドン〜と打ち切つた、城内では、鳥居彦右衛門、三寶に豆を載せ、聲音も高く『福は内〜鬼は外〜』と豆をまいて歩く、此時信玄は、本陣にあつて耳を時て、信『ハテ不思議今鳴る太鼓は濱松城の六ツと見える、徳川勢今日の大敗軍にも拘らず、彼の撥音の陽に響き、鬼打豆の聲も高く、勇氣をふくみたるは、何か仔細がなくては叶はぬ、まして大手の門を八文字

酒井の太鼓

に押ひらき、我が大軍物ともせぬ振舞、何か深謀があつての事ならん、先手は止まれ、後陣は直ぐに引あげよ』と忽ち下知を傳へたるから、武田勢は後陣より追々に引あげる、是ぞ徳川家の運がよいところで、若し此の時に附け入れられれば、城中一人残らず塵殺になつたのであります、信玄は己れの智に迷つて、遂に力負けをいたしました、此時に叩いた太鼓は、其後江戸城に残つたといふ事でありませぬ、味方ヶ原軍記の中、酒井の太鼓の一節……。(故松林伯圖遺稿)

○ 一つしづれの日に立ちそめて、

いなさ細江の身をつくし、

くちもはてなば浮名も共に、

同じ濱名の橋ばしら、

(加賀 節)

湖光海色

(濱名湖から三河灣まで)

橋にして見るや濱名の横がすみ

蓼 太

【舞坂】

一七三哩四、濱松を後にして此の驛を過ぎ、今切の鐵橋を渡つて鷺津に至る間北に濱名湖を眺め、南に太平洋を望み、湖光海色所謂兩手に花の大活畫である。▼濱名湖は驛から西北二十四町、古は遠つ淡湖と呼ばれ、東西一里二十九町、南北二里三十二町、周圍二十三里十五町である。永正七年八月大海嘯があつて、それから湖の口が約百間ばかり決潰して海水と通じてしまつたのだといふ。其の通じてなる所を今切といふのである。名産は魚類、落花生、蛤、海苔などである。

舞坂や闇の五月めくら馬

其 角

【辨天島】

一七四哩九、濱名湖の東岸にあつて、海水浴場及避暑の地として世人に知られてなる所、四時假停車場の設けがある。

あの月や昔濱名の橋の月

鬼 貫

【新居町】

一七六哩八、濱名湖の西岸で、江戸時代には關所があつた所、建物の一部が今も尙残つてなる。

【鷺津】

一七九哩一、此驛から濱名湖巡航船の便がある。瀬戸まで十四錢、三ヶ日まで十八錢、館山寺まで二十二錢、氣賀まで二十五錢である。▼本興寺は西五町湖岸に臨んだ勝地で、▼大福寺は三ヶ日から半里、人力車賃二十錢である。▼館山寺は海上二里湖畔第一の勝地と稱せられる所、▼井伊谷宮は氣賀から二十町人力車賃二十錢、後醍醐天皇第五の皇子宗良親王を祀る。親王は新田義興等と共に足利尊

湖光海色

氏等の賊徒を征討なされたお方である。▼奥山半備坊 是氣賀から一里半、人力車賃五十錢、方廣寺の境内にある。寺は後醍醐天皇の皇子聖鑑國師の開基であるが、半備坊は可睡齋と共に天狗を祀つた名祠である。

【三川】

一八五哩 三、▼岩屋観音 是西北五町、車窓から見える。

【豊橋】

一八九哩 七、豊川鐵道接續點、豊川の南岸にあつて、舊時吉田と稱し松平氏の城市であつた。「吉田通れば二階から招く」といふ俚語は今も尙人の口に唄はる、のである、今人口五萬五千、第十五師團の司令部及騎兵旅團が置かれてある。▼吉田城址 是東北十町、附近に吉田神社がある。▼市役所は東北八町、▼豊川稻荷 是驛の西北二里、豊川鐵道豊川驛から二町、寶金片道十三錢往復二十四錢である。殿宇は宏壯にして華美、庭園には躑躅、牡丹、薔を競ひ、池泉樹石の布置巧に幽雅を添えて四時参詣の人多く、殊に祭典には賽者踵を接して雜鬧するのである。▼砥鹿神社 是豊川鐵道一ノ宮驛に近く、國幣小社である。▼野田城址 是武田信玄が月夜笛の音に聞き惚れて銃傷を負つた所、豊川鐵道新城驛の附近である。同線の終點長篠、附近は所謂「長篠の古戦場」、鳥居強右衛門の豪膽は新昌寺境内の其の墓石と共に永久に輝つてゐる。三河七御堂の第一である。▼鳳來寺 亦驛附近にある。▼山吉田村有林 是長篠驛から三里半、村は八名籠式製炭の産地である。▼鴨山郡有林 是同驛から十里、▼愛知縣有苗圃 是新城驛から十町、▼豊橋育兒院 是豊橋驛から東二十町、▼豊橋盲啞學校 是同東三町、▼牛久保町外二ヶ村整理耕地 是西北二里、▼神野新田整理耕地 是南一里である。▼伊賀湖崎 是伊賀西熊鷹巡錫して此の地に到り、「豊ひとつ見つけてうれし伊賀湖崎」と詠じた所、渥美半島の盡頭で、尾張の知多半島と共に相對して三河灣を抱き、風光の勝は既に世人の喧傳する所であるが、其の壯觀を略記すると、滄茫たる大洋の綠波殆んど際涯なく

海風怒り來れば亂濤奔雷の如く頼れは又頼れ、愈々來つて愈盡きないのである、豊橋から南一里なる牟呂から汽船に乗ると、渡邊華山の出生地である田原につく、それから宇津江坂を越えれば三里ほど島村、それから約二里で其の壯觀に接することが出来るのである。

談講 甚五郎の水仙 (豊橋)

左り甚五郎竹筥の水仙といふお話し、此人は飛驒國から出て、永らく伏見に居り、夫れから江戸へ出やうといふので、東海道を吉田の宿まで下つて参りました、豊川屋文左衛門といふ宿へ泊つたが、金は一文もない、一日か二日ならやかましくもないがモウ三日となると黙つて居ない、主人の文左衛門、羽織を引かけて出かけて來ました、段々聞いて見ると一文なし、豊川屋も是には驚いた、「親方、どうも全然無いんですか、いくらかございませんか」甚「一文も無い百もないんだ、情ない譯なんだ、損して得を取れてえ事を考へて仕方がねえと諦めろ、人間は諦めが肝腎だ、お前は名代の吉田宿の豊川屋文左衛門、焼けたと思つて諦めろ」主「冗談仰し

やつちやア不可いまひせんぜ 貴所あ、焼やけたと思おもつて諦あきらめろなんて一文いちもん無なしがあるももん
 ぢやアありません』甚全然ぜんぜん一文いちもんも取とれないとななつたら、お前まへさんも困こまるだらうから、
 そりや工面くめんにかゝるよ……イヤ、俺われの方ほうで全ぜん爲く損そんをさしては氣きの毒どくだから、形かたを置お
 いて行いかう』主親方おやかた、別べつにどうも其そのお荷物にものは何なににもなさうで、お召めしを置おいてと
 か何なんとかいふ事ことに相成あひなりましたら、お差支さしつかへ』甚着物きものを脱ぬいちまつて裸體はだかで道みち
 中は出來でねえ、俺われが其その細工さいくをしようてえんだ』主ハア、お仕事しごとを、何なにをなさいま
 す』甚俺われは毎日まいにち庭にわを眺ながめながら、斯かう酒さけを呑のんで居ゐるが、庭にわの那處あそこに竹たけがコテく
 あるな』主「ヘイ」甚「アノ生はいてる竹たけを澤山たくさんちやアねえ、三本さんぼんばかりな、エ、大地だいちを
 離はなれる事こと五寸ごすんばかりの所ところで、斯かうスバリと切きつちまうんだ』主主人あにぢも可怪おかしいと思おもつた
 が』主庭にわの竹たけを三本さんぼん切きりまして、何なんになさるんで』甚夫それで俺われが細工さいくを仕しやうてえ
 んだ』主「ヘエー、ぢやア、親方おやかたの前まへちや、竹細工たけさいくと申まをした所ところが、どうも私共わたくしどもは其その
 魚串さかなぐしだの、鰻うなぎの串ぐし、團子だんごの串ぐし、菜箸さいしほとかいふものを拵こしらへて下くだすつた所ところが、却々なかくん勘かん

定の足あししになる……』甚「オイ〜主人あにぢ、何なんも俺われは團子だんごの串ぐしや魚さかなの串ぐし其様そのようなものを拵こし
 へるたア言いはねえ、マア宜いいから不思議ふしぎな細工さいくをやるからな、アノ竹たけを三本さんぼん切きると
 なつたら』主「ヘイ」甚「削けり小刀こがたを二挺にた、それから研石けんせきと金盥かなげへ水みづを入れて、削けり臺だい
 と薄縁うすべりとね、雑巾ざつけん、鋸のこぎりとを女中ぢようちゆうに斯かう廊下らうかの所ところへ運はこばして呉くれ』主「どうも貴郎あなただは
 贅澤ぜいたくだね、腹はらさんざ呑のみ倒たふしたり、食くひ倒たふしたりして、横柄わうへいに女中ぢようちゆうに運はこばせるなん
 て』甚「マア〜宜いい、損そんはさせねえから』主「畏おそまりました」といつたが、豊川とよがわ
 屋文左衛門やぶんざゑもん乗のりか、つた船ふね、皆みんなな貸かして了しまつて、竹たけの一本いっぼんや二本にほんやらねえつたつて
 おつ付つく譯わけのもんでない、是こゝから若わかい者ものに言いひ付つけて品々しんしんを廊下らうかへ運はこばせる事ことにな
 つた、さて甚五郎じんごろうは鋸のこぎりを持もつて庭にわへ下くだり立たつて参まゐりましたが、ズイコ〜やつて
 庭にわの竹たけを三本さんぼん切きつて、先まを切きつちまつて枝えだを拂はらつて、庭にわの隅すみの所ところで此この竹たけをズバズ
 バ荒あつ切きしにいくつにも割わつて了しまつて其その竹たけを廊下らうかへ置おいて、借かりた小刀こがたを頻しきりに
 研とぎ初はじめた、漸おく研とぎ終おつて座敷ざしきへ皆みんな引張ひ張り込こんだかと思おもふと疊たたみを汚よごさないやう

に薄縁を敷いて其の上へ削り臺を置いて、座敷も誰も来ねえやうにピタリ閉めちまつたかと思ふと、スーツ、スーツと竹を削り初めた、正午飯を食ふまで小刀を研いで居た、小刀が研ぎ上つたかと思ふと飯を食つて、夫れから座敷の中でもつて竹削りを初めたんだが、何を拵へるんだか文左衛門にも分らない、只、スーツ、スーツと音ばかり、帳場を離れて豊川屋の主人、何を拵へるのかと思つて拔足差足をして次の座敷へ来て、唐紙の隙いてる所からソツと見ると、成程魚串や田樂の串や何かちやアない、少し長く變な竹ツ籠を、何にするのかと思つて覗いて居ると甚五郎ハツと氣が付いてか「ハ、ア誰か覗いて居るな」と思ふと仕事を罷めて了つて、グウーと寢込んだ「ウム、モウやらねえのか知ら」と豊川屋が帳場の所へ坐り込むと、スーツ、スーツと音がする「アレ、初めやアがつた、何を拵へるんだな」と氣になるから拔足差足をして行つて唐紙の隙の所を覗くと、甚五郎が見てまた、来て覗いてるなと思ふと、仕事を罷めて、其所へゴロツと横になつた「アレ、可怪な野郎

だ」と思つて帳場へ来て居ると、スーツ、スーツ、此度は、ソツと来て息を殺して見て居ります、スーツ、スーツ「誰だえ、其所から覗くなア、覗かれると氣が散つて仕事が出来ねえ、覗いちやア可けねえぜ」仕方がないから、唐紙をスラリと開けて「覗いたつて宜いちやアありませんか、ゴロ〜寝ちまつて」「覗かれると氣が散つて出来ねえから止めちまうんだ、見てちやアいけねえ、出来りやア俺が沙汰をするよ」「出来たらア何を拵へるんで」「何を拵へても宜い、出来ると俺がボン〜と手を叩くからな、ボン〜と手を叩いてから来ると出来上つて居る」「鯉だと思つてやがる、ちやアモウ覗きません」豊川屋もモウ、スーツハスーツと音を聞いても覗きに行かない、燈火の點く時分に相成りますと、ボン〜と手を叩いたからサア出来たんだと思ふから、周章て行つて「親方、出来ましたかな」「イヤ、主人、サア出来た、是れだ」と出された時に見ると、竹ツ籠が五六本あります、其間に二ツ三ツの棒の先へ玉の喰付いたものが出て居る、「是れは親方何て……」

甚「分らねえかえ」主「竹ッ籠の所へ棒が出て、玉が喰付いて、ア、葱です、葱の
 實の熟つたのが出来た」甚「冗談いふな、主人、お前の顔の所に二ツピカリと光つて
 るそりやア何だ」主「是れは眼で」甚「夫れで分らなきやア目ぢやアねえ、節穴みたい
 なもんだ」主「冗談仰つしやちやア可けません、そりやア何で」甚「何でも宜い、寝る
 前にな投入へ入れて、水を一杯張つて置くん、然うすると是れが水を汲うから、
 モウ寝る時分になつて見ると、投入の水が無くなつちまう、水がなくなつたらまた、
 一杯にして置いて寝ちまうんだ、夜半に小便にでも起きて、指を突込んで見て水が
 無かつたらまた一杯張つてやるんだ」主「ぢやアチヨイ、水を注すんで、厄介な
 …」甚「翌る朝までにはスツカリ出来上る」主「へー」何だか譯が分らねえものが
 出来たから、本人のいふ通り、豊川屋の主人が、床の間の前へ持つてつて投入れへ
 水を一杯張つて、是れを差して、夜半に小便に起きた時に指を突込んで見ると、成
 程無い、また水が切れたと思ふから一杯にして置く、夜が明けて、早立の客人を終

つて、お燈火を上げて、ヒヨイツと床の間の所を見ると、不思議に思つた竹ッ籠の
 真直ぐな奴が水を上げましたが、斯う擔つて宜い格好になつた、玉のやうになつて
 た奴も棒が柔かになつて、蕾が開いた、花片が六ツで、匂ひがついて居る水仙、是
 れ主上へ捧げたる所の、甚五郎の竹籠の水仙といふ、主人は氣が注かなかつたが、
 こりやア水仙だと思つて、其奴を持つて周章で座敷へやつて来た「お早ようござ
 います」甚「何だ主人」主「親方、些とも分らなかつたが、今朝見たら分りました、こ
 りやア水仙ですね」甚「ア、目になつたか」主「先んから目なんて」甚「分らなけりやア
 目でねえんだ、水仙と思ふやうなら目に相違ねえ」主「どうも不思議なものが出来上
 りましたな」甚「ウム、主人、先刻俺が店へ行つて見たら、何んだか知らねえ、此の
 宿がゴタ／＼して居るが、例ものやうでねえのは祭りか何かあるのか」主「祭りぢや
 アねえんですがな、今日は其の、細川越中守様が、當宿へお泊りで」甚「越中守、そ
 りや何より幸ひだ」主「何が幸ひ…」甚「お前に拵らへてやつた、那の竹籠の水仙、

主「ハア」甚「那れをな、表の化粧柱へ、チヨイト投入を付けて差して置け」主「どう
 しますんで」甚「流石は茶氣のある細川様、お目に止まりやア大したもの、お買ひ上
 げになるだらう」主「アレをですか……ヘエー」甚「何しろモシお買ひ上げになるなら
 安く賣るなよ」主「ア、左様で」甚「百兩が小ピタ一文缺けても……」主「アレが ウ
 フツ」豊川屋も呆れた、氣狂ひだアレはどうも厄介なものを泊め込んだと思つたけ
 れども、本人がいふんだから、表の化粧柱へ釘を打ち投入を下げて是れを投入へ差
 して置く、八ツ半にお宿入りを觸れ込んで参りました、愈々細川越中守お乗り込み
 に相成りまする、御承知の通り、細川越中守様と来た日には、名代の玻璃張りのお
 輿物で通つた、豊川屋文左衛門の家の前でお輿物がピタリと止まつた、暫らく經
 つて、ホウ〜といつて、此のお輿物が本陣へ参ります、係り役の者が急いで豊川
 屋へ来て「コレ、主人豊川屋文左衛門は居るか」主「へい、エ、手前豊川屋文左衛門
 で」主「ア、左様か、當家のアノ水仙といふのは、那れは賣り品だと申すが左様か」

主「賣り物でげす」主「殿のお目に止まつたに依つて、早々本陣に持参に及べ」主「へエ、
 畏まりました」豊川屋驚いて「ハテナ、目に止まつたつて……」早速夫れを持参い
 たしまして本陣に参りました、當番役人が玄關に控へて居る「豊川屋文左衛門、水
 仙を持参いたしたか」主「持参いたしましたして罷り出てまします、併し、一文
 もまかりません」主「控へろ」主「高ふがす……」主「控へろ、無禮な奴だ、何程ぢ
 や」主「百兩」役「百金、ア、左様か、お買ひ上げに相成る」主「左様でござんすか、誠
 にこりやア有難い事でございます」と係役の者から百金取つて、水仙は此方へ渡し
 て、本陣の庭の口の所へ來ると「コレ〜、豊川屋、是れへ代金受取を出せ」百兩
 の受取を出して豊川屋喜んで横ツ飛びに歸つて來た「どうしました」主「どうも大
 層なもんぢやアねえか、まけろと仰しやらねえて百兩、何しろ大層なものだ、五番の
 客は逃がしちやア不可ない、確かり掴まへてろ、夫れから庭の竹を皆な切つて那處
 の座敷へ持ち込むやうな事にして……」主「どうした主人」主「どうも恐れ入りました」

甚五郎の水仙

た、百兩にお買ひ上げなりました』
 『夫は可かつた、マア宜い按排だつた』
 『親方、庭の竹を皆な切つちまいますから、是れから毎日何卒……』
 『馬鹿を言へ、然ういくらも拵らへられる譯のものぢやアねえ、此方の根が然うは續かない、サア主人は少しばかりだが宿の拂ひに、』と二十五兩、其處で女中若い者、皆一同へ祝儀をやつて「後はお前の家内によつてお呉れ」と二十五兩、五十兩夫れへ渡した、豊川屋の一同大喜び、初めて京都に居た時に、主上へ捧げたる所の竹籠の水仙といふのが相分つた、一本は細川家へ残るといふ事に相成りました、宿拂ひが済みましたものでげすから、其處で甚五郎は三州吉田宿の豊川屋文左衛門方を出立いたしました、江戸表へ出て参り三井の大黒を彫りまするお話しになります。(故桑々齋桃葉、三芳屋發行、左り甚五郎名作噺しより)

【御油】

吉田通れば二階から招くしかもかのこの振袖で
 一九四哩九、▼海水浴場 は南九町、▼宮路山 は北一里半、紅葉の勝地である。

(俗 語)

【蒲郡】

二〇〇哩三、此處も海濱の眺望絶佳の稱があつて、瀬戸内海の風光と相並び喧傳せられてゐる。所謂湖光海色の内の一美觀である。三面に青嶂をめぐらし、海上には近く大島、小島、竹島等羅列し島影波光相映して美しく、宛然湖のやうな思ひがある。此處から鳥羽、二見浦に至る汽船の便がある。▼戀の松原 は驛前の松原のこと、▼海水浴場 としても聞えてゐる。名産は魚類、昆布、海鼠腸藻類など。

【幸田】

二〇五哩一分

【岡崎】

二〇九哩六、西尾鐵道及岡崎電車接續點、徳川家康誕生之地、徳川氏勃興之地として世に現はれてゐる所である。町は驛の北一里を隔て、あり、人口三萬一千、電車賃七錢を投ずれば達するのである。城址は今岡崎公園となつて、家康産湯の井、其の傍に東照宮を鎮してゐる。▼大樹寺、▼是字寺、▼瀧山寺、▼大林寺、▼伊賀八幡宮など町の近くを點在してゐる。▼矢矧橋 は城址外の長橋で、豊臣秀吉がまだ微賤の頃、此の橋のたもとに寝てゐて蜂須賀小六と邂逅した所であると言ふ。汽車が驛を出づると鐵橋を渡る、其の川が即ち矢矧川で上流に見ゆる橋がそれである。當年の猿面冠者、後の關白太閤秀吉、人生の浮沈は實に圓り難きものであるなど染々と考へさせられるのである。尙見ること町内に▼三龍社、▼製絲會社、▼三河織産會社、▼繭絲會等がある。▼悠紀齋田の趾 は一里二十五町、▼中島整理耕地區内にあつて、西尾鐵道中島驛から五町である。▼吉田鹽田 は同線吉良吉田驛附近にあつて世間いふ鹽庭といふのがそれである。▼高橋村青年會 は北四里、岡崎盲啞學校 は北一里、▼伊賀川整理耕地 は北一里、▼愛知縣模範林 は十二里、▼縣立農林學校演習林、▼東加茂有林も其の近傍にある。▼宮崎村有林

湖光海色

は七里十五町、公有林整理の模範と言はれ就いて調査研究するもの多く、愛知縣荒廢地復舊工事は一里半の男川村にあつて、主としてアカシヤ及ネムの樹を植栽してなる。名産は縮布、生絲、八丁味噌、淡雪、ささらぎなどである。

長唄 十一 一段 上の卷 (岡崎)

本調子 Δ さるほどに武夫の、矢矧の里に聞えたる、何某長者の乙の姫、淨瑠璃御前と申せしは、峰の薬師の申し子にて、智慧も容色も菩薩なる、花の黛薄からず、雪の袂の憎からぬ、年も十六夜月のころ Δ 夜遊の友に召されしは、冷泉十五夜始めとして、艶きたてる女郎花、ひと、さくねる男山、男形して陸奥へ、御門出の牛若丸、こゝに宿をかり初の、縁導びく爪琴や、 Δ 時の調子も想夫戀、山の端出づる月冴えて、絲の調べの音も澄めり 二上り Δ 心盡しの秋風に、須磨の浦はの波枕、衣かたしき一人寝に、夢も結ばぬ夜な夜な 本調子 Δ 御曹子は妻戸に立寄りて、面白の樂の音や Δ 吾妻のことは知られじと、名に逢坂のそれならで、斯程めでたき保手拍子、

世にも妙なる音樂に、笛のなきこそ不審なれ、吾妻の樂の習ひにて、わざと笛をば吹かぬかや、よしつねはあれ樵夫の歌 Δ 草刈笛もあるものを、その音一つのなかりしは、一よ節を厭ふかや、よし Δ 我は埋木の、春秋知らぬ蟬折は、關守る人も免せとて、歌口しめす草の露、樂に合せて吹く笛の、音色や深き戀の淵、三河にかけし八ッ橋の、渡りそめぬる縁ならん Δ 妙なる節をそれども、知らで地唄ふ小童の、手拍子やめて姫君に、あれ聞し召せ宵ながら、妻戀ふ鹿か狩人の、里吹く笛かとしどけなき Δ 言葉の露に玉琴の、爪音とめて音を止めて、聞くに色ある笛竹の、しめやかなりし一間の内 Δ 人々感じ誰人の、合す音色ぞかしかまし、野もせの蟲にあらなりに、見て餘れよや侍女と、冷泉十五夜仰せを受け、手燭携へ庭傳へ柴の編戸を押しあけて、月影かざす殿振に、さしもやさしさ御姿 Δ 上に唐綾下襲ね、ことに袴の物敷は、貴布ねの社壇を描きたる、朱の鳥居に玉垣の、玉を欺く月額 Δ 柳の枝に櫻花、梅の蕾の香りもありて、辛氣上氣の顔紅葉、言葉はなくて姫君に、さ、

やき竹や心のたけ、岩木ならねば若君も、今宵を十代の始めにて、いつの時雨の神無月、出雲に結ぶ縁の帯。

長唄十一段 (下の巻)

三下り、姫も思ひの近まざり、ぞつと身にしむ戀風に、逢ふ嬉しさとやる瀬なさ、言はねば胸も騒がれて、人目はかれぬ戀草の、思ひ千束の文ならで、水に繪をかく筆茅花、うら紫の袖儿帳、それと悟りておもと人、面伏せやに言ひかねて、お茶の通ひの愛想に、姫の心を汲交す、合、濃ひ染色の口切も、粹で立派な前髪様よ、尋ねて來ませ杉の門、三輪の酒屋の娘ぢやないが、合二上り、竹にサア雀はナアエ、品よく止るナアエ、とめて止らぬ戀の道、とめさせ給へと押しやれば、今更何と姫はなほ、岩にせかる、瀧川の、われから濡る、花の雨、君が恵みに咲初めて、うつろふ色は白絲の、縫ればとけぬお心と、夜は伏籠の香に匂ふ、恥し盛り戀盛り、合、立

並びては深山木の、花のあたりのあすならふ、わらは、賤しき陸奥の、金商人の吉次が下部、い、や包めど紅は、園生に植て隠れなき、君は源氏の左馬頭、義朝公の公達にて、牛若丸とは申さずや、今日の今宵の殿まうけ、御座移りとして進められ本調子、思ひよらず往昔は、日影鞍馬に人となり、世を牛若とも名乗らじと、つれなく見えし若君の、袖よ袂よとり、に、闇の睦言私言、合、妹背の中を陸奥の、十府にやおちいで語るに落ちる、君を七布に我三布に、さんざ、寝よもの我三布に、ねよげに見えし御風情、合、早や明近き鶏鐘に、又の逢瀬を誓ひして、數の盃納まる御代、相生松の萬代と、御門出を祝しの樂、合、又も調ぶる玉琴や、羯鼓銅拍子笛の音も、時の調子をゑてん樂、春鶯囀の樂の音も、きく春風と諸共に、花をちらしてどうと打つ、秋風樂は秋の風、波を響かしどうと打つ、萬歳樂は萬うち、青海波とは青海の、波立ちうち探桑老、合、抜頭の曲はかへり打つ、うつなり、颯々と、つきせぬ御代のしるしとて、流れは絶えぬ上野のほとり、池水の泉末清き、語り傳

謡曲杜若

へて睦まじや、語り傳へて睦まじや。(三芳屋發行、長唄百番より)

【安城】

二一四哩五、西端及東端村の桃林は西南二里半、三里四方に互る大桃林であつて、開花の節は實に見事なものである。蓮華寺は東北三十町、境内老松多く、上宮寺は一里、妙源寺は一里二十七町である。徳川家康此の寺の黒木尊を信仰して止まず、後に江戸の増上寺に遷したと言ふことである。上郷村整理耕地は東北二里である。

【刈谷】

二一九哩五、三河鐵道分岐點、知立神社は北東三十町、八ッ橋の燕子花は東北一里二十町、業平朝臣の名によつて名高く、三河三弘法、遍照院は東三十町、西福寺は北三十町、密藏院は北一里である。吉濱青年會は三河鐵道吉濱驛附近、金山揚水整理耕地は北一里十五町、山林原野の開拓を主としてなる。

謡曲 杜若 (刈谷)

ワキ(旅僧)詞

「これは諸國一見の僧にて候、われ此間は都に候いて、洛陽の名所舊跡残りなう一見仕りて候、又これより東國行脚とこゝろざし候。道行、謡ふべゆふべの假枕、ゆふべゆふべの假枕、宿はあまたに變れども、同じ憂き寝の美

尾山濃水 (名古屋と岐阜)

【大府】

二二三哩五、武豊線の分岐點、桶狭間の古戦場は東北一里半、愛知郡大府村にあつて、街路の東北、昔は田樂狭間と言ひ今は屋形狭間と稱してなる。土地が低く僅かに一町内外の廣さの所、永祿

尾山濃水

濃尾張、三河の國に着きにけり、三河の國に着けにけり。急ぎ候間、程なう三河

の國に着きて候、又これなる澤邊に杜若の今を盛りと見えて候、立ちより眺め

ばやと思ひ候、げにや光陰とよまらず春すぎ夏も來て、草木心なしとは申せど

も、時を忘れぬ花の色、顔佳花とも申すやらん、あら美しい杜若やな。

シテ(杜若の精里の女)詞 「のう〜御僧、何しに其澤には息らひ給ひ候ぞ、ワキ

は諸國一見の者にて候が、杜若の面白さに眺め居て候、さてこゝをばいづく

申し候ぞ、シテ 「これこそ三河の國八橋とて、杜若の名所にて候、さすがに此杜

若は、名におふ花の名どころなれば、色も一入濃紫の、なべての花のゆかりとも

思ひなぞへ給はずして、取りわき眺め給へかし。(以下略)

桶狭間

三年五月十八日の眞夜中と言ふ時、當時清洲の城主織田信長今川義元破竹の勢ひを以て攻め來り、味諸城が一も二もなく陥つたといふ報知を聞き、がばとばかりに劬ね起きて出陣の用意を命ずると其の方のまゝ、悠然として牀几に腰かけ小鼓を取つて打ち鳴らしつゝ、諸曲敦盛の一節「人間五十年、化轉の内を較ぶれば、夢幻の間なり、一度生をうけ、滅せぬ者のあるべきか」と朗々と讀ひながら、興に乗じて舞ふこと三度、其のまゝ、出陣して十九日此處に義元の本陣を襲ひ、暴風猛雨の中に一撃義元的首を打ち取つたといふ面白い所である。▼横須賀海水浴場は驛の西二里十町の海岸だ。

琵琶 桶狭間 (大府)

轟くいかづち篠つく雨、あやめもわかぬ闇の夜を、神のたすけと唄づたひ、響を包み草摺巻きて、地切攻め入る必死の三千騎、大千沓掛大高笠寺の、中干野にも山にも満ちみちたる、四萬五千の駿河の軍勢、明日は清洲を攻め落し、山河破竹のいきほひにて、尾張の國を定めんと、中吟心おごりの酒宴、松の嵐は琴のしらべ、鳴神のおとは鼓のひびき、世に心地よき夕やと、中干變化中 佩きたる太刀の緒うちとけて、歌ひつ舞ひつ興の夜も、いとたけなはなる、崩れ折しもあれや、四面に起る

関の聲すは夜討ぞといはせもあへず、雨よりしげき寄手の鎗先、嵐をしまくかたきの太刀風、天たちまち覆へり、地みるく裂け、きらめく稻妻光りのひまに、大千二千餘人の玉の緒は、中干草葉の露と消えにけり、あゝ定めなき人の世や、頼まれぬ人の身や、さもいかめしく轟きし、中切り名はたゞ夜半のはたゝがみ、夢の名残の松風も、昔のあとやたづぬらん、五月雨寒き桶狭間。

美濃に妻もち尾張に住めば雨はふらねどみのこひし (薩摩ぶし)

【大高】 二二六哩九、▼大高城趾 は西南七町大高村にあつて、登り口に大高城趾と書いた標木が建つてゐる、當時は廣さ五十九間南北十八間であつたそうだが、今は拓かれて民家となつてゐる。登りきつた頂上に碑があつて、碑前には城趾から掘り出したといふ古い小さな塔が置かれてゐる。此處は義元の妹婿織田長照が守つてゐたのであるが、周圍が皆織田の城であるため、兵糧攻めに違つて、樹の皮、草の根を採つて粉にして圓めて食つたと言ふ。義元は夫れを聞いて諸將に命じたのであつたが誰も引き受けて兵糧を城に入れやうとするものがない。時に徳川元康(後家康と改名)質となつて、駿河にやつたので、義元は「岡崎衆は三河の案内に候、相計らふて兵糧を入れ給はり候へ」と命ずると、元康は早速に引き受け、永祿元年四月十八日謀略を以て織田の諸將を散々に欺き、安々と兵糧を城中に入れて、敵も味方をもアツと言はせたといふ面白い話の残つてゐる所である。▼鳴海は驛から十町往時の濠濱今は一里を

桶狭間

桶狭間

隔て、古歌に名高い千鳥の名所も今は名のみになつてしまつてゐる。町には有松絞を賣る家が多いので却つて鳴海絞の名の方で世に知られてゐるのである。

【熱田】

二三一哩四、名古屋電氣、愛知電氣、熱田電氣の接續點、古の宮、熱田神宮があるのが名高い。今は名古屋市の一部となつてゐる。有名な白鳥の貯木場があつて、木曾の木材を貯へてゐる。▼熱田神宮は南五町、電車で行けば僅かに三錢、官幣大社である。日本武尊東夷を平けて歸途、草薙の御劍を此に安置し給はれてから、後世廟祀永く其の靈威を仰ぎ、朝廷の崇敬は伊勢大廟に亞ぐのである。▼八劍神社は南西六町、大宮の南にあつて下宮と稱せられてゐる。▼白鳥御陵、は西九町、▼誓願寺は南西四町▼第八高等學校は東二十五町、▼熱田兵器製造所、は東北六町、▼日本車輛會社は東南二町▼愛知セメント會社は東南九町、▼名古屋港は西一里、電車賃五錢、▼常滑町、は東南約六里、電車賃四十二錢である。常滑焼といふ土器の産地である。名産はセメント、メリヤス、喇叭、麥稈眞田、經木眞田帽子などである。

【名古屋】

二三四哩六、名古屋は三府に亞ぐ大都會で、今熱田を併せて人口は四十五萬二千に達し、近時名古屋港を築いて開港場となつたため、監港線を敷設し、鐵道は東海道本線、中央本線が並に合して又岐れ、一は岐阜から近江を経て京阪に向ひ、一は伊勢路を経て同じく京阪に向ふといふ要衝の地で、丁度畿内と坂東との中間、尾張、美濃、參河、伊勢の山々が別に一區劃を形成して此の地を益々發達せしむるやうな具合になつてゐる。加ふるに地は全國無比の沃野と言はる、濃尾平野の南部に位して、水利の便を借りやうとすれば、伊勢灣に臨み、木曾川を控へてゐるといふ、東西南北實に交通の要路に當るのである。人情、

桶狭間

風俗、經濟等に於ても亦東西勢力の中間で、此處から東は凡て東京の影響をうけるしも、西は何うしても大阪の影響をうけるやうになるが、此處だけは獨立し得らるゝのである。近頃稱して中京と言ふも亦實に然る所以があるのである。名産は織物、漆器、陶磁器、時計、七寶燒、扇、團扇、麥稈眞田、切干大根、佛具、燗寸、樂器、メリヤス、足袋、セメント等て材木や米も亦此の地で集散するのである。市の内外には、名古屋電氣、愛知電氣、熱田電氣、尾張電氣、瀬戸電氣、下の一色電氣會社の電車があつて、賃金は區制で、名古屋電氣は一區二錢、其他は一區一錢である。自動車は四人乗市内一時間三圓五十錢、市外一時間三圓六十錢である。

「伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ」と諺はる、其の城は有名なる。▼名古屋城、徳川氏が前田、加藤以下二十六大名に命じて築かしたもので、建築の宏壯、結構の雄偉、實に目ざましいものである。特に五層の天守閣は、加藤清正が自ら望んで造營したもので閣上の一雙の金の鯨が朝日夕日に映じて輝く有様は、數里の遠方から望んで尙且つ美事である。驛の東北二十六町、今は離宮となつてゐるのである。▼大須觀音は東南二十四町、▼七ツ寺は東南二十六町、▼東別院は東南約一里、▼西別院は東南二十七町、▼日蓮寺は東一里二十七町、▼名古屋港は南一里半電車賃七錢、▼舞鶴公園は東一里五町電車賃七錢、▼中村公園は西一里電車賃五錢、▼豐太閤及清正の生地として名高く豊國神社を中心として櫻化楓葉の美觀、春と秋とは殊によい所である。▼八事山は尾張高野山といはれて、風光の美又賞すべく晩春には躑躅が満山を蔽ふて咲いて實に美麗である。東二里、電車賃は十五錢、▼愛知縣廳は東一里二十三町、▼市役所は東二十二町、▼控訴院は東二十三町、▼商品陳列館は東南二十三町、▼第三師團司令部は東北二十五町、▼醫學專門學校は、東一里、▼農事試験場は西二里、▼

愛知育兒院 是東一里、名古屋養老院 是東十五町、日本銀行支店 是東二十一町、日本陶器會社は北十六町、伊藤デパートメントストア 是東二十一町、鈴木バイオリン工場 是二十五町、御園座は東十二町、末廣座は東南二十一町である。

史傳 信長の奇策 (名古屋)

信長の父は備後守信秀といふて、天文十八年の春彌生の花と共に散つて了つた、其時が恰度信長が十六歳大抵の息子であつたら、無論途方に暮るのであつたが、信長は其様な意氣地のないぐうたらではなかつた。

抑々其時代の尾張は、實に風の前にある燈火の如くて、危い事此上もなかつた、隣國の美濃には齋藤道三といふ老功の狡爺があり、東には朝日の昇るが如き今川義元があつた、甲州の武田の隙あらばと狙ひ、越後の上杉は戈をとつて天下に名を成さうとして居る、虎視眈々とは當時の世を評するに適切な詞であつた。

其危ない世の中に僅か十六歳の少年が、假令、半郡でも領して行くといふのは非

常な困難でなければならぬ、夫を信長は平然として押通さうとする。

信長の父、信秀が死ぬ前の月に、永く争闘をして居たが、遂に勝敗の數が知れないので、互に婚姻政略の得策であるのを悟つて、茲に齋藤道三の娘、濃姫を信長に娶せ迎えて平和は結ばれたのであつたが、併し、當時の婚姻なるものは、多く政略の爲に用ひられて、稍もすれば隙を窺うて滅ぼさうとする、時には親子でさへ争ひ兄弟でさへ、鬭ふた、武田信玄は父を逐ひ、信長の弟信行は兄を殺さうと謀つた位だつた、

濃姫を送つて表面平和を構じた齋藤道三は、無論、腹からの平和ではなかつたのだ、斯くして尾張の形勢を窺うて、一繋に踏潰さうとした、亦織田信秀とても、此婚姻によつて永い平和を望んで居ない、互に其隙を窺つて居たのであつた。

然るに信秀の死は、實に道三の乗すべき好機會であつた、道三の眼は俄に光つて來た、併し、信長の胸の中には或成算があつた。

信秀が死ぬと、其葬式に列なつた信長の行爲は、臣下一同に眉を顰めさせた、大切の父君の葬儀に信長は立つた儘で焼香した、重臣の平手政秀は館に戻ると強諫する。

『君、今日の御行爲、ありや如何なる仕合せに御ざりまするか、苟くも御父君の御葬儀に、禮をかけたる……』

信長は、老臣平手の意見を黙つて聞いて居た。が稍あつて口を開いた。

『俺が悪かつた、三十五日には供養せう』

信秀在世の頃の信長は是程に愚かではなかつたが、父死去の後は頓に愚昧にならせられたものであると、窃に胸を痛めたのは、敢て平手のみではなかつた。

『ハツ、有難き仰せ、御供養然るべく存じまする』

其儘御前を退つて了つた、信長は俄かに命を傳へて

『我領内通行と在住とを問はず、僧侶を殘らず引連れろ』

戦國時代には、僧侶まで其の具に使はれて居た事は無論である、領内通行の僧侶は一々清洲へ引揚げられた、在住の僧はいふまでもない、三十五日までには殆んど三百餘人になつた。

當日は信長が自身萬松寺へ乗出して、父の爲め供養讀經せよと、莫大の布施を與へて經を誦ませた、捕へられた僧侶は殺されもせんと思つて居たのに、意外にも布施まで貰うたので、夫れより三日三夜、大供養を營んだ、而して放たれた僧侶達は此の時の信長の愚かな態度を見て何のやうなことを世間に傳へやうか。

信長は馬に跨り、赤い陣羽織を着て、片手に瓜を持ち、涙をたらさんばかりにして、清洲の城下を毎日歩いて居た其の阿呆さは諭へやうがない、此の事が直ちに近國に響いて來た、齋藤道三は、ニヤリと北叟笑を洩らして、

『道空』

道空とは堀田道空というて、齋藤家の片腕と頼まれた重臣である。

「ハッ」

『世の中は、いよ／＼面白うなりさうぢや』

『ハッ、而て何事が起りましたか』

『いや、事も事、大事ぢや』

『大事とは』

『それ信長の白痴よ』

「ハッ」

『聞く所によれば、斯々ぢや實否を糺して手に入れやうか』

『それ良策かと存じまする』

『耳をかせ』

「ハッ」

主従は何か潜々と語つて居たが、道三は膝を打つて。

「ウム、面白い喃」

『御家萬々歳、大慶に存じます』

「ハッハ、、、」

秘密の相談が終ると忽ち使者が岐阜（其頃は稻葉山城と稱す）を離れて尾州へ来た、信長が書状を披見すると、斯ういう意味であつた。

兩家婚姻を結んだが、未だ婿殿に會ふた事がない、兩國境、富田の寺に於て、婿舅の對面をいたしたいが、御都合は如何であらうか、宜しくは御返事にあづかりたい。

信長は重臣に一應の相談もなく、承知の旨を答へてやつた、此後で此事が知れたので、織田家重臣等の驚きは格別で、林佐渡、柴田勝家、平手政秀等打揃ふて御前へ出た。

『打揃ふて何事ぢや』

三人は容儀を正して。

『餘の儀でもござらぬ、美濃との御對面、彼は老獺、如何なる椿事出来いたすやも計られませぬ、此儀お止まり願はしうて……』

信長は不思議さうな顔をして、

『なに、舅に對面いたすが悪いと、莫迦な、世の中に婿と舅が會うに、何の不思議があらうぞ、ならん、行く』

『さ、仰せ御道理にはおざりますが、何も婿舅の對面が悪いではござらぬ、只對手が良しう御ざらねば……』

『對手が悪いと申して、俺には舅ぢや、舅と婿が會うに何の仔細がある』

『ではおざりますが、舅にもよれ、道三は……』

『もう可い、道三は信長の舅ぢや、婿と舅が對面するに……』

三老臣が如何に止めやうとしても信長は肯かない、是ほどに暗愚の君ではなかつ

が、如何なる天魔の魅つたか、最早織田家の運命も定まつた、と胸中に歎きながら、致し方なく御前を退いた。

彌よ當日、信長は準備の供を從へて清洲を立つた、富田の町近くなつても其供の規律なさ、赤い陣羽織の信長を先頭に、足並も亂れて三々五々、村の祭禮に行くが如き状況であつた。

齋藤道三は、此の對面の結果によつては、直ちに兵を差向けて、尾張は己の手におさめて了ふ考へであつた、朝早くから富田の町に待受けて、とある町家の簾の隙間から、信長の様子如何にと見て居た、懸て婿信長を先頭に、人數は彼是五六十人あらうか、威もなく、容もなく、規もなく律もなく、混亂錯雜、之が武士の行列と疑はしめた。

此状況を見た道三の胸は、跳るばかりで、

『フウ、さては思ふに違はぬ、可し〜』

と獨り頷いて直に對面所なる正法寺へ駈戻つた。
 此日の接待は堀田道空が承はつて、自ら先に立つて案内をする、廣間には設けの席が用意してあつた。

道三は先に席に着いて、馬鹿婿信長の入つて來るのを見て居た、然るに今町中で見た信長とは、全然異つた服装に、何となく眼光さへ人を射るやうだ。

席が定まつて先づ道三が口をひらいた、

『遠路のところ、能う見えられた、俺が舅道三ぢや、以來親交を……』

軽く頷くのをジロリと見た信長は深藍の素袍の袖を正して佻となつた、太い眉はヒリと動いて

『あいや黙んなさい、此信長を如何に欺からうとて、汝如きには欺かれぬぞ』

『エ、』

『其方舅道三とは眞赤な偽り、只今町中の只ある町家に、我等の通行を見て居た

爺に相違ない、舅などは無禮至極、其儘には捨て置かぬ』

と言ひも終らず刀の柄に手をかけて、立上らうとした。

流石の道三も此時は色を失つた。堀田道空は主人の大事を見て聲をかけた、

『いや織田殿、過まられぬ、夫こそ正しく舅御でござる』

といふ尾について道三も漸く口を開いた。

『婿殿、俺ぢや、町中で見て居つたのも』

『えッ、舅御が、而て如何なる仔細がござつてか』

之には彌々道三も氣を打たれて、少しく躊躇た、豈夫に有の儘には言はれぬ。信長は寸毫の透もない。

『さ、仔細は……』

と重ねて問ふた、道三は苦しさに笑つて。

『いや、左様に訊かれては迷惑ぢや、仔細はない、只可愛い娘の花婿ぢや、餘り

来やうが遅かつたて、早う見たうて宵いで居たのちやよ、無禮は許して玉はれ
ハ、ハ、ハ、ハ、

老獺狐の如き道三は、突ひに紛らして一時を糊塗した。

信長はニヤリと笑つて、

『さまでに思召すとは知らないで、只今の無禮、御容赦を……』

之で婿舅對面の式も終つて、互に居城へ引取つたが、道三の謀略は茲に悉く晝
餅に歸して、却つて此の對面あつた後は、城の警衛を固くするやうになつた、信長
のやり方は大概此の如くである。

頃日一月ばかり、信長は濃姫の、熟睡を待つて、何處ともなく閨を出て行く、度
重なつて濃姫も疑ひを起した、無論、城中に氣に入りの増花が出来て、夫へ忍ぶの
であらうと。

或夜、信長に向つて濃姫は言ひ憎さうに此のことを問うた。

『妾は決して、妬む猜む、といふ意ではござりませぬが、城中にお氣に入り
の者でもござりまするならば、どうぞ御遠慮なう御つしやつて下さりませ、寢て
居るのを幸ひに、忍んで行くお心が恨めしい、夫よりは誰々の許へ通うのちや、
とたつた一言仰しやれば、妾とても快う眠られます、亦女子によつては、お
側へ侍づかせましても可いかと存じます、どうぞお隠しなく、お明し下さりませ』
と流石女の、口でこそ奇麗にいふが、眼には妬ましさかほの見えて居た。

信長は只ニヤリと笑つて

『ハ、ハ、ハ、是は飛んだ濡衣ちや、何で汝といふ者があるのに、他の女に手をつけ
てなるものか、安心しておされ』
濃姫は却々此位の事で承知は出来ぬ。

『いえ、お隠しなさるには、及びませぬ、妬ましいの、嫉みのといふことではござ
りませぬ、何卒御遠慮なう仰しやつて下さりませ、慈悲生中、お隠しなさるがお

怨めし……』

と怨じ顔に、信長に縋つていふた。

『何のく、左様浮いたことではないわ』

信長は飽までも言はじとする。

『いえ、お隠しなされても、そりや無徒と申すものでござります、毎夜妾の寝息を窺ひ、聞を出て、早曉お戻りなされるのが、何よりの證據でござります、さ、どうぞお隠し遊ばされず、お打明け下さりませ』

信長は軽く、

『ハ、ハ、』と笑つて、

『何を申す、それく、妬まぬ嫉まぬといふ口の下から、夜部屋を出て、曉方歸るから、他に増花が出来たのぢや、と申すが、何も夜更けて部屋を出たればとて、他に女があるとはかりは定まらぬものぢや、實は喃』

と言未了て四邊を見廻し、聲をひそめて。

『人には言はれぬ秘密があるのぢや』

『えッ』

『さ、夫で早曉歸るのぢや、他に仔細とてはない』

濃姫は是だけの答へては満足が出来ぬ。

『而て其の秘密と仰しやいますのは……』

信長は首をふつて

『いや、そりや言はれぬ』

言はれぬとあれば猶疑はしい、濃姫は。

『それ、御覽じませ、言はれぬといふは、矢張り然ういふ疚しい事を爲されて居る

からでござりませう』

『いや、疚しいことは少しもない』

「いえ、仰しやられぬのは、確かに夫……」

「莫迦を申せ、秘密ちやて言へぬまでちや」

「さ、それが怪しうござります」

「何故に」

信長は態と驚いたらしく見せた。姫は得たりと切込んだ。

「何故と仰しやつて、夫婦は身體こそ異なれ、心は同一、何事も打明けて美濃の事

語れと、ツイ先刻にまで仰しやれたではござりませぬか、さ、女子のことてなく

はお打明けなされても仔細はござりますまい、夫ともに打明けなさらぬは、いよ

〱他に増花が……」

「フーム、却々汝は巧に申す喃、成程、夫婦は何事も隠さぬものと申した、が併し

此事ばかりは申されぬわ」

姫は泣かぬばかりに打怨じて。

「さ、夫がお恨めしうござりまする」

と涙を流して信長の膝に顔を埋めた。

信長は當惑氣に見えたが、やがて。

「然らば申さう、聞いて呉れ」

「えッ、お聞かせ下さりますると」

「ウム、が併し大切な事ちや、夫婦は一心同體洩らして呉れるな」

「はい、假令どのやうなことも……」

「よし、實は斯ういふ事情ちや」

と聲を潜めて信長が語り出した。

「汝も知つての通り、我家と美濃の家とは讐敵に如しい間ちや、汝の前では言ひ難

いが、何時かは之を滅ぼさねば、我身が危い、乃て種々と手を廻したと思ひなさ

れ人の心ほど測られぬものはない、汝の家の杖柱ともいはる、堀田春日の兩家老

あれが此信長に味方したのぢや」

「えッ」

「さ、然うなつてからの打合ぢや、彼等兩人が心を合せ、隙を窺うて山城殿を殺さうといふ」

「えッ」

「驚くな、夫のみならず、事成就の曉は、子丑の間に火を揚ぐべしと、固く約束したのが最早一月ほど以前ぢや、火の手を合圖に兵を進め、忽ち美濃を我が掌に握らん計略、其火の手を見んと毎夜怠らず聞ぬけた、事情といふのは之ぢや、が決して此事は人に語るな、汝の親御、山城殿の身に拘はる大切、夫ゆる、秘密にとは存じたが、堅い誓といひ亦濡衣の心苦しさに、打明けたのぢや、疑ひは晴れたであらう喃」

心の底から迷惑さうに信長が語つた、聞いて居た姫の驚きは、増す花の名を聞かされるより猶辛かつた、あらう事か、父の身ばかりでない、齋藤一家の一大事である、信長は念を押した。

「諄い様ぢやが此事ばかりは他に洩らして呉れやるな、必然、斷つて置くぞ」

「はい」

とは言ふたけれど、何て此大事を知らせずに置かれやうか、此儘に過ぎれば、實家は滅びて、自分の身をよすべき家は廣い世間に無い身となつて了ふ。此上は、と決心の臍をかためた。

信長は此事を打明けて以來、翌の日からは、家臣二人が姫の附添ひとして、廁へ行くにも、形に影の添ふ如く、少しも側を離れない、然れば、此一大事を知らすべき手段もないのであつた。

或日、何うした都合であつたか、此二人の者が信長から急に召されて、出て行つた、此の時ぞと、姫は手早く一通を認め終つて、國許から附添ふて來た五助といふ

下僕に忍んで渡した、五助は心得て、窃と邸内を脱出て清洲の城を後に、間道裏道を忍んで美濃へ入った、美濃まで来れば最早安心、直ちに稻葉山城へ姫の密書を齎した。

道三入道は、何事やらんと抜いて見ると、云々、兩家老を誅せずば、美濃の家に拘はると、細々と認めてあつたから、道三入道、一度は驚いたが、亦一度は喜んで、

『流石、我が娘ぢや』

獨領いて、春日堀田の兩家老を直ちに召出した、無論手配が届いて居たので、道三から信長の内通の由訊された、けれど、身に覺えのない事であるから、兩家老は知らぬ、存じませぬと答へて居た、途端に奥の蔭から跳り出した力士五人は、忽ち豫定の如く兩人を切殺して了つた。

美濃家に於ける堀田春日は、恰も股肱の如き忠臣であつた、其手足を自から掩り

とつた、道三の勢力は、恰も星の降るが如くに落ちて了つた。

信長は兩家老制收の報を得た時に、ニヤリと笑つて、

『最早美濃も我が手に入つた、喜べ』

と自から立つて敦盛の舞を一差舞つた。

後幾もなく、世に時めいた美濃殿も滅び、稻葉の城は名も岐阜と改まつて、信

長の居城になつて了つた、信長の奇策は當時の諸侯を如何に驚歎せしめたであらう

か。(經濟庵作)

今古英雄興與亡

火山數十爭能敵

我欽右府獨斷芳

一寸八分黃熱香

(藤井竹外)

【枇杷島】二三七哩一、清洲は西北三十町、織田信長勅興の地である。城址は五條川の西畔にあつて老樹と濠の趾とが僅かに昔の跡を存してゐる。町には愛知縣農事試験場がある。▼甚目寺觀音は西

尾山瀧水

三十町、仁王門は七百年前の古い建築である。

【稻澤】 二四一哩五、▼萬徳寺 は西北四町、十三層の石造多寶塔がある。▼國府宮神社 は西十一町、社寶として古の驛鈴が藏してある。驛鈴とは昔諸國を往來するときに驛の人馬を出す爲めに、公の符號として渡される鈴であつて、朝廷の命をうけて征伐に出る大將軍などによく渡されたものである。山陽の日本外史などを讀むと、驛鈴を賜ふといふ言葉がよく出て來るのである。

【尾張一の宮】 二四五哩一、尾西鐵道接續點である。同線は此處から關西本線の彌富まで行つてゐるのである。▼眞清田神社 は北八町の處にあつて、神寶の假面二十三を藏してゐる。稀世の逸品である。社格は國幣中社に列せられてゐる。▼妙興寺 は東南十五町、殿宇高雅を以て現はれ、▼津島神社 は尾西線津島驛附近にある。有名な古い社で素戔鳴尊を祀る。其の祭典の船祭は世に知られてゐる盛大なものである。▼犬山城址 は東北四里、木曾川の流を眼下に見る景勝の地であつて、電車賃は二十九錢である。▼蘇東整理耕地 は西南十五町、約二千町歩あつて河川の改修をなし從來の水腐地が、今積々たる良田となつてゐる。▼一の宮整理耕地 は驛附近であつて、▼八開村青年會 は尾西線中津島驛の東北一里半のところである。名産は縮布、生糸などである。

【木曾川】 二四八哩七、汽車が驛を出てから直ぐに渡る川が木曾川である。川は尾張と美濃の境であつて、▼木曾川堤の櫻 は有名なものである。驛の東北半里、自動車なら三十錢、人力車なら二十錢で達する。【岐阜】 二五三哩四、岐北輕便鐵道、長良輕便、美濃電氣の接續點、市は濃尾平野の北偏に位し、飛驒

高原を脊にした中仙道の要地であつて南に下れば直に東海道にも出られるのである。稲葉山の秀、長良川の清を併せて山水秀麗、往時戰國時代には、齋藤氏が茲に據り、次に織田氏が茲に居つたが關ヶ原の役後城遂に廢せられてしまつたのである。人口は五萬二千、名産は縮緬、傘、提灯、團扇、紙製ナフキンなど、又米、美濃織、美濃紙の集散地である。名物は鮎の粕漬、鮎うるか、松風、守口漬など名高い。市内電車は長良橋まで七錢である。▼金華山 即ち稲葉山は北三十町、長良川に臨んだ山色水光秀麗の地であつて西の麓に伊奈波神社がある。▼岐阜公園 は北三十町、日本一と稱せられ、世界的にも頗る有名である名和昆蟲研究所は、此の公園の内に在る。▼長良川鮎飼 は北三十三町、毎年五月中旬から十月中旬まで、鵜舟七艘若くは五艘を一組として、上流から且つ流し且つ下るのである。月明を厭ふので上弦の夜は月の没するのを待つて出て、下弦の夜は月のまだ出ないうちに舟を出すのである。舟毎に篝火を點するのど眞闇の中、火光水に映じて螢が水面を渡るが如く頗る美觀である。鵜匠は鵜を繫いだ十二條の繩を持ち、魚が篝火に集つて來たのを察して咄嗟鵜を水中に放つと、舟子等は篝を執つて鵜を亂打し、叱々聲を揚げて鵜を勵ます。鵜は之れに勢ひを得て波を切り流れを断ち、或は没し或は浮み、鮎はために逃ぐる道がないのである。鵜已に七八尾を啣めば即ち波上に浮ぶ。鵜匠繩を曳いて鮎を籃の中に吐かせ、更に又水中に入らしめる。其業の早いのが腕である。觀る者は別に舟を備つて之れを見るので其の奇觀は實に魚の美味と共に古來人口に膾炙する所である。(このあたり目に見ゆるもの皆涼し 芭蕉)(面白うてやがてかなしき鵜舟かな 芭蕉)(聲あらば鮎もなくらん鵜飼舟 越人)(夜やいつの長良の鵜舟曾て見し 蕪村)

▼岐阜縣廳 は北二十町、▼市役所 は北二十一町、▼農事試験場 は南十五町、▼物産館 は北二

尾山 瀧水

十町、▼美殿座 は北十四町、▼富田村青年風俗改良會は北五里、▼池尻整理耕地 は東北四里半、電車の便がある。長良川から新に水路を開鑿したのは小規模の農業水利事業の好参考資料である。▼根尾砂防工事 は岐北鐵道北方驛から九里、明治二十四年の大震災で崩壊した山腹の設備工事である。▼飛彈地方の勝を探るには、岐阜から關、菅田、金山を経て飛彈に入り、益田川の流に沿うて北行すると、所謂中山七里の勝がある。下原から下呂に至る七里の間は清流巖屋の美を賞することが出来、路は迂回曲折して其の間を通じてなる。山に迎へられ水に送られ、恰度南宗派の畫巻を展くやうな思ひがある。小坂に至れば有名な朝六つ橋の景勝があり、此處から木曾御嶽登山の道があつて木曾路に出ることが出来る。高山は飛彈國の中央、宮川が其の中を貫いて、山は青く水は深く、風光明媚、小京都といはれてなる。城址は今公園として眺望の美を恣にし、東山に登ると、日本アルプスの名ある飛彈山脈の連峰が相連つて聳えるのが頗る雄大なる偉觀である。高山から肥後の五箇、阿波の祖谷と共に、別天地の稱がある白川村を経て、中越鐵道の城端驛に出る道がある。高原川に沿うて越中の富山に出る道もある。野麥峠を越えて信州松本に出る道もある。乗鞍岳に登る人は此の野麥峠の道を取るがよい。▼横籠村大八賀村は高山から東北二十一町で、高山岐早間には自動車の便がある。賃金九圓、行程三十四里、九時間て達することが出来るのである。

【徳積】 二五七哩三、▼惡俣町 は南一里人力車賃二十五錢、町には、▼豐太閣一夜城址、▼滿福寺がある。名産は米、柳行李である。

史傳 養老の瀧 (大垣)

靈龜三年九月、美濃國の守護人より朝廷へ奏聞していはく、當國多度と申す深山

養老の瀧

【大垣】 二六二哩一、月田氏の舊城下である。▼巨鹿城 は驛の南四町、關ヶ原の役、石田三成が諸將と軍議を凝らした所、天守閣が今も尙巍然として聳えてなる。今は公園となつて杖を曳く者が多い。人力車賃十錢である。▼養老の瀧 は西南三里半、養老山中にある。山は高くはないが老樹と石運と又賞するに足るのである。瀧の高さ十丈五尺、幅十二尺、瀧々として落下する下の瀑庭は、唯一枚の岩石であつて水は漸く膝を没する位、衣を濡して瀑下に行くことが出来る。昔孝子此の瀑を汲んで獻ずると水が酒に變じてゐたといふ物語があつて有名である。養老鐵道三等二十三錢、養老驛から人力車上り二十錢下り十二錢である。(瀧千丈ちぎれてめぐる雲涼し 寸馬) (若もちや手水とばしる美濃の瀧 言水) ▼養老神社は瀧から四町、▼霞間ヶ谷 は北西三里、池野まで二里半、養老鐵道三等十六錢、櫻花の名所である。▼房島 は北四里、池野から人力車賃五十錢、粘流好適の地である。▼谷汲華嚴寺 は北六里、池野から馬車賃四十錢、▼攝津紡績會社工場 は北五町、▼後藤毛織分工場 は西北十町、▼養老村石畑整理耕地 は養老鐵道高田驛の西十町、地下水利用で成功してなる。▼養老砂防工事 は養老の瀑水源山腹の設備工事である。▼坪井竹林 は養老鐵道池野驛から西南半里、當業者の参考となるべき試験竹林の設備がある。▼北方村有林 は同池野驛から北三里半である。名物は生柿、干柿、柿羊羹、養老酒である。

より、醴泉湧き出で候ふ、その縁故を聞き糺すに、當國愛耆郡多度山の麓に住める小佐次と呼ぶ樵夫あり、性質親に仕へて甚だ孝心深く、貧しき身にて孝養をつくすこと、古の子路、曾參にも劣らず、その父年七十餘歳に及び常に酒を好みて飯を食せず、只朝夕酒を糧として齡を保ち、酒なきときは餓る苦しむ、小佐次は僅に樵夫を業とすれば、家はめて貧しく、身力を盡して働き、その身は粗食をくらひ、得るところの錢を悉く酒に易へて父を養ひ、いまだ妻を娶らず、一向孝養に丹誠をこらして倦むことを知らず、されども得るところの錢多からざれば、父に飲ましむる酒少きを常に悲しみけるに、或時山深く分け入りて木を伐り、甚く疲れたるま、岩の上へ伏してまどろみしが、頻りに酒の美き香鼻にかよひしかば、眼をさまして其の邊を見まはすほどに一筋の瀧流れ落ちて、瀧壺の水は酒の香あり、小佐次不審におもひ、試みに手にて掬ひ飲み試むるに、水の味ひ甘美くして、恰も醇酒の如くなり、因りて其の水を瓢に汲みとり、家にかへりて父に與へ飲ませしかば、父

大いに悦び、是はこれまでの酒より遙に勝りし醇酒なりと、あくまで飲みて大いに酔ひけるにぞ、小佐次は深く悦び、これ天道より與へたまへるならんとて、夫より日毎に彼の瀧の水を汲みとりかへり、父を養ひければ、おのづから貧しさを忘れ、得るところの錢を以て衣服衾などを買ひ求め、父が身を温かにし、益々孝心を盡せり、一村の者是を傳へ聞き、我もくと彼の瀧の水を汲みとりて飲みしかど、常の水にかはらず、小佐次が汲みとれば、始めて美酒の味はひあり、是れ全く彼が孝心を感じたまひて、神佛の與へたまふ所ならんとて、衆人申し候ふ、誠に不思議の醴泉にて候へば、奏聞に及べりと申す、天皇勅聞ましめて御感淺からず、誠に孝心の徳によつて、さる醴泉の湧き出でしは、國の祥瑞なりと勅詔したまひ、美濃の守護人には賞を賜はり、群臣を従へて濃州多度山へ御幸したまひ、件の瀧を勸覽さし、樵夫小佐次を召し出でさせたまひ、瀧の水を汲ませて聞こし召し給ふに、實にも甘美にて常の水と異なりたれば、勸感斜めならず、供奉の百官にも飲ましめた

まふに、皆舌打ちして感じ、面部手足を洗ふ者は皮膚なめらかになり、疾ある者は疾痊え、痛みあるものは痛みを忘れ、疵ある者は疵を洗へば、疵治りけり、天皇是等の奇特を聞き召し、小佐次が老を養ひしを以て、養老の瀧と號けたまふ、借小佐次が至孝を御褒賞あつて、田園を賜はり、その孝徳を表はし給ひ、遂に鳳輦をめぐらされて都へ還御なしたまひてのち、年號を養老元年と改元したまふ、(通俗日本)

【垂井】二六七哩二、南宮神社は南十三町美濃第一の宮であつて今國幣中社に列せられてゐる。山は關ヶ原役毛利秀元の陣所、春王安王の墓は南四町、垂井清水は四四町、南宮整理耕地は南四十五町、府中青墓二村整理耕地は、北東二十町、表佐村整理耕地は南十町、千餘町歩、悪水改修を主としたのである。名物は松茸である。

講談 小牧山合戦 (垂井)

時は天正十二年甲申三月二十一日、諸軍残らず大阪を立つて、先陣は既に犬山の此方なる大豆戸の渡しを打越えて犬山五郎丸邊に陣を連らね、其の人数五六里の間

は平一面の軍勢ならざるはなく、秀吉公大阪を出馬して、二十四日漸く大垣へ着陣いたし、愈々大垣城に於て此度の手配り御相談に及びました、先づ第一番の左備へは日根野備中守弘成、弟彌次右衛門弘高、長谷川藤五郎秀一、同じく右備へは筒井四郎貞次、其の中軍は三好孫七郎秀次、一柳市助直盛、堀尾茂助吉晴、第二番の左備へは細川與一郎忠興、同じく其右備へは堀久太郎秀政、小川土佐守、中軍の二番は蒲生忠三郎氏郷、木下半右衛門、又左の三番は氏家内膳正、徳永石見守入道、右備への三番は黒田官兵衛孝高、左の四番は生駒市右衛門一政、世良田左馬介、右の四番は高山右近友行入道、金森五郎八入道、明石與四郎、中軍の三番は伊藤掃部介、前野勝右衛門、山内猪右衛門、中軍の四番には丹羽五郎左衛門長秀、左の五番は木村小隼人、右の五番は福島市松正則、脇坂甚内安治、平野權兵衛長康、中軍の五番は野々村肥前守、山名右衛門大夫豊國、糟屋助右衛門武則、左の六番は加藤孫六郎義明、右の六番は尼子六郎左衛門、中軍の六番は加藤虎之助清正、第七番は秀

吉公の御本陣であります、警護の面々には毛利河内守秀包、伊木半七、櫻井佐吉、伊東主計、赤松彌三郎、竹中半兵衛重俊、平野九右衛門此の他旗本の面々前後左右に控へ、旗本支配頭としては片桐助作且元、石田佐吉三成御座の傍に控へたり、本營の人数は三萬餘人、後陣は蜂屋出羽守頼隆、淺野彌兵衛長政、富田兵左衛門、津田小三郎、柘植與左衛門、吉田内匠頭、戸田彦五郎、宮城藤左衛門以下二萬八千餘人、兵糧小荷駄を奉行いたす、都合十二萬八千餘人、二十七日秀吉公大垣を出立に及んで犬山に着陣し、諸軍を従へて夫れより羽黒樂田の邊りを巡見いたし、青庭といふ所が屈竟の地でありますから其所へ本陣をお据ゑになりました、秀吉公其の日の扮装を見れば、金の唐冠の兜、緋絨の鎧、萌黄錦の陣羽織を着し、黄金作りの太刀へ虎の革の尻鞆を掛け、鷗形に是を佩き、月毛の駒に紫二段の厚房を掛け、紅の手綱を搔繰りて悠然と歩ませ、小牧の方を見渡し給ふ、此の様子を見るより三遠の將士、ソレ那れに進みしは秀吉なり、人もなげなる振舞、イデ一當ていたして

荒膽を挫ぎ呉れんと、俄に二發ばかりの鐵砲を打放ち騒ぎ立てるを、秀吉更に驚かず悠々と見渡して、尙も進んで馬を立て直し、小牧に對つて鞭を上げ大口開いてカラ〜と打笑つたる處の秀吉の面魂、四邊を拂つて見えました、此の様に逸雄の三州勢に於ては聲々に話をいたし、秀吉何をして居るか、大膽不敵なる處の有様、憎き振舞ひをなすものかな、此の儘に捨て置く時には御味方の恥辱になると齒を喰ひ縛つて既に進み出でんといたせしが、如何にせん上方勢は十二萬餘の大軍であります、此方は織田徳川合して四萬に足らん處の小勢なれば是非なく我慢をいたし、只面々心中に秀吉の傍若無人の振舞をば憎み居ります、されば小牧山に於ては家康公、俄に造りましたる處の井樓に昇り、諸將と共に秀吉の様を御覽になり、傍らに控へたる酒井左衛門尉に對して『家』汝急ぎ物見をいたして立歸れ』と言ふと酒井左衛門尉忠次『畏つて候』とあつて品川絨の鎧に六十四間の筋兜を頂き、銀の對鉾打つたるを頭上に頂き、迎へ備へとして大須賀五郎左衛門康高五百人、樂田村

の方へ繰出しました、左衛門尉忠次に於ては小高き所に駒を乗上げ、遙かに羽柴の備へをば見渡さんといたします、此の時上方勢は『徳川の物見と見えたるぞ、ソレ打拂へ』と先陣日根野備中守の陣中より四五百挺の鐵砲巢口を揃へて、ドードツと打拂ひました、左衛門尉少しも驚かず、小高き所に馬を乗上げ、心を鎮めてキツと見てあれば、第一番に日根野備中守、舎弟彌次右衛門、長谷川藤五郎、筒井四郎一柳市助、堀尾茂助、中軍には三好孫七郎、後陣の方には五色の吹貫き五十本、金の千成り瓢箪の馬章、五三の桐の大旗並びに妙満寺久遠院日乘上人の南無妙法蓮華經と書いたる七字の髻題目の大旗を押立て、是ぞ羽柴筑前守秀吉の本陣と見受けたり、續く十有餘萬、家々の旗馬章は雲霞の如く、總て五七里が間は皆敵兵ならざる處はなく、夥しき處の上方の軍勢、左衛門尉忠次、篤と是れを見極めまして、最早見残す處もないから、そこで馬に一鞭を加へてトツトツトツと小牧山を指して乗返さんといたします、日根野備中守の先手酒井の物見を追駆けんといたせし

が、大須賀の迎へ備へあるを見て俄に引返しましたるに依つて、難なく左衛門尉小牧山の本陣へ立歸り、家康公の御前へ罷り出ると、大將はお待ちかねてございますから、家『左衛門敵の状態は如何である』忠次ハツと頭を下げ、申上げんと致すると家康公『アイヤ暫らく待て其方が物見と我心と合せてみやう、互に筆を執つて入札をして見やう』と、家康公がお戯れには似たれども、忽ち筆を執つてお認めになります、左衛門尉も同じく認めまして差出だす、二通の書面を披いて御覽になると、家康公のお書きなされた事と符合いたして居ります、誠に驚き入つたる次第、家康公を御覽になつて、家『コレ、其方の物見と予が心と斯くの如くに合つた、敵將羽柴筑前守は普通の敵にあらず、固より智勇兼備の良將なり、彼れ事を計らずして素りに合戦を致するものにあらず、上方は斯くの如き大軍といふ事を味方へ報しめ我が陣中の銳氣を挫き恐れしむるの計略、其中に陣屋を構へる手段にして戦ふ心は更になし、先づ神妙にいたして居れ』といふ下知で御座いますから、茲で御説の趣

關ヶ原軍記

畏によりましたとお受けに及び、小牧山の御陣中は一層静肅にいたして居ります。

○小牧山書感

(故松林伯園述)

指點長瀨路
小邱留三顧跡
陰沮鷓鴣聲破
登臨予有感

蒼茫落日中
大木想三英風
煙寒麥氣通
欲賦竟難工

(永坂石塚作)

【關ヶ原】二七〇哩七、驛の附近東西一里、南北半里に亘る一帯の高原は、即ち關ヶ原の古戰場である、慶長五年九月十五日、三成家康の兩軍並に相會して屍山血河の大修羅場を現したことは今詳しく説き起すの必要はないが、當時の陣所々々には皆木標が建てられてあつて、地形依然として舊の如く、東西兩軍攻守の蹟今も尙指順し得らるゝのである。▼不破關趾は驛の西五町、宇松尾の大木月坂にある。(昔だにあればし不破の關なればいまはさながら名のみなりけり 良基)

關ヶ原軍記

慶長五年九月十五日、濃州關青野ヶ原の合戦は、徳川家御盛んの時の御記録第一

天下分目の大戦争、家康氏時に五十九歳、關ヶ原に御出馬になつて、虚空藏山天満山の中間に御陣をお取りになつた、然るに關西方は石田三成是を統率いたし、南宮山の岡ヶ鼻に陣をとつたが、關東方は七萬餘、關西方は七萬八千九百人、藤子川の流れを前にいたし、浮田中納言秀家が備を立て、また松尾山の頂きには、金吾中納言秀秋、麓には軍師大谷刑部少輔、平岡稻葉、戸田武藏守を先鋒として、關ヶ原街道に向つて備を張ります、先陣は肥後の國宇土の城主西攝津守行長、然るに九月十四日の夜に、大谷刑部少輔は、我が家來黄幌組の大將湯淺悟助高久、此者に申付けて、關東陣中の斥候をさせました、これを關ヶ原湯淺悟助の月夜の斥候と申して、英雄武者鑑に残りました、悟助が乗り出して關東の陣中を見渡すと、月玲瓏と照り渡つて居ります、その光に見渡すと、關ヶ原の街道に向ひ、金の七枚もちり、破芭蕉の纏が見えます、いはずと知れた福島左衛門正則、さては福島が先陣であるかと、猶つくと見渡して居ると、藤子川の上手に當つて、鎧蝶の纏が見えます、これ三州

關ヶ原軍記

吉田の城主池田三左衛門輝政、これを見て湯淺悟助、鞍壺を叩いて大いに驚き、さては關東勢、左右先陣を立つたと見える、一大事なりと引返して来て、大谷に告げたるより、吉隆承はつて、流石は豊太閣秀吉公なり、徳川家康をさして、軍中の麒麟と宣ひしが、宣なるかな、福島を先陣に立てさせたに見える、福島の手には小西行長の到底及ぶところでないと思はるにより、其夜のうちに藤子川に小西を向け、浮田を關ヶ原に向けまして、サア来いと充分の準備をなす、斯る事とは知らず福島は、明日の戦ひ天下分目の一戦に、行長を打破り、軍門に大功を立てんと、意居揚々として夜明を待つ、如何に夜が長いといひながら、早や東雲を告げる明島、福島陣頭に乗出して、小西行長御参なれと、小手をかざして見てあれば、こは如何に、白地に黒く七九の旗七ながれ、金の五百瓢の纏、これ備前美作兩國の主、太閣殿下の甥御、浮田中納言秀家卿なれば、大に驚き、さては小西と思ひきや、昨夜の中に浮田殿と變へしと見える、正則は豊臣家に育ち、太閣の御恩は山より高く、海

より深し、其現在甥御たる浮田秀家殿に槍を向けるは、冥途黄泉にまします豊公に申譯なしと、爰に正則の勇氣が挫けます、大谷は實に豪い方、併し浮田を爰で挫かなければ關東方に勝目がない、其處で正則郎黨を集めて、評議をして居ると、福島陣より一町ばかり彼方に、金をもつて正八幡大武神と尊號を書かれたる旗を押立て、井桁に猩々緋の纏ひ、金繩とりの小纏ひを立て、井伊兵部少輔直政の同勢、三千人乗り出して行く、それを福島が見て、大橋長右衛門を呼び、正如何に大橋、徳川殿に掛け合つて参れ、福島が先陣か井伊が先陣か、次第によつては正則居城に立歸るによつて、早やと尋ねて参れ」といふ、依つて大橋長右衛門、徳川内大臣の御本陣に参り、主人正則の口上を述べると、内府公 家康「正則が先陣に相違ない、井伊は斥候に出たのであるから、その心得て居るやう」といふ挨拶、立歸つて大橋は正則に此事をつげる、正則はさもあらんとニコと笑つた、折しも井伊直政の三千の同勢、三百挺の鐵砲を釣瓶かけに浮田の家老花房志摩守の陣中へ打込んで、關

志賀の浦波

ケ原の大戦は、先づ此の時に開かれました。(西尾慶演)

結果や、合戦の様子は、餘り堅苦しくなりますから、茲には大略して、只だ家康方が勝つたといふ事だけを申して置きます。

仁人無敵有誰争
五百餘年昏濁世

烏合三軍何所成
一朝四海屬清明
(太田錦城作)

志賀の浦波 (琵琶湖畔の勝)

郭公啼くや近江の西東

召波

【柏原】 二七五哩一、汽車が關ヶ原を出て、柏原驛に着くと此處は最う近江の國、かの歴史に有名な寝物語の里、は驛の東十八町である。此處は美濃と近江との國境で、古は兩國の民家が各一月づ、よりほかなくて、寝ながら兩國の物語をし合つたといふので此の名がある。今はなかく、昔のやうではない。

【近江長岡】 二七七哩八、伊吹山、は驛の北一里十八町、車窓から右に見えるのがそれである。濠洲四千三百尺、形勢雄偉、晩春でも、尙雪を戴いて白く、江北の鎮山である。此の山は昔日本武尊が御東

征の歸途、惡神が籠つてゐると聞かされて分け入らせ給ふた山で、大蛇が道に横たはつてつたのを躍り越えて進ませられ、それから病を覺えさせ給ふたといふ、伊吹神社、彌高山護國寺、松尾山護國寺などが附近にある。艾を産する。▼姊川古戰場、は北一里半、元龜元年六月二十八日、織田、徳川の南軍と、淺井、朝倉の北軍と激戦した所、姊川の右岸、東上坂と其の左岸野村、三田村との間、即ち龍ヶ鼻と草野川と合するあたりが、凡て皆古戰場である。但し最も劇しかったのは姊川の兩岸で、是れ即ち姊川合戦の稱ある所以である。

史傳 姊川合戦 (長岡)

信長其の勢ひを十三段に定め、一番坂井右近、二番池田勝三郎、三番木下藤吉郎、四番柴田修理亮、五番明智十兵衛、中條將監、梁田出羽守等堂々整々として備へ、又丹羽五郎左衛門長秀、氏家常陸介入道ト全、伊賀伊賀守範秀等は横山城の押手と定めらる、徳川勢は酒井左衛門尉、石川伯耆守を先手になされ、松平甚太郎家忠、松井左近、大須賀五郎右衛門、高天神の小笠原與八郎等、すべて二千餘騎、二陣とせらる、(中略)六月二十八日の曉に信長敵陣の様子を見らるゝに、淺井が勢八千は

姊川合戦

かり、野村に備へ東にあり、朝倉勢一萬五千ばかり、三田村に備へ西にあつて姉川を堺に陣をとれり、(中略)徳川勢先手弓砲打ちかくるを見て、越前勢の大將朝倉孫三郎此の手の敵は僅かの小勢なり、打たば忽ち破れんぞと下知なせば、平泉寺の衆徒心得たりと徳川勢に切つてかゝり、姉川を追ひつ返しつ戦ひしに、折節六月二十八日極暑なり、馬汗人汗流水に異ならず、(中略)北國無双と聞えし勇士真柄十郎左衛門直隆父子兩人は衆にぬきんで、働しが、向坂式部と渡り合ひ、草摺りの外れ一鎗突かれながら、式部が兜の吹返しを打碎き、あまる太刀にて鎗を打落す、式部が弟五郎次郎助け来る太刀を打落し、あまる太刀にて五郎次郎が弓手の股をなぎするたり、其弟六郎五郎吉政進み来る、其従者山田宗六、我が主人を討せじと進みけるを、真柄手の下に切伏せる、其ひまに六郎五郎真柄をかけ倒し、首を取る、真柄が嫡子十郎三郎直基は、青木加賀右衛門子、所右衛門一重と戦ふ、所右衛門が郎黨一人かけふさがりしを、太刀振上るより早く首打落す、所右衛門鎌鎗にて十郎三郎が

馬手の肘をなぎ落す、其ひまに朝倉孫三郎は危き命を助かり、虎御前山まで引取つたり、(中略)整々堂々たる十三段の備へ、十一段まで切崩され、信長が旗本も大に騒動し、既に危かりしを、神君御覽じ、さらばかゝれと下知し給ひ、越前勢をば追ひすて、浅井が勢の中へをめき叫んで馬煙を立てかけ入り給ふ、稻葉伊豫守は今朝より徳川勢の後陣に備へて、手を空しくして口惜しく思ひ居たりしかば、よき幸と同じく馳入りて突きかゝる、横山の押へに備へたる氏家ト全、伊賀伊賀守秀範が三千餘騎横鎗を入れて徳川勢と双方より揉み合ひ攻め立てれば、浅井長政力を盡し戦へども、終に戦ひまけて總敗軍となる。(三河後風土記)

【醒ヶ井】 二八〇哩六、▼居醒の水、は南東六町、日本武尊が伊吹山に大蛇を踊り越え給ふために、毒霧に侵され給ふたのを癒しまゐらせたといふ清泉である。

【米原】 二八四哩四、▼北陸本線の分岐点、▲法界坊の鐘は驛から約一里鳥居本上品寺境内にあつて、坊が巡錫によつて集めた金で建立した有名な鐘である。▼磨針峠、は東南二十五町人力車賃十五錢で達する。絶頂に望湖堂があつて、琵琶湖の風光が一眸の中に集まつて、東坡の「望湖樓下水如天」といふ詩は、實に此處のために言つたかと思はる、ほどである、▼筑麻神社、は西二十町、筑麻祭又は鍋祭といふ奇習

竹生島

て有名であつて、祭日は四月朔日、祭神は御食津神、古來御厨の神と稱へてなる。俚俗既婚の婦女には、大鍋を被つて神輿のあとを歩いて行くのである。再嫁の者は二枚、三嫁は三枚といふ風に鍋の数がふえて行くのであつて、昔は、小さい土鍋を板にのせて戴き、其の数の多いのを恥としたのを今は、反對に多いのを見榮とする風があるのは、貧富の度を現はすやうに變化して了つたのであらふ。古歌に

近江なる筑麻の祭とくせなん、つれなき人の鍋の數見ん

——伊勢物語——

【彦根】

二八八哩一、井伊氏の舊城下である。今人口二萬二千人、西は太湖に臨み、北に裏湖を湛えた水陸形勝の地である。茲から草津線貫生川に至る近江鐵道がある。彦根城は西北九町、人力車賃十二錢、附近、樂々園、八景亭、佐和山城跡などがある。多賀神社は近江鐵道多賀驛から六町、官幣大社である。▼永源寺、は同線八日市驛から三里で紅葉の名所、▼多景島、は長曾根まで二十三町人力車賃十八錢、それから湖上一里、和船往復が一圓である。▼竹生島は諸曲で有名な島、長曾根からはれも湖上四里半、汽船賃三十一錢である。▼滋賀縣水産試験場、は西南一里、▼小口組彦根製糸場、は西北二十三町、▼模範村鎌掛村、は近江鐵道日野驛の東南一里半。人力車賃三十五錢で達する。名産は、生糸、刺繡、佛壇、漆器、銅器、家具、醬油、紅蕪漬、湖魚罐詰などである。

曲謡 竹生島

ワキ、ワキツレ(官人)謡「竹に生る、鶯の、竹に生る、鶯の、竹生島詣急がん、ワキ、

竹生島

詞「そも〜これは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり、さても紀州竹生島の明神は、靈神にて御座候間、此度君に御暇を申し、唯今竹生島に參詣仕り候、ワキ、ワキツレ、道行、謡「四の宮や河原の宮居末はやき、河原の宮居末はやき、名も走井の水の月、曇らぬ御代に逢坂の、關の宮居をふし拜み、山越近き志賀の里、鳩の浦にも着きにけり、鳩の浦にも着きにけり、ワキ、詞「急ぎ候ほどに、鳩の浦に着きて候、あれを見れば釣舟の來り候、暫く相待ち、便船を乞はゞやと存じ候。

シテ(漁翁)謡「おもしろや頃は彌生の半ばなれば、浪もうらゝに海の面ツレ(女)霞み渡れる朝ぼらけシテ「長閑に通ふ舟の道、シテ、ツレ二人「うき業と無き心かな、シテ「これは此浦里に住みなれて、明暮運ぶうろくづの、二人「數を盡しても身ひとつを、助けやせんと佗人の、暇も浪間に明け暮れて、世を渡るこそもの憂けれ、よし〜同じ業ながら、世にこえたりな此湖の、名所多き數々に、名所多き數々に、浦山かけて眺むれば、志賀の都花園、昔ながらの山櫻、眞野の入江の船呼ばひ、いざさしよ

せてこととはん、いざよしよせてこととはん。

ワキ、詞「いかにこれなる舟に便船申さうのう、シテこれは渡しの舟にてもなし、御覽候へ釣舟にて候よ、ワキ「こなたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ、これは竹生島に始めて参詣の者なり、諸誓ひの舟に乗るべきなり、シテ、詞「げに此所は靈地にて、歩を運び給ふ人を、とかく申さば御心にも違ひ、又は神慮も計りがたし、ツレ、諸「さらば御舟を参らせん、ワキ「嬉しやさては誓の舟、法の力と覺えたり、シテ、詞「今日はことさら長閑にて、諸「心にかゝる風もなし、地「名こそさゝなみや、志賀の浦にお立ちあるは、都人が痛はしや、御舟に召されて浦々を眺め給へや。

地「所は海の上、所は海の上、國は近江の江に近き、山々の春なれや、花はさながら白雪の、降るか残るか時知らぬ、山は都の富士なれや、猶さえかへる春の日に、比良の嶺風吹くとても、沖漕ぐ舟はよも盡きじ、旅のならひの思はずも、雲居のよそに見し人も、おなじ舟に馴衣、浦を隔て、行くほどに、竹生島も見えたりや、

シテ「縁樹影沈んで、地「魚木に登る氣色あり、月海上に浮んでは、兎も浪を走るか、おもしろの島のけしきや。

シテ、詞「船が着きて候御上り候へ、此尉が御道しるべ申さうするにて候、これこそ辨才天にて候へよく御祈念候へ、ワキ「承はり及びたるよりもいや優りてありがたう候、不思議やな此島は、女人禁制とこそ承はりて候、あれなる女人は何とて乗られ候ぞ、シテ「それは知らぬ人の申しごとにて候、忝けなくも此島は九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそ参るべけれ、ツレ、諸「のうそれまでもなきものを。地「辨才天は女體にて、辨才天は女體にて、其神徳もあらたなる、天女と現じおはしませば、女人とて隔てなし、唯知らぬ人の言葉なり、かゝる悲願を起して、正覺年久し、獅子通王の古より、利生更に怠らず、シテ「げに〜かほど疑ひも、地「荒磯島の松蔭を、便によする海士小舟、われは人間にあらずとて、社壇の扉を押し開き、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に、入るかと思ししが白波の、立ち歸り

われは此湖の、あるじぞといひすて、また浪に入らせ給ひけり。(中入)
地、謠「御殿頻りに鳴動して、日月光り輝きて、山の端出づることにて、現はれ給うぞかたじけなき。」

後ヅレ(辨才天)謠「抑もこれは此島に住んで神を敬ひ國を守る辨才天とは我が事なり、其時虚空に音楽聞え、其時虚空に音楽聞え、花ふりくだる春の夜の、月に輝く少女の袂、かへすがへすもおもしろや。(天女の舞)」

地、謠「夜遊の舞樂も時すぎて、夜遊の舞樂も時すぎて、月澄み渡る湖面に、浪風頻りに鳴動して、下界の龍神現はれたり、龍神湖上に出現して、龍神湖上に出現して光りも輝く金銀珠玉を、彼の客人に捧ぐる氣色、ありがたかりける奇特かな。」

後シテ(龍神)「本より衆生濟度の誓、地、本より衆生濟度の誓、さまざまなれば、或は天女の形を現じ、有縁の衆生の諸願をかなへ、又は下界の龍神となつて、國土を鎮めあらはし、天女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなはち湖水に飛行して、波を蹴

立て水をかへして、天地にむらがる大蛇の形、天地にむらがる大蛇の形は、龍宮に飛んでぞ入りにける。

【河瀬】 二九二哩一、▼若林製糸場、は東北二十五町、▼豊郷村整理耕地、は南二十五町、▼福満村整理耕地、は北二十五町、▼西甲良村整理耕地、は南西一里、▼高宮町整理耕地は、東十八町、名産は生糸、麻布、藤細工などである。

【能登川】 二九六哩七、▼老蘇の森、は西南二里、延喜式内の舊社奥石神社があつて、「東路の思出にせん郭公をいその杜の夜半の一聲」といふ大江公資の歌で有名である。▼滋賀縣立工業試験場、は東七町、▼奥田製油所、は東二町、▼安土城趾、は西十八町。

▼栗見村整理耕地、は西北一里、▼葉枝見村整理耕地は北一里、名産は油粕、麻布である。

【安土】 二九九哩九、▼安土城趾、は北十三町、織田信長の墓がある。人力車賃十錢、安土山の山腹に残壘が僅かに残つてをたつて、轉々當年英雄の面影を偲ばせられるのである。遠景山總見寺には、信長と其の子信忠との像を安置してをる。關によつて湖山の景を見渡す時、雲霞渺々千態萬奇の思ひがある。▼淨嚴院、は西七町、▼沙々貴神社、は南八町、▼觀音寺は東二十五町、西國三十二番の札所である。▼老蘇の森、は此處からは南一里十町、▼鏡山村青年會、は一里半、▲安土村整理耕地、は驛の附近で、▼老蘇村整理耕地、は南東二十五町である。

志賀の浦波

江州の安土に箱打が十人ばかりあつて、一同て金を出して一人の召使を抱える事になつた、ところが其の男は生憎浄土宗で、十人の者は日蓮宗だけに、何とかして改宗させようとした、其處で給金を増してやるから、改宗しろと勤めると、仕方なしに、大乘妙典を頂戴した、一同は大きに喜んで、序に女房も宗旨にしたら、とすゝめると彼の男が曰く「私こそ貧乏ゆる地獄に落ても、せめて女房どもは助けてやりたうござある」と。(策傳)

【八幡】 三〇二哩一、湖南鐵道接續點、▼長命寺、は西二里、八幡町まで自動車賃九錢、八幡町から船賃七錢、湖水觀望の勝地であつて、▼永源寺、は東南六里、八日市まで自動車賃十八錢、八日市から人力車賃四十五錢である。▼農事試験場、は東九町、▼近江帆布會社、は西二十二町、▼八幡製絲會社、は西十五町、名産は生牛、疊表、蚊帳、帆布、麻布、生糸等である。

【野洲】 三〇八哩、▼三上山、山頂まで二十八町、山麓まで人力車賃十五錢、此の山一に近江富士の名がある。汽車が八幡驛から野洲驛に至る間左方に見える山がそれ、恰も富岳を見るの思ひがある。昔田原藤太秀郷が大蜈蚣を退治したといふ傳説のあるのは此の山である。▼錦織寺、は北一里、眞宗木部派の本山で人力車賃は二十三錢、慈覺大師の創建であつて、寺號は四條天皇から賜はれたものである。▼機籠村、は北一里二十七町、人力車賃三十五錢、▼野洲川砂防工事、は三上山東南方の砂山に施行した工事であつて、山麓に一大土砂貯溜池がある。▼中洲村服部整理耕地、は西北一里、▼兵主村安治整理耕地、は北一里半である。

説傳 百足退治 (野州)

近江八景の内、汽車の窓から最もよく見えて近いのが瀬田の唐橋である、其昔、藤原の秀郷は、此の橋から、矢を射て百足を退治たといふ、秀郷は、有名な將門を射殺した弓矢の名人であつた、何故、俵藤太といふのかといへば、或日、唐橋まで來ると、橋の真中に、松の太木のやうな大蛇が寝て居た、藤太は聞えた大勇であり、チツトも恐れず、却つて其蛇の背に乗つて了つた、と思ふと、這は如何に、大蛇の姿は掻消す如くになつて、一人の男が秀郷の前へ兩手を仕いて頭を下げて居た、驚いて「秀、汝は何者だ」と問ふと男は「私は此の湖に棲む大蛇でございます」といふ秀郷は「何故大蛇がそんな姿に化けたのだ」男「他でもございませぬ、實は此の三上山に大きな年經る百足が居りまして、私の妻子眷屬を、時々喰ひ殺します、どうかして滅ぼしたいと思ひますが、何分私の力では致方がございませ

百足退治

ん、よつて何方か、強いお方を頼んで、百足を退治て頂かうと存じ、毎日此所に待
つて居りますが、大體なお方は、私の姿を見ると、どん／＼逃げてお了ひなさい
ます、然るに貴方はかりは、少しも驚かず、却つて私の脊にお乗りなさるほどの
御勇氣、其處で私も、百足を退治て頂くのは、貴方より外にないと存じまして、
斯うして男に化けて、お願ひいたすのでございます、不便と思召して是非私の望
みをお叶ひ下さいますやう」涙を流して頼むから秀郷も「夫は氣の毒だ、早速私
が退治てやらう、百足の居る所へ案内しなさい」彼の男は喜んで、再び大蛇になつて
秀郷を脊に乗せると、忽ち水の中へ潜り龍宮へ案内をして、いろ／＼歡待をした、
其内に家鳴震動するから秀郷が「彼の音は何だ」と聞くと「彼れこそ、三上山
を七巻半も巻くといふ大百足で、私がお願ひした奴でございます」秀「さうか、よ
し、今退治てやるぞ」と弓に矢を番へて待ちかまへて居るとは知らず、大百足は大
蛇の眷屬を取り食はんとして、やつて來た、秀郷は満月の如くに弓引しぼり、ヒヨウ

ブツと切つて放てば、確かに手應へはあつたが、矢は飛んで了つた、又二の矢を射
ると、是も百足には確かに當つたが、音がして刎ねかへされて了つた、其時にフト
考へたのは、百足は人間の唾を大層嫌ふといふから、こりや、唾をつけて射てやら
うと、矢尻に唾を塗つて、ヒヨウと射ると、過たず百足の頭をブツリと射ぬいた。
さしもの大百足も名人の秀郷に急所を射られたので、忽ち死んで、湖水に死骸が浮
いた、大蛇の喜びはたとへ方もなく、秀郷に種々馳走などをして歸してよこした、其
の歸る時に、「是はお土産でございます」といつて、一俵の米俵と、絹一匹と、釜と
鐘を贈つた、ところが其米俵は不思議にも、いくら米を出しても、盡きる事がなか
つた、絹も、切つても／＼矢張り盡きないで、相變らず貫つた時と同じだけあつた、
釜は、何を入れても、火を焚かずに煮る事も出来、茹る事も出来るといふ不思議な
ものであつた、其の中の鐘だけは、家に置いても仕方がないといふので、後に三井
寺へ奉納した、未だに、辨慶が引ずりあげたといふて三井寺に残つて居る、秀郷は、

此の事があつてから、餘り不思議といふので、俵藤太と異名をとつたといふ。

【守山】三一〇哩、▼新善光寺、は東南一里十町、▼横籠村小津村、は西南一里、人力車賃二十五

錢、▼玉津村赤野井整理耕地、は西北一里である。

【草津】三一二哩七、東海道と中仙道との道分、草津線の分岐點、姥ヶ餅といふ名物のある所、慶長

五年關ヶ原の役、徳川秀忠後れて到り家康と會見したのも此處である。▼野路の玉川、は驛から半里、日本

六玉川の一つで古歌に名高く萩の名所である。▼矢橋の浦、は西南一里、人力車賃二十五錢、▼近江帆布工

場草津分工場、は東南一町、名産は、竹の根で織した襪、ステツキ、米、瓢箪などである。

講談 蜀山道中記 (草津)

翌日は草津の宿に来て、是に休息する、向ふの松の下に駕を下ろして居た駕昇が
揉手をしながらそれへ来て 駕「旦那様三條の大橋まで歸り駕でございます、お供は
出来ませんまいか」蜀「ウン、何うせ京まで參るものだ乗つて取らするぞ」駕「それは有
難う存じます、お供さんも駕か馬にお乗りなさるならば頼んで參りませう」蜀「市助、
貴様も駕に乗るか」市「俺は錢を貰つて酒を飲み〜お供をする方が勝手でございます

すよ」蜀「然うか。それでは是を取らする」烏目二百文を與へて自分は駕に乗る、駕
屋は左肩で出懸けた、蜀「駕屋、三條の大橋まで七里餘りあるの」駕「左様ございま
す」蜀「賃錢は何程だ」駕「ハイ、一貫ばかり遣つて下さいまし」蜀「よし〜望み通り
一貫取らす」駕「流石は關東のお武家様、金の切れが此方の者とは大違ひ、イヤ恐れ
入りました、それに就て思ひ出しましたのは、昨日大津から石部までお供をいたしました
お客様は江戸のお方でございましたが、息杖を二三本入れたかと思ふと其の客人の
いはつしやるには、然う貴様達に骨を折らしては氣の毒だ、俺は歩いて遣はすから
貴様達は空駕を擔いで来い、恚う被仰いまして草津に来ると晝食でございますが、
酒を飲まして飯を喰はした上に駕賃を一貫二百と酒代を三百下さいまして、早く歸
れとお暇が出ましたが、イヤ江戸のお方は大層なお氣性でございます」先生是を聞
くと、腕拱いてグウ〜と睡る、暫らくして目を覺まし 蜀「駕屋、昨日俺が龜山を
出て坂の下まで駕に乗つたが、其駕籠屋が大層氣性の宜い奴で、貴下のやうな乗り

工合の宜い客を乗せたことがない、然ういふ方から賃錢を頂いては濟まないと思つて、一貫二百文の駕籠を取らず外に三百文此方に呉れた、其上酒まで飲ました、が、イヤ京都の者どもは如何にも其の志が優しいで、感心いたしました、コレ駕籠屋、何ういたした』差覗くと二人の駕舁は駕を擔ぎながらグウグウと駟聲を聞いて居る、蜀山先生大いに笑ひ、駕『どうした駕屋』駕『旦那様には敵ひません』話しの内に瀬田長橋近く来る、此處は宇治川の落口にて水勢も劇しい、時しも四月の中旬、青葉影涼しく山々には雲がかつて今にも時鳥が啼くかと思はる、空の景色、先生は駕に揺られながら、蜀『もやくくと青葉に曇る夏景色、盲目が見ても時鳥空口吟む一首、駕屋は是を聞いて、駕『旦那様は御風流なことでございます』蜀『貴様達に判つたか』駕『ハイ能く判りました』蜀『流石都近くに居る者は、何處となく風流た處のあるは感心』駕『旦那様、此處は江州の天津と草津の間でございます、それ今渡るのは瀬多の長橋、此處は近江八景といふ名所でございます、何と旦那様、近江八景を殘らず入れ

て一つ歌に纏めて下さる事はなりましたまいか』蜀『其處ことは朝飯前だ』駕『然し旦那様、三十一文字に八景を加へるのでございますよ』蜀『其處なことはいはずと存じて居る』蜀『それが出来ましたら駕賃も酒代も頂かず三條の大橋までお供をいたしませう』蜀『それは面白い』駕『處で旦那様、歌が出来ずば、倍増しの駕賃を頂きたいもので』蜀『よし、判つた、それ遣るぞ』駕『駕賃を下さいますか』蜀『イヤ狂歌をやる、能く聞けよ、一つ歌に近江八景を詠み込ませ』蜀『ハイ伺ひます、何ういふやうに出来ました』蜀『それ宜いか』乗せたからさきはあはづかたの駕、ひら石山やはせらしてみゐる』蜀『何うだ出来たであらう、先づ最初が瀬多の唐橋、其次に唐崎の松、次は粟津の晴嵐、それから堅田の落雁比良の暮雪、石山の月、其次は矢走の歸帆、是を集めて今聞く通り一首の狂歌にいたしました』駕『旦那様、恐れ入りました貴下は狂歌の神様じゃ、珍らしいお方でございます』蜀『さう賞められては赤面の至り、駕賃と酒代は貴様達に取らすぞ』蜀『それは有難う存じます』狂歌を詠じ駕屋二人を玩弄

にして大津の宿を後になし、三條の大橋武藏野といふ旅籠へ駕をいれさせる。
(辰巳老人述) (三芳屋發行蜀山道中記より)

毎年六月には檢校衆の涼とて、田舎より座頭衆いづれものぼられしが、美濃邊りの座頭三人京へ上り、草津の宿に小き川あり、三人乍ら朝早くに宿を立ち、此川端へつき、川の深さを知らず、一人の言ひけるは「此川は何時も浅い川ぢやが、此ほどの雨に水が出たさうな、米市瀬ぶみして見やれ」といふ、「如何にも」といふ帷子をぬぎ、裸體になり、帷子を頭にのせ渡りけるが、二人の座頭「川は深いか」と問へば「いや餘り深うはないが、くびへ着く所もある」といふ、二人の座頭「然らば裸體になれ」とて、二人ながら裸體にて渡りければ、膝ぶしより深き所はなし、二人腹を立て、「米市、何處がくびへ着くぞ」と叱りければ「いや、我等がいふは、足首のことぢや」。(輕口ばなし)

【石山】 三二七哩五、大津電氣接續點、▼岩間寺、は西南二里、▼立木觀世音、は南一里二十七町、電車石山寺まで四錢、汽船草郷まで八錢である。▼瀬田の唐橋、は東南八町、電車賃三錢、▼栗津ヶ原、は驛附近の地、木曾義仲戦死の場所である。今其の原に縣農事試験場がある。織や鋤を振ひつ、當年の旭將軍を思ふ時其の感慨果して如何。▼建部神社、は東南十二町、電車唐橋まで三錢、祭神は日本武尊で官幣大社である。▼石山寺、は南二十町、電車賃四錢、汽船賃五錢、觀月の名所として知られ、八景の一つである。本堂の傍に源氏の間と言ふのがあつて、紫式部が源氏物語を起草した所だと傳へてゐる。談曲源氏供養も此の寺で行はれたものである。▼瀬田蚊帳會社、は東南九町、▼大戸川砂防工事、は石山寺の對岸の

砂山地の廣い面積に涉つて工事を施行したものである。名産は蚊帳、蜆、製茶などである。

落近 江八景 (石山)

大道の易者のところへ、遊び人が占て貰ひに来るといふ話し、對手は娼妓で年が明けたら、自分のところへ來るといふ約束だが、その妓は實際自分に心があるかどうかと聞く、易者は一占して、妓には其の心はないといふ、そんな筈はない、その證據には茲に手紙がある、といつて見せる、易者は讀み終つて、私が此の手紙で判斷すると、最初先の妓が、顔に比良の暮雪ほど白粉をつけて居たのを、お前が一目みるでらから、我が持物にしよう、と、心はやばせに逸るゆえ云々と、凡て近江八景の洒落でいつて、妓には眞實がないから、添はぬ方がよいといふので、「夫ぢや分つた行かう」と行きかけると「オイ、見料を置いて行かないか」といふ『近江八景にはぜいはいらぬ』といふ落。(三芳屋發行落語の落より)

志賀の浦波

上り下りに目に付く姿、露の命を君にくれべい、追分のたるま盡心、鬼に衣はそけたもかし、座頭走り井に犬が吠えつく、猫が三味ひく、酒のむ奴、愛宕参り、袖を引かれた、伊達な若い衆が鷹手にすえて、ふれ切れく大鳥毛く、浮世のんせい、ふんらんらんしんらんらんナ三佛、掛針くけ針盤針、い、池のかはすげ、かさよりぼに算盤つぶ、關の清水はうき名所。(大津輪追分)

【大津】 三一九哩二、大津電氣、京津電氣の接續點で、大津京都間往復二十八錢である。市は琵琶湖の西南岸、長良山の東の麓にあつて古來湖上交通の要津である。人口四萬四千、此處を起點として沿岸に廻航する汽船がある。▼義仲寺、は西北三町、木曾義仲の墓及俳祖芭蕉翁の墓がある。「義仲とせなり合せの寒さかな」といふ俳句で名高い墓である。此の寺又謡曲兼平、義仲の妾巴御前の舊蹟である。▼高觀音、は西二十七町、電車賃四錢、湖水觀望好適の場所として名高く、▼三井寺、は西二十八町、電車賃四錢、寺域高く展望は又前者よりよく、八景が一眸に見えるので名高い。▼唐崎の松、は西北一里、汽船賃十一錢、芭蕉が「唐崎の松は花よりおぼろにて」と詠じた松で、根元を中心にして東へ七十九尺、西へ八十四尺、南へ八十五尺、北へ六十九尺といふ翠蓋地を蔽ふてゐる大松である。近來虫害や烟害のために少々傷んでゐるのは探勝の人をして、轉た感慨無量たらしむるものがある。此の地また琵琶歌よく聞く所の明智左馬介光俊が湖水渡りの場所だといふ。▼官幣大社日吉神社、は西北二里二十五町、汽船賃坂本まで十一錢、坂本からは十五町である。山王權現と稱して山僧等が屢神輿を奉じて京師に行き強訴したりした歴史がある。▼聖田浮御堂、は北四里十五町、汽船賃十九錢、▼化石森林、は聖田の西北一里半眞野川支流の川岸に於て近時發見せられた史家の曳杖地である。▼竹生島、は東北湖上二十二哩、汽船賃四十六錢、▼藤

樹書院は、大溝まで汽船賃三十三錢、大溝から三十一町、附近玉林寺内に藤樹先生の墓がある。▼模範村青柳村、は大溝の北一里十三町、人力車賃三十五錢、村は藤樹先生の遺風を受けて、村内實朴輯睦、事務整頓、農事改良の實績見るべく、村の下小川自彊會亦表彰せられてゐる。▼膳所町、は東十二町、電車賃四錢、▼滋賀縣廳は西十二町、▼物産陳列所、は西二十五町、滋賀縣育兒院、は三井寺山内、▼滋賀縣代用感化院淡海學園、は西北三里、▼農工銀行、は西十八町、▼農事試験場、は東二十五町、▼帝國製麻會社大津製紙工場、は西三町、▼大黒座、は西二十一町。名物は湖水の鱒の鱒鮓、湖魚の鮎煮、長良漬など、市の名産としては長濱縮緬が有名である。

琵琶湖水渡り (大津)

夫れ良禽は林を選み 賢者は君を選むとかや
されど一旦身を許し 主と頼みし人のため
善惡ともに身をすて、 傑狗が堯に吠ゆるなる
忠義をなすも武夫の 弓矢の意地と知られけり
茲に明智日向守光秀は 天王山の一戦に

湖水渡り

味方もろくも打ち敗れ
 早や匿れなく聞えけり
 明智左馬介光俊は
 軍の様子見んものと
 敵に粟津の原越えて
 大津の宿にかゝる頃
 堀秀政が一萬騎
 敵勢茲に来るからは
 坂本城こそ大事なれ
 小冠者原に出遣ふて
 末代までの無念なり
 光俊やがて大音聲

同勢四方に散亂すと
 安土の城の留守居なる
 君の先途の覺束なく
 急げば廻る瀬田の橋
 揉みに揉んでぞ打出の濱
 ハットと出會ひし大軍は
 光俊キツト思ふやう
 君の妻子のゐまします
 さは去り乍ら今茲に
 鎗も合はさて引かん事
 一ト當あてゝ返さばやと
 やをれ秀政來りしか

天王山を取り切りし
 いざ光俊が一期の名残り
 味方の勇氣勵まして
 巴田字に切りなびけ
 鬼神不思議の働きに
 浮足立ちし沙合を
 さつと許りに乗りぬけて
 馬は忽ち飛ぶごとく
 ざんぶと許り躍り入る
 騎手は素より古今の達者
 神か人かと見るばかり
 眼の限り一碧の

武略は流石の敵なるぞ
 語り續かせんものどもと
 咄と許りに突掛り
 西に東に出歿し
 さしもの大敵もてあまし
 爰と見てとる一呼吸
 一息呑みし掛け聲に
 名に負ふ近江の湖に
 馬は天下の逸物なり
 眞一文字に乗り切さまは
 水や空そらや水
 浪を蹴立つる大鹿毛に

湖水渡り

緋緘着たる左馬之介
 無双の名人永徳が
 墨繪の龍の陣羽織
 或は緩に又急に
 馬疲るれば人助け
 さしにも廣き湖を
 追手の勢も氣をとられ
 あれよくといふばかり
 射かけん人もなかりけり
 濱の此方に打ち上り
 愛馬の立髪撫であげて
 如何に大鹿毛承はれ

一きは目に立武者ぶりに
 丹精こめて畫きたる
 比叡嵐に翻へし
 揚鞭振ふ勇ましき
 人疲るれば馬に頼り
 事ともせざる不敵さに
 酔へるが如き心地して
 只だ一筋の遠矢だに
 光俊やがて唐崎の
 馬物の具の水はしらせ
 哀別離苦の涙聲
 光俊多年武勇の譽れ

湖水渡り

半は汝が勳しぞ
 命と共にいたさんは
 天晴汝は長生へて
 修羅の巻を走せ廻り
 我武名をも後の世の
 ヤヨ大鹿毛よ心得しかと
 十王堂の柱につなぎ
 香の包みをおし開き
 明智左馬介光俊
 筆太と書き残し
 馬も名残りを惜しみてか
 見返へり勝にしづくくと

斯る名馬を光俊が
 いと惜き心地ぞする
 武勇勝れし主をとり
 流石は明智が馬なりと
 武邊の語りに残せかし
 真心こめて言ひ聞かせ
 やがて墨斗を取り出し
 天正十年六月半
 此馬を以て湖水を渡る者也と
 イザと許りに立ち去れば
 聲も哀れにいなくを
 阪本城に引き揚げし

湖水渡り

心の中や如何ならん
五三の桐の世となれど
日本一の名馬ぞと

君心濶於琵琶湖瀬

舊主の名さへ武勇さへ
朽ちせぬ譽れ今の世に
琵琶の湖琵琶の音に

傳へて語るぞ目出度けれ

哀れ桔梗の花枯れて
この大鹿毛は秀吉に
いと珍重に召されたり

清風留在唐崎松

花とたへて幾千代も
比良の山より猶高く
留めて語るぞ目出度けれ

【大谷】 三二一哩一、▼逢坂山、は東二町、蝦夷太夫の「これやこの行くもかへるもわかれては知るも知らぬも逢坂の關」と詠じた所其他關寺小町など諸曲の奮闘が多い。▼關の清水は北十町、元弘の忠臣後基朝臣が東下りに、「關の清水に袖濡れて」と血涙を流した所、▼走井、は西三町、▼長等公園、は北十五町、電車賃五錢、▼三井寺、は北二十二町、電車賃五錢、▼大津市役所、は北十六町、▼物産陳列所、は北二十四町である。

【山科】 三二四哩五、▼大石瓦葺の臥躰、は西半里、▼觀修寺、は西六町寺の附近小栗橋には明智光秀の土饅頭がある。▼觀音寺、は東南十六町、▼山科御坊、は東北二十一町、▼坂上田村麿墓、は西北十町、▼城山葡萄園、は東十町室内栽培を以て有名である。名物は筍、竹村などである。

浪花山科妻子別れ (山科)

泣くよりも、笑ひ堪えし大石の、辛き思ひの山科の里、酔ふたと見せて千鳥足。

内「ウイ、今戻つたぞ」妻「お歸り遊ばせ」内「ウ、イ、冷水を持って」妻「ハイ」奥さんが湯呑みにお冷水を汲んで持つて参りました。内「コリヤ、其方は大層老婦になつた様ぢや、拙者の所へ嫁入いたして來た時には、これ程婆でもなかつたやうぢや」妻「それは良夫、總領が十六歳に相成りまして、あるに吉千代、大三郎と云ふ子供があるではございませんか」内「さ、それが世の中不思議でならぬ、子供が出来る、年をとる、婆になるとはこれは如何に、ハ、ハ、ハ、然しりくや、今日は内藏之助が、チト其方に申聞かすることがある」妻「何事で御座りますか」内「豫て和女も知る通り、大石が命までもと打込んだ、刈藻太夫の落籍を近々のうちに致す考へ、處て

山科妻子別れ

世間通例は、前から居るのが本妻で、後から来たのが妾ぢやが、内藏助のはさうぢやない、前から居る其方は妾として、刈藻を本妻に座す、どうぢや面白からう、花の添寝も刈とする、臥床の上げ下げ三度の給仕は其方が致す、それ物見ぢや、遊山ぢや、其方は連れて行かぬ刈を伴れて行く、一寸出るにも履物を直し、御早くお歸り遊ばすやうと、刈の機嫌を損ぜぬやう、どうぢや、それが出来るか出来ざるか、妻「旦那様には御銘酌の容姿、よも本性ではござりますまい」内「イヤ酔ては居らぬ本性ぢや」

格氣は女の憤むところと、内藏助の奥様ぢや、よう御承知ぢやあるけれど、此の道ばかりは別物ぢや。

妻「手前は但馬豊岡、京極甲斐守家老石塚源吾兵衛の娘でござりまする」内「夫がどうした、何といたした」

如何に迷ひの道ぢやとて、素性も系圖も判らざる、卑しい太夫の落籍して、履物

までも揃へよとは、そりやあんまりなお言葉ぢや。

内「厭ぢやといふか出来ぬといふか、ならぬとあれば家風に合はぬで離縁をするぞ」妻「ハイ」

途端に開いた唐紙の、「嫁女心配御無用」と入り来るは、内藏助には義理の養母、先代大石頼母の奥様。

母「内藏助」内「ハ、阿母様でござるか」母「何時もながらよい機嫌ぢやの」内「恐縮でござる」内「今日は幸ひ何方もお見えがない、汝にチト問ひたいことがある」内「何事でござる」母「關東下向は何時に相成る、それが問ひたい」内「ハテ、内藏助に關東下向の用事はござらぬ」母「イヤ、無いとは云はさぬ、御亡君思召相續は何時に相成る、それが問ひたい」内「阿母様とした事が昔氣質な、そりや成程一時は憎くい吉良上野、おのれやれとも思ふては見たもの、第一、吉良殿恨むはこれ逆恨でござる」母「そりやまた何故に」内「さればでござる殿中にて鯉口三寸寛げたる者あら

ば、如何な堂々たる名家たりとも其家断絶とは、こりや家康公御發言百ヶ條の中にありといふことをお辨へありながら、場所もあらうに松の廊下の刃傷、家断絶、主公切腹、我々一同路頭に迷ふ、皆これ主人の罪、第一仇讎討といふことは天下の禁制、掟を破れば内藏助に夫だけの罪がござる、そこで掟も破らず、手着かず壘の上の仇討といふことは出来ぬものかと、さて段々考へて見れが考へがあるものでござる、先づ内藏助七十まで長命をします、吉良殿が百迄保つ壽命ではあるまい、壘の上でコロリと往生、吉良が死ぬ、手前が死ぬ、冥途へ參つて御亡君に、只今吉良の死を見届けて罷り越して候、これ壘の上の仇討といふもの、ところが又、譯ないやうで難かしい、人間定命五十年、六十年は假の宿、七十は稀ちやといふに、彼れが心配、それが苦勞、所詮長命思ひも寄らぬ、そこで金は高利で貸し附けてあり、山畑は買求めてあり、あがり来る金で、島原、祇園と物言ふ花に手を引かれ、浮かれて歩けば一夜の愉快に三年の壽命が延びる、忠義のために色里通ひ、刈藻の落藉も忠

義の爲め、それがならぬとあるからは、去るより他はござるまい』母「イ、ヤ良雄秘すでない』。

愉快に遊ばぬ證據には、日に日に寢るゝ汝の姿、親に遠慮が要るものか、何故打明ては呉れぬのぢや。

母「内藏助……」内「イ、ヤうるさい、左様な事聞く耳は持ち申さぬわい』

脇を枕の高軒、「頼み難いは人心、ひよつとさうではあるまいか……』

何思ひけん起上り、取り出したる二基の位牌

母「内藏助、内藏助」内「うるさい、何てござる」母「そなた是に覺えがあるか」内「是れは何です、こりや阿母様位牌ではござりませぬか」母「一つは冷光院殿御位牌、一つは先代頼母殿の位牌、今の言葉が真なら、頼母殿に申譯があるまい」内「これは面白い阿母様、頼母殿が何てござる、頼母殿は即ち貴女の御配偶、拙者の爲めには義理ある親と思へばこそ、末期の水迄取つたりとすれば、養子の役はこれで足れり、

良雄あればこそ位牌も出来たといふもの。位牌が何です阿母様」と、取が早い、庭前のぞんで丁とばかりに投げつけたり、母「ヤア血迷うたるか内藏助」内「愚圖々々いふと阿母様、貴女も離縁をいたしまするぞ」母「黙れ良雄、親を離縁する者が何處にある」内「さア」

ほかには無いが此處にある」「愛想もこそも盡き果てた、見下げ果たる人でなし、寄邊もあらぬ老の身を……」

妻「阿母様御心配遊ばしますな、性根の腐つた旦那様、一先づ但馬へ引揚げまして、父と兄とに相談致し、その上の事にいたしませう」

萬事は嫁女に頼みます。

妻「旦那様」内「何ぢや」妻「阿母様を連れまして、一先づ但馬へ引揚げまする」

内「嬉しや嬉しや厄逃れ、コリヤ寺阪、豊岡迄駕籠の用意」妻「子供は何といたしまする」内「主税は連れて行かれぬぞ、主税、其方には薄雲太夫の落籍をしてやる、役に

立たざる小さな奴は伴れて行け」妻「吉千代、大三郎、お前のお父様はあのやうな人でなかつたが

如何な天魔が魅入りてか、變れば變る人心、御祖母様や阿母様と一緒に但馬の外祖父様の處へ参ります、學問劍術精出して、貴所のやうな犬侍にはなりませんと、お暇乞ひをしてお出で」吉「ハイ、阿父様」内「オ、吉千代、大三郎」吉「貴方は犬にお成り遊ばしたげな」内「ナニ、俺が犬になつた……」吉「御祖母様や阿母様のお伴をして但馬のお祖父様の許へ参ります、學問劍術精出して、貴方のやうな犬武士にはなりませんぬ」内「能ういふた、犬には必ずなつて呉れるな、しかし

成人のあした、女郎買だけは覺えて置け。

ハ、ハ、ハ、コリヤ吉千代、其方にはそれ、此の脇差をとらするぞ、但馬へ参りてお祖父様に父が形見に呉れましたと、しつかと見せよ、大三郎、其方には此の印籠を取らする、是れもお祖父様に見せて、阿父さまの形見ぢやといへ、宜いか」吉

大「アイ」

駕籠の用意が出来ました。

内「寺阪、其方大儀ながら、豊岡迄送り呉れよ、荷物は後から届けますと申せ」
寺「心得て候」

心細くも嫁姑、孫と我子の手を取りて、こちらは主税良金が、父の心を汲み兼て、泣くに泣かれぬ切なさの……

母「嫁女見や」

親に似ぬ子は鬼子とは能う云ふた、斯る難儀のその中に、口出しもせぬ主税奴の……

内「アイヤ御母様、

主税に小言は御無用御無用。大事の家の跡取り息子」用意の駕籠に打乗りて、出て行く跡に大石が、スックと起つて「主税来いよ」と手を捉りて、静かに出でた門

【京都】

三二九哩三、平安城又は平安京とは昔の名、何しろ桓武天皇の延喜集以来一千百餘年間の帝都であつたのだから、市の内外は殆んど皆名所古蹟、「静かさや二冬なれて京の夜」といふ其角の俳句は、二度目に上つた時の心持を詠んだのであらうが、實際二度三度と遊んだのでなければ、なか／＼疎る限なくといふ譯には行かない。随つて静かに京の夜を味ふなんて氣持にはなれないのである。今、四日間の豫定で京都見物記を書いて見ると斯うである。先づ三條大橋を起點とする。併し一寸お断りして置くの

京都見物

【稻荷】

三二七哩五、「稻葉山しるしの杉の年ふりて三つの御社神さびにけり」と千載集にある所、三條小鍛冶神祇靈異の地である。驛前にあつて朱閣丹樓並び立ち、老杉の翠と相映じて美觀此の上もない。
▼東福寺、は北七町、▼泉涌寺、は北半里、名物は筍、伏見人形などである。

(桃中軒雲右衛門三芳屋發行)

京都見物

(探勝と参拜)

郭公平安城をすぢかひに

蕪村

京都見物

は、京都には市營電車と京都電車と二つの電車が可なり混線してゐるから乗換などの時は電車の徽章によ
く注意しないと飛んだ田舎者を演ずる。尚電車は此の外に、嵐山電車、京津電車、京阪電車がある。
自動車は五人乗乃至七人乗のものもあり、一哩四十錢乃至六十錢、一日貸切二十圓乃至三十圓、待買一時間
一圓二十錢である。さて、▼三條大橋は深淺たる鴨川、川風や薄衣きたる夕すゞみ」の出入の多い橋で清
流を見下し、橋の石杭は、我國で架橋の杭に石を使用した最初のものだと低徊すると欄干の擬寶珠までが
頗る古風で趣きがある。些細に側へ寄つて見ると各々刻銘があつて、天正十八年豊臣秀吉が増田長盛に命
じて作らした當時のものが十八個だけ残つてゐる。此處はお江戸でいふ日本橋、東海道の起點である。▼青
蓮院を粟田口三條南に尋ねて殿宇の構造を一巡してすぐお隣りの▼知恩院へ行く。此處は淨土宗の總本
山、法然上人の開基であつて東山第一の巨刹である。俗に千疊敷といふ衆會堂は廣いもの、其の樓側が
有名な鶯張り、一步毎に鶯の轉るやうな音を發するとは、昔の工人もなか／＼味をやりたるわい。と言
つても堂宇は度々焼けて、今のは徳川氏寛永十六年の建築である。多く特別保護建造物として取り扱はれ
てゐる。▼圓山公園はすぐ其の南隣で京都唯一の公園である。殊に有名なのが絲垂櫻、花の夜毎に舞
火を焚いて興を添えると言ふことである。是れが世に言ふ祇園の夜櫻、▼將軍塚は公園の後方先づ日本
外史の著者として名高い頼山陽先生の墓に詣つて、それから八町ほど登ると塚である。眺望絶佳、桓武天
皇の時八尺の人形に甲冑を着せて埋めた所である。山陽の墓の邊を眞葛ヶ原といふ。再び公園に歸つて
來て、長樂寺、双林寺、西行庵、芭蕉堂、大雅堂などを巡覽してから西へ出ると、▼八阪神社である。
官幣中社で素戔鳴尊、櫛稻田姫及八王子を奉祀してゐる。天平五年に吉備眞備が播磨の廣峰に祀つたのを、

京都見物

貞觀十一年に僧圓如が神託を受けて山城の八阪郷に移したのが是れであるといふこと、今の本殿は、承應
三年徳川家綱の修築で清涼殿の様式を傳へたもの、西樓門と共に特別保護建造物である。其の祭禮は祇園
會といつて七月十六日から初まる。京都第一の盛觀である。▼東大谷は神社の南隣、大谷派東本
願寺の廟所、境内清淨、信徒の納骨所が此處にある。南へ二町ほど行くと、▼高臺寺は秋の名所秀
吉の夫人淺野氏即ち高臺院湖月尼が、慶長十一年に秀吉の冥福を祈るために建てたもので、同夫妻の木像
を安置してゐる。其の庭園は小堀遠州の造つたもので千利休の意匠になる時雨亭、唐傘亭など此處にある。
後の山を、靈山といつて、嘉永以來憂國殉難の士の靈を祀つてゐる。木戸孝允、坂本龍馬、玉松操、藤本
鐵石、梁川星巖等の墓碑を山中に見て、南へ一町、▼八阪の塔へ行く。聖德太子の建立で我が國寶塔
の初めである。これから東南に出て勾配が緩やかな長い清水坂を登ると、▼清水寺である。寺は田村麿の
創建で洛中眺望第一の名所、堂宇亦奇巧を極め、俗に言ふ清水の舞臺に乗つた氣の其の舞臺は南面の樓敷で
ある。舞臺の下は有名な新高尾、青羽の瀧も亦有名である。これから歌の中山、清閑寺、鳥邊山、西大谷、
六波羅密寺、小松谷、正林寺、妙法院をざつと巡覽して、▼豊公廟に行く。廟は阿彌陀ヶ峰の頂上、蓋
世の英雄秀吉の骨を埋めた處、石階實に數百を數ふるのである。新日吉神社、養源院、大興徳院などを過
ぐると、▼三十三間堂 長寛三年後白河法皇の建立、炎上して龜山天皇が文永三年再建、實尺六十六間
長方形の堂宇であつて、鎌倉時代の建築として有名なものである。堂裏の矢場は、古來善射の士が來て技を
競ひ矢數を誇つた所、堂内に千體千手觀音の像がある。一巡して北隣の、▼帝國博物館に入る。陳
列室が十七あつて歴史、美術、工藝の三部に分れてゐる。平安時代の美術工藝を見るには日本一であるが、

時間の都合によつては割愛するも止むを得ぬ次第である。更に其の北隣の豊國神社に詣りて文祿征韓の役を偲ぶ、▼耳塚を見、又其の北隣りの、▼大佛殿に行く、方廣寺と言ふとハハアと頷くことが出来る慶長十五年再建の時、國家安藤の鐘の銘のことから雜題となつて、遂に大坂關東の手詰となつたのである。それから今熊野神社、今熊野觀音寺に詣りて進むこと三町、▼泉涌寺に行く。寺背に後水尾天皇以下歴代天皇皇后の御陵を拜してから、南に五町ほど行くと、▼東福寺である。後ろの庭が深となつてゐてこれに架した橋を通天橋と言つて上には廊屋がある。古來紅葉の名所として世に知らるゝ所で、寺寶の光嚴司の涅槃圖は逸品である。尙南に九町ほど進むと、▼稻荷神社に達する。官幣大社で、本社、樓門が頗る壯麗である。是から電車で三條小橋に歸ることも出来るが、五條、四條と鴨川沿ひに歩くのも亦一興である。これ東南部即ち東山の南西部の巡覽を終へた次第であるが、唯一つ残つたものに祇園町の歌舞伎界がある。但し、は夜の世界、夕食小憩の後、散歩の方が却つて適當であるかも知れない。春季には都踊が興行せられ、なかくの出入、先斗町の鴨川踊りと共に優美麗麗人を酔はしむるのである。

行きがたがふ舞子の顔や朧月 紅葉

再び三條大橋を發して西に進むこと三町、新京極、それから南四條通に出て誓願寺、四條大橋、祇園町歌舞練場は昨夜既に御承知の人もあらう。▼建仁寺に行く、寺は京都五山の一、臨濟派の本山で寺の東西一帯の地は平家重代の館を置いた六波羅である。境内から南へ六町、牛若辨慶の仕合で名高い五條大橋を渡つて、西北六町で、▼佛光寺へ達する。眞宗の別派で門跡に補せられたのは此の寺が初めだといふ。北へ六町、▼六角堂へ行く。西國三十三番の札所で、堂宇が六角圓堂である。市街の中樞にあ

つて參詣者多く、寺中の池の坊は立花の祖家として名高い。南へ六町で因幡藥師、更に南へ五町で、▼東本願寺に行く。寺は近時の建築で堂宇の華麗壯偉は海内比なしとの稱がある。其の傍の根柢殿は殿舎林泉共に美しいので名高く、西六町ほど行くと、▼西本願寺である。今の御堂は寶曆十年の創建で、其の 彫刻の精巧なので名高く、摘翠園内の飛雲閣は秀吉が聚樂の第の遺物であつて其の豪華の跡を窺ふに足るのである。興正寺、本國寺を一覽して三町餘で島原である。島原は昔から名高い花街で、其の年中行事の一つである、太夫の道中は他に類例のないもの、毎年四月廿一日は京洛の士女が此の道中を見んがために此の一廊に雲集するのである。

朧夜や島原さして小提灯 子規

島原遊廓から更に南へ八町で、▼東寺に達する。寺には經像圖書の寶藏が多く、其の五重の塔は高さ三十五間、本邦第一の高塔である。北へ十七町進むと壬生狂言で有名な壬生寺、八町ほど距れて念佛踊で有名な空也堂がある。北へ五町で神泉苑に達する。苑は一千年前平安宮造營當時の跡を存してゐる。▼二條城は神泉苑の北隣、家康關ヶ原戰捷の勢に乗じて造營したもので、慶應三年十月徳川慶喜が大政返上をしたのも又此の城である。今は離宮となつて、一昨年の御即位式大嘗祭後百官に賜はられた大饗宴の御場所でもある。此の城、規模は大きくはないが其の建築は徳川時代の粹を凝らしたものだといふことである。此處で堀川丸太町から電車を利用して熊野神社前下車、南へ三町で、▼平安神宮である。京都第一の尊崇の的であつて、桓武天皇を祀つた官幣大社である。其の祭禮時代行列は有名なもので、社前の模造大極殿は古の盛觀を偲ばしめる。西隣に武徳殿、櫻の馬場、圖書館、動物園などがある。動物

京都見物

物園から稍南へ行くと、▼インクラインで琵琶湖から引いた疏水は此處で二つに分れ、支線は市中の給水源となり、幹線は京都大津間の運渠に供せられ、荷船や客船が機力によつて傾斜道を上下し、琵琶湖と鴨川の間を往來してゐる。橋を渡ると、▼南禅寺で臨濟宗の大本山である。松並木の間に山門が聳えて見える。寺の北に永観堂即ち禪林寺がある。辨天池畔の櫻、楓は又有名なもので東福寺通天橋と並び稱せられてゐる。それから一町ほど行くと、▼若王子神社がある。清麗閑雅、楓樹が多く又瀧を以て聞えてゐる。こゝから三町ほどの處に、▼安樂寺がある松島鈴島の舊蹟である。更に二町ほど歩くと法然院で、こゝから東へ十町、▼鹿ヶ谷に達することが出来る。俊寛僧都の別荘で平家の滅亡を謀つた所一名談合谷とも言つてゐる。三町ほどで、▼銀閣寺へ達する。此處は義政閑棲の地で、林泉の美、茶室の數寄を以て世に知られてゐる。石川丈山の詩仙堂も此の附近にある。銀閣寺から南へ三町、▼真如堂がある白河女院の離宮であつたのを請ふて寺としたものである。その南隣に、▼黒谷がある。紫雲山金戒光明寺と號して、淨土宗の巨刹である。堂の前の松は、熊谷直實の鑑懸松、それから西に向つて進むと吉田神社、京都帝國大學、智恵寺の百萬遍の道場も過ぎると、▼下加茂神社である。社は札の森の翠の中にあつて境内が清浄で又趣致に富んでゐる。▼上加茂神社は北に距る二十町、兩社合せて加茂の大神と言つてゐる。上加茂神社は、後に壬生翠巒を負ひ、前に奈良小川の清溪を帯びた脱俗の塵外境である。是れて第二日程を終り、市電又は京電の便を利用して三條大橋へ歸るのであるが、時間がまだあつたら、御所を參拜するのも道順である。

大内のかざり拜がまむ星祭り

十子

京都見物

第三日は三條大橋から本能寺、京都ホテル、市役所、莖堂、下御靈神社などを經て、▼御所へ行く。御所は周圍に堺町、下立賣、蛤、中大賣、乾、今出川、石薬師、清和院、寺町、御門の九門を開いてゐる。東西が三百八十間、南北が七百五間、面積が凡そ二十六萬八千坪であつて、内部は御苑である。維新前は公卿の邸第があつたのであるが今は悉く松樹の御苑となつた。皇居は中央の北邊東西百三十七間、南北二百四十六間、築地と溝とを繞らし四方に六つの門がある。正南門は即ち建禮門であつて鳳臺出入の御門、東向の門は建春門、西北面が臺所門、南が宣統門、北面が朔平門である。建禮門の内に承明門があつて北方南面の御殿が紫宸殿である。御即位式は實に同殿で行はせられたのである。紫宸殿の東に賢所春興殿、後方が清涼殿、宣陽殿、其他の御所を初めとして常御殿、皇后宮御殿等多數の御建物がある。仙洞御所は皇居の東南にあつて地積二萬五百餘坪、老樹鬱蒼、林泉幽邃を極めてゐる。明治元年八月、明治天皇陛下紫宸殿にて御即位あらせられ、同二年東京に遷らせ給はれたのはあるが、依然として尙ほ皇居の大號を存し、御即位大嘗の御式は萬古不易、今上陛下も亦御大禮を行はせ玉ふたのである。是れ即ち皇室典範の御規定に則らせ玉ふ大御心である。御所を拜し終つて、電車を利用して▼北野神社へ行く。社は菅原道實を祀つたもので、本殿八棟何れも檜皮葺の華麗なもの、境内には梅、松が多く、特に紙屋川の梅樹は祭神の遺愛を偲はせるのである。裏門を出て西に向へば、▼平野神社で境内に櫻樹多く春季は觀光の客の絶えない社である。社格は官幣大社である。それより北五町に、▼金閣寺がある。足利義滿の建て立て三層の金閣、古の光を髣髴せしめ、林泉の美依然として昔日の儘である。楠の一枚板といふ天井などを見ると感慨無量である。

遊金閣寺

八疊の楠の板間をもるしぐれ 其角
金閣寺の東七町に建勳神社がある。信長を祀つた所で祠後の眺望頗るよい。それから北二町で、大徳寺に達する。寺は臨濟宗の本山、一休和尚の再興したものである。是れて第三日程を終り、再び電車を利用して三條大橋に歸る。

針叩き 右京左京の行き戻り 召波

第四日は、三條大橋から電車を利用し二條驛に行き、更に汽車で花園驛まで行くと僅か一町で、妙心寺である。殿堂の宏壯華麗、洛西第一の稱がある。境内大法院には佐久間象山の墓があり、寺頭吊す所の鐘は天武天皇當時の鑄造で日本最古の鐘である。北十二町で、等持院に行く。寺は臨濟宗の巨刹、足利尊氏以下歴代の木像を安置してある。明治維新の際に、志士がこれを三條驛に曝したといふ。四方七町で龍安寺、更に五町で、仁和寺に達する。眞言宗の巨刹で、宇多天皇落飾の後此の寺に入らせ玉ふたので御室の名がある。此の御室の櫻は世上のものとは其の類を異にして、枝や幹が長く伸びない、枝葉が幹の下の方から出てをって頗る風致のある花である。

筏士の嵯峨に花見る命かな 兀董

再び汽車に乗つて、嵯峨驛に下車、四數町で、嵯峨釋迦堂に行く。本尊釋迦の像は三國傳來と稱せらる、もの、世界無二である。東三町ほど行くと大覺寺、戻つて南へ三町の處に、天龍寺がある。足利尊氏の創建で夢窓國師の開基である。此の附近は古の嵯峨野と稱した所、小督の局幽栖の址も亦此の

附近である。天龍寺から南一町で、嵐山である。蹴を流る、は大堰川、俗に、「京に遊んで嵐山の花を見ぬ馬鹿」といふ、其の花の飄渺として開くとき實に峰も燃ゆるが如く、舟を浮べて大堰川を徂徠すると、花より出て、花に入るの思ひがあり、興趣實に盡くる處を知らぬほどである。横笛が投木の場所と傳へられてゐる。千鳥が淵は、渡月橋の上流三町餘の處である。此の川の上流保津は、急瀬、亂石、奔湍を以て知られてゐる。龜岡から嵐山まで流程四里半、初夏新緑の候には兩岸の鴈が亂紅を水に映して美しく、それを見ながら下るのも又面白いのである。下り舟貸切一等六人乗七圓、二等五人乗五圓三十錢である。嵐山から電車に乗つて、廣隆寺に行く。寺は聖德太子の開基で一千三百年の名刹、京都第一の古蹟である。其の桂宮院は八角堂で推古天皇の朝に建築したもの太子殿前の石燈籠亡基だ古雅で世に太秦形といつて珍重されてゐる。毎年十月十二日の夜此寺でやる牛祭は其式頗る奇異であるといふ。再び電車に乗つて京都に歸り遊覽の行程を終るのである。

尙數日を京に費やさうとするならば、京の三山といはる、比叡、愛宕、鞍馬の登山、三尾と稱せらる、高尾、栲尾、横尾の探勝、伏見宇治方面の遊覽等まだなか／＼に盡きぬのである。
京都は本邦第三位の都會で、人口は五十萬九千、鴨川の清流に跨つて、街衢は碁盤の目の如く、大路七條が東西に通じてをり、三條通から北を上京、南を下京といつて、最繁華な地が三條通、四條通、祇園町附近といはれてゐる。鐵道は本線の外、山陰本線の起點であり、奈良線も亦此の都から南に走つてゐる。北は所謂北山一帯、東は三十六峰、嵐雪がいはゆる布圍着て廢たる姿の東山で、西は嵐山天王山、南は巨椋池、宇治川を隔て、奈良の丘陵、山河帶、自然の城の名に負むかないのである。産物は美術

工藝品が多く、織物を第一とし特に西陣織は精巧絢爛を以て聞え、其他、友禪染、刺繍、陶磁器、漆器、銅器、扇子など澤山ある。京羅、京紅、京白粉、京鹿子なども世に知られ、聖護院八ッ橋、さぎしらず、五色豆、すはま、祇園香煎、千枚漬などの名物もなかくに捨てがたいものである。

おぼる月四條を通る小唄な 子規

琵琶本能寺 (京都)

麻と亂る、戦國の人としいへば誰も彼も、馬を養ひ兵を練り、切りかて糧を藏めて劍を磨す、大干頃天正十年夏五月、中干とくははいへず、徳川家康封ぜられ、安土城下に入りしかば、織田右大將信長は、いと鄭重に迎へんと。直ちに維任光秀に、中干變化をうけ、饗應の役をぞ命ぜらる、お受いたせし光秀は、亂れたる世に心得し、都の手並見せばやと、さしも目出度く勤めしを、小人輩の言により、中吟善美過分の評を受け、疑心暗鬼は信長の、胸に宿りし時も時、中干はしはひできも、大干たす、援けの兵を乞ひしかば、中干の命忽ち光秀の、頭の上にぞかゝりける、光秀私かに思ふやう、人もあらんに此の我

に、羽柴が命に従へとは、あら情なの我君やと、齒齧をなして恨みしは、君に仕ふる人臣の、中干變化よもあるまじき事なれど、また信長を見る時は、右大將とも仰がる、身に、疎暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして、光秀が頭に鐵扇を加へさせ、また或時は、好まぬ酒を殊更に、中干變化わが、我意を透してすゝめしめ、志賀の領地さへ、三年の中には事もなく、地吟奪ひとられん説を聞き、今又産を傾けて、あらたに來りし家康に、心盡しのもてなしも、中吟琵琶湖の水の泡と消え、押さへし焰むらゝと燃る思ひの光秀が、大干拳を握りて立上り、中干動く眼の間より、由々しき大事のほの見えしを、露ほど知らぬ信長は、諸將を安土に留め置き、自ら近臣百餘人、ひき從へて京都なる、中切りほんのうじ本能寺にぞ入りにける、時こそ來れと光秀は、田鶴も遊ばぬ龜山に、從子光春等呼びよせて、つもる恨みの數々を、中干數ふるうちに光秀が、大干眼は血汐ほとばしり、中干逆立髪は冠を、つく勢ひを見てとりし、光春どもが百千度、諫むる言葉も聞かばこそ、推て謀反に加盟させ、暴戻無道の殺逆をば、

本能寺

中干變化 企てしこそ淺ましけれ、かくて士卒を打揃へ、中國勢を援けんと、地變化下偽
 り向ふ大江山、心の駒も烏羽玉の、暗路を急ぐばかりにて、さしも忠義の光秀が、
 中干追々年も老の坂、如何なる道にや迷ひけん、無念至極の胸のうち、亂れて濁る桂
 川、渡らむ駒の足なみは、中干變化東さしてぞ進みける。

本能寺溝深幾尺 我成大事在今夕

糠粽在手併包喰 四橋梅雨天如墨

老坂西去備中盡 揚鞭東指天猶早

我敵正在本能寺 敵在備中汝能備

爰に始めて軍勢は、漸く二心と悟りしが、中干變化之も我君是非もなや、大干捨つる命
 は一つぞと、中干時しも五月二日の朝まだき、崩れ露の身輕ぎ軍兵が、本能寺を取りか
 こみ、関をつくりて一同が、おめき叫んでぞ攻め入りける、此の物音に信長は、寢
 覺の耳を聳つれば、紛ふかたなき人馬の聲、館間近く聞ゆるに、枕を蹴りて立上り、

本能寺

大干疾く見届けよとありければ、中干森蘭丸かしこまり、裏の方に走り出て、見越の
 松に片手をかけ、右手をかざして見てあれば、雲か霞か白旗に、崩れ染めたる桔梗
 の紋所、中干變化見るより蘭丸引かへし、光秀謀叛と答ふるに、赫と怒りて信長は、
 者共覺悟と呼はりて、弓矢おつとり立ち向ひ、よせ来る敵をもものともせず、また、
 くひまに數十騎を、矢つぎ早に射て落し、勢ひ鋭く拒ぎしも、只一筋と信長が頼む
 弓弦フツツと切れ、得たりと突き入る豪敵を、すかさず弓もて打つて伏せ、兎角す
 るうち信長も、左手の腕に痛手を負ひ、蘭丸代つて拒ぐうち、宿直のものも悉く
大干命を的に戦へど、中干衆寡敵せず信長は、最早是までとや思ひけむ、自ら館に火
 を放ち、烟の中に飛び入つて、中干變化刃にふしてぞ果てにける。

或田舎者京都見物に来て、三條の橋詰で月代をそり髪を結はさせて「錢をいかほどやるぞ」といへば、髪
 結「十文おき候へ」といふに十文渡し、三條の宿屋へ歸り、亭主にいひけるは「京は物事たかきやうに聞き
 ましたが、三條の橋詰にて月代をそり髪を結ふて、錢十文取りました、安い事とさる」といひければ「いや

京都見物

夫は高うござる、夫よりあとの白川橋では、七文で坊主にしてくれます」(輕口はなし)

大内の紫宸殿へげち〜出てたれば、公家衆以ての外騒ぎ玉ふ、一人の公家衆、鼻紙にてそつと掴みて、築地の外へ打ちすて「なと、ひ參内」(壽々菜羅井)

或國に、何にても紙りて樂しむものありけり、世間にありとあらゆる物を紙り、さらば是より京へ上りて、さまざまの物を紙りけるが、何卒、東寺の塔の九輪を紙りたきものと、多くの金を出して僧侶を頼み、足代をこしらへ、たいきくをにて、九輪の先を紙りける、梯子を下りて「矢張り三條の橋のぎぼしのさきと、おなじ味ぢや」といふた (輕口はるの山)

春は花、いざみにこんせ東山、色香あらそふ夜櫻や、うかれ〜て、絆も不絆も物語、二本さしてもやはらかう、祇園豆腐の二間茶屋、みそきぞ夏は打ちつれて、川原につどふ夕納涼、よい〜〜よいやさ、眞葛ヶ原にそよ〜と、秋ぞ色ます華頂山、時雨を厭ふ傘の、濡れて紅葉の長樂寺、思ひぞつもる丸山の、けさも来て見る雪見酒、エ、そして樽のさしむかひ、よい〜〜よいやさ。(哥澤、京の四季)

【向日町】 三三三哩四、長岡天満宮、は西南一里七町、馬車賃十二錢、長岡の古都趾、は約十四町、官幣中社大原野神社、は一里十二町、粟生光明寺は西南三十四町、紅葉の名所である。善峰寺、は西二里、枝村青年會、は西北一里、模範竹林、は向日町字物集女にあつて當業者無二の視察地である。

【山崎】 三三八哩一、天王山、は東北八町、豐臣秀吉が明智光秀の軍を破つた古戦場である。寶積寺、は北二町、寶物に打出の小槌がある。妙喜庵、は驛の東側、山崎宗鑑幽居の跡で千利休の茶室がある。櫻井の里、は西二十町、楠公父子の訣別の地として名高く、木無瀬宮、は西十町、承久の三上皇を祀り官幣大社である。男山八幡宮、は南一里十町、清水八幡のことである、官幣大社であつて社殿甚だ壯麗、謡曲、「女郎花」の男塚は茲にある。柳谷觀音、は西北一里、八幡、美豆聯合整理耕地、は東一里十四町、竹林が北一里乃至三里の間連亘してをつて京都府下に於ける優秀なる産地である。名物は楠公焼である。

清水の上から出たり春の月 許 六

史傳 山崎合戦 (山崎)

去るほどに山崎表に、羽柴、惟任(明智光秀)の兩陣きびしく備へを取固め、双方の軍勢凡そ五萬人、旌旗風に翻り、鎧刀雲を貫ぬき、十二日の夜に入れば、兩軍を夥しく焚き續け、曉をこそ待居たり(中略)此時洛中洛外の町人百姓三百人、光秀が地子錢免許の恩を感じ、銘々思ひ〜の獻上物、酒、肴、菓子類を持つて

山崎合戦

山崎の陣へ参りければ、光秀床几に腰をかけ、彼の町人百姓を近く召し寄せ、笑をふくみ、汝等遙々此所まで参りたる條神妙の至り也、今日の一戦に羽柴が輩を悉く打破り、天下を泰平ならしめ、汝等に厚く恩賞を與ふべしとて、彼の町人どもが獻呈せし角黍の、臺に積みたるを取て喰はんとせしが、此時光秀心神忙はしかの粽を皮ながらに喰ひければ、數多の町人百姓これを見て仰天し、あな怪しからずのふるまひや、將軍に昇進すれば、角黍などは皮ともに喰ふ法なりやなど、さまざまと叫びけるが、町人の中に年老いたる浪士の兩三人ありけるが、此體を見て、戦ひの始よらざる以前に、大將かくの如く狼狽へるは、敗軍の相なり、此軍心許なしとつぶやく内、天王山の軍破れ、士卒さんぐに成つて本陣へ逃げ來たれば、三百餘人の町人百姓大に驚き、はや惟任方敗北せりと思ひ、日向守に暇をも乞はず、押合ひ、突合ひ、我れ先にと京都さして逃げ歸る（中略）此間に蜂谷、大谷の面々、山崎の右の手、藤田傳五郎、伊勢與三郎等が中軍を目かけ、五百挺の鐵砲を一度に

どつと打入れければ、何かは暫しもたまるべき、雪上に熱湯を流すが如く、ひた崩れにくづれ立つを、中川先より倍々の敵を切りなびけ、勝色だつて見えける所に天王山上より敵の軍中へ鐵砲を打ちしかば、いかんぞや是を勇まざらん、鎗をとつて味方を招き、山崎の合戦は此手より勝鬨をあぐるぞや、かゝれ〜と大音に呼はり、眞先に馬を馳出し、敵を切る事、恰も枯野の草を刈るに等し、中川が勢一同に関を作つて殺出し、終には芝居を追い退ぞけ、十分勝利を顯はしける（中略）大和の國主筒井順慶は、光秀が推舉によつて、一國の守となりたれども、いかんぞや叛臣に與すべき、一萬餘人八幡洞ヶ峠に出張し、今朝より遠見を遣はし、山崎の合戦を伺はせけるに、今は時分よきぞと一萬餘騎を三手に備へ、藤原家重代の大旗をさしあげ、金の分銅の馬印諸手梅鉢の四半を立て、先陣を小田切宮内、小泉四郎、森縫殿介等三千餘人、二陣は飯田三郎次郎、井上十郎、三千餘人、本陣は猶原右衛門松倉右近、島左近等を宗として四千餘人、洞ヶ峠を押し下り、光秀が本陣さして一

文字に押寄せたり（中略）羽柴筑前守秀吉は、山崎の合戦十分の勝利を得、主將光秀は未だ討たずといへども、股肱と頼みし勇士、數を知らず討取り、凡そ首數三千七百餘討取り、手負は、敗軍ゆる幾千人といふ數をしらず、羽柴方討死三千三百餘人手負四千餘人に及び、誠に烈しき合戦なりと、聞く者舌を震はしける、此時さしも山崎の野邊廣しといへども、今日未明より戦ひ暮したる事なれば、敵味方の死骸累々と横倒れ、丘の如く又山に似たり、誠に足の踏みどころさへなし。

（太閤記、四編卷三四）

難波の勝（大阪と神戸）

大阪や見ぬ世の夏の五十年

蟬吟

【高槻】 三四二哩八、難波といふのは攝津の國の古稱、汽車がなづかしい京都をあとに山崎を過ぐれば此處はもう攝津の三島郡、永井氏三萬六千石の舊城地、元和元年大阪の役には東軍の石川忠雄が守つた處、▼金龍寺山、は東北五十町である。

【茨木】 三四六哩九、永祿年中、中川浩秀の居つた處で、慶長十九年には片桐且元が淀君の難を恐れて隠退した所である。▼勝尾寺、は西南二里紅葉の名所て人力車賃は四十錢である。

【吹田】 三五一哩一、▼瑞光寺、は東二十五町、本邦無比の縮橋がある。▼河田山桃林、は四十二町、▼江口の歌塚、は西北一里、此の地神崎川が淀川から岐れる所て淀川舟航の衝に當り往時は繁華を極めた所である。江口の君といふ遊女があつて和歌をよく詠じた。一日四行法師が此處を通つて雨を避け宿を請ふたが聞き入れない。西行そこで、「世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りを惜む君かな」と詠すると江口の君直に和して、「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心留むなと思ふばかりぞ」と言つて、終に一夜閑談に明したと言ふ。歌塚の由来はこれである。▼大日本麥酒會社工場が驛前にあつて、アサヒビール、ミュンヘンビールは右手のものである。

【大阪】 三五六哩一、梅に名高く又蘆に名高い大阪は人口實に百三十九萬六千、本邦第二の大都會であつて、海内無双の商業地、市街の繁盛商機の活潑、首府東京にも優るかと思はる、ほどである。道路の布置市民の風采又全く一種の商業的趣味を帯ぶるのは此の地の特色地勢は概して平坦であるが東部一帯は稍隆起して低き丘陵性の臺地をなしてゐる。中央部を船場、島の内と稱し、南部は難波新地、西部は堀江、立賣堀、阿波産などて安治川以北を天満、堀川以北を北の新地と云ひ、其の最も繁華なのは船場、島の内で淀屋橋通り、心齋橋通りが特に目立つ所である。船場には銀行問屋などが多く市の金融市場をなし、堂島中の島には官が多く、京町堀附近には幕府時代の大阪風が今も尙殘存してゐる。仁徳天皇の高津宮の昔は知らず、豐臣秀吉が此處に築城して天下に號令するやうになつてから頓に此の繁華を來し、豊

大阪路

臣氏が亡びて後も尙工業地商業地として経済界を左右する力を維持して来たのは、兎に角大阪人士の大偉力を賞讃せねばならぬのである。

市内には大小の河川が四通八達、舟楫の便はいふまでもなく、南には攝津灣を控へて海陸運輸交通の便を利してゐるのである。東西南北に流る、川の数は四十五條、これに架した橋の数は大小合せて四百八十、八百八橋の稱ある位で大阪名物の一つとなつてゐるのを見れば、又其の繁華が因つて起る所以を知ることが出来る。夕陽西に暮れば淀の川瀬に燈火ともし、満天の星落ちてかゝやくとばかり、幾十艘の涼舟は月の出汐に往き又來る其のさまは、實に目もくるめくほどである。

淀の川瀬の水車、小さい三十石舟に静けき夢を伏見に送つた水の都の大阪は、今又文明の蜘蛛の巣ともいふべき鐵道によつて一入の便をましてゐる。京都から梅田の大阪驛を経て神戸に通ずる、東海道本線を初めとして、淡町驛からは奈良名古屋へ行く關西本線が通じ、片町から木津に行く片町線、神崎から北福知山に行き山陰本線と接続する福知山線、梅田を發して市の東部を一周する城東線、梅田から櫻島に行く西成線、其の他にまだ南海鐵道、大阪高野鐵道、電車は又、大阪電氣、阪神電氣、京阪電車、市内電車など線路は交又複雑してをつて旅客をして殆んど足を動かすの餘地なからしめてゐる。市内電車は片道五錢、往復九錢、自動車は三人乗一時間市内が四圓、市外が五圓、五人乗一時間市内が五圓、市外が六圓である。

▼大阪城、は驛の東南一里豊臣氏豪華の跡、白聖の城壁今も尙高く城濠の上に聳え、第四師團司令部となつてゐる。▼北御堂、は南二十町西本願寺門跡の御坊で規模の宏壯は市中第一、▼南御堂、は二十四町、東本願寺門跡の御坊で堂の裏に座摩神社がある。社は市の鎮守の神、社殿又壯麗である。▼御靈社

大阪路

社、は南十七町市の遊園地で大阪名物の一たる文樂座は此の境内にある。久々地の廣濟寺内には近松門左衛門の墓、誓願寺内には井原西鶴の墓がある。一は浮瑠璃本の作者として、一は浮世草紙の作者として、共に今の大阪趣味の種を植ゑた人である。▼櫻の宮、は東二十九町花の名所として春時遊覽の客多く、▼天満神社、は東十九町、菅公を祀つた有名な社、年毎の夏祭はいはゆる關西の大祭禮、京の祇園會と併稱せらる、盛大なものである。神輿が、から松島の御旅所まで船渡御がある。漫々たる淀川の流に氏子の面々が御迎船を飾つて踊り狂つて之れを迎へる様は無双の盛觀で、陸には家毎に軒燈を吊し暮を引き廻し、節いさましく地車を引き出すといふ有様、是も頗る盛觀である。▼中の島公園、は南十三町市中第一の遊園地で其の東端に豊國神社がある。▼大融寺、は東三町、弘法大師の開基で境内に淀君の墓がある。▼八阪神社、は多門天を祭つた所、社前の通りが難波の市場で、▼今宮神社、は俗に言ふ蝦子神社、正月、九日十日は福德を授けたまはる縁日だといつて賽するもの幾十萬を數へるほどである。▼道頓堀は千日前にかけて、川竹五座の芝居が構をならべ、見せ物、寄席、義太夫席、飲食店など揃比してをつて東京の淺草、京都の新京極と共に有名な遊び場所である。▼官幣大社生魂神社、は市中第一の大社であるが先年火に焼けたのである。社の後の眺望臺は茅沼の海を隔て、淡路島を望み、絶佳の眺めである。

▼高津神社、は仁徳天皇を祀り繪馬堂は雪景色を以て知られてゐる。▼荒陵山は四天王寺、は天王寺驛の北七町、寺は聖德太子の建立で天台宗の巨刹、堂舎四十餘宇を數へ境内は今公園となつてゐる。天王寺公園の隣りは新世界、千日前と共に娛樂地として名高く、中央に聳ゆる通天閣は市内の展望を一目に收め夜は電燈の光り燦然として、市南方の中空に美觀を現するのである。東洋第一と稱する噴泉浴場も亦此處に

あつて規模宏大である。▼一心寺、は天王寺驛の北十町、圓光大師の開基、寺の裏門を出ると河底の池に臨んで鬱蒼たる小高い丘がある。是れが所謂、▼茶臼山、て家康が陣所、幸村六文銭の旗風今尚願るが如き心地がする。山麓の邦福寺は俗に雲水と言つて雅致に富む庭園、天下茶屋を過ぎて住吉に行けば、▼官幣大社住吉神社、がある。社殿は古雅幽邃神威自ら高く、長松の一路は遠く延びて沙白く瀟沔き處にまで及んでなる。附近に別格官幣社阿部野神社がある。北島顯家を祀る。堺、濱寺亦景勝の地で海水浴の適地である。▼心齋橋、は南三十町、▼造幣局、は東二十七町で橋内の櫻樹開花の時には人の賞観を許してなる。▼砲兵工廠、は東南三十九町。▼兵器支廠、は東南三十四町、▼大阪府廳、は南四十三町、▼大阪税關、は西南一里、▼陸軍地方幼年學校、は東南一里半、▼久原礦業會社、は南十二町、▼住友伸銅場、は西三十三町、▼日本燐寸製造會社、は東南一里三十町、▼島田硝子製造場、は西三十町、▼汽車製造會社、は西一里三十町、▼浪花座、角座、中座、朝日座、は南一里、▼藤邊俱樂部、は南一里六町である。

難波津や海をひかへて冬籠り

巢光

【神崎】

三六〇哩七、福知山線の分岐點、神崎、尼ヶ崎間には汽自動車及列車の便がある。▼廣濟寺、は北牛里近松門左衛門の墓がある寺で賃金十五錢で達する。

【西の宮】

三六五哩三、清酒の醸造地、灘五郷の一である。▼經子神社は西南十町、▼廣田神社、は北牛里官幣大社で天照大神の御靈を祀つてある賃金十五錢、▼甲山は北一里、山上神呪寺がある。▼香爐園、は西十六町、▼六甲苦樂園ラシューム温泉、は西北二十一町、人力車賃十六錢、馬車賃十二錢、白

【蘆屋】

三六七哩八、六甲苦樂園東北十八町。助車四十五錢、濶拔四百尺、六甲、甲山の峰を負つて茅沼海に臨んだ風光明媚の地である。

【住吉】

三七〇哩六、▼住吉神社、は驛の西隣、神功皇后三韓征伐の後始めて此に表筒男、中筒男、底筒男の三海神を祭られ、後諸所に此の神を祀るもの皆住吉と言つてなる。▼岡本梅林、は東北十五町、▼十善寺、は西北二十五町、▼六甲山、は驛の北方に聳え、山上に外人村がある。近年有馬温泉行きの客、此の山を越えて行くものが多くなつた。いはゆる六甲越である。行程三里駕籠の便がある。名産は酒、花崗石である。

謡曲 吳服

ワキ、ソキヅレ(宮人) 道の道たる時とてや、國々豊なるらん。ソキ『そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下なり、われ此の間は攝州住吉に參詣申して候、又これより浦傳ひし。西の宮に參らばやと存じ候、ソキ、ソキヅレ、道行、住の江や長閑けき浪のあさかた、長閑けき浪のあさかた、玉藻刈るなる海士人の、道も道なる難波濁、行くへの浦も名を得たる、吳服の里に著きにけり、吳服の里に著きにけり。

吳服

シテ(里の女)ツレ(里の女)二人「吳服織、あやの衣の浦里に、年経て住むや海士少女。ツレ」立ちよる浪も白絲の二人「機織り添ふる音しげし、シテ」われは津の國吳服の里に、住みて久しき二人の者。二人「われ此國にありながら、身は唐土の名にしおふ。女工の昔を思ひ出づる。月のいるさや西の海。波路遙かに來し方の。身は唐人の年を経て、こゝに吳服の里までも、身に知られたる名所かな。これもかしこき御代の爲。送り迎へし機物の、倭にも織る唐衣の營を、織る唐衣の營を。今敷島の道かけて、言の葉草の花までも、あらはし衣の色添へて。心を碎く紫の、袖も妙なるかざしかな。袖も妙なるかざしかな。ソキ」さてもわれ此松原に來て見れば、やごとなき女性二人あり。一人は機を織り。今一人は絲を取り引き。互に常の里人とは見え給はず。そも方々はいかなる人ぞ。シテ、ツレ「恥かしや里離れなる松蔭のうしほも曇る夕月の、影にまぎれて浦浪の。聲にたぐへて機物の、音聞えじと思ひしに。知られけるかや恥かしや。ソキ」何をか包み給ふらん。其身は常の里人てなら

で、此松風に隠れて居て、機織り給ふは不審なり。「いかさま名のり給ふべし。シテ」これは應神天皇の御宇に。めてたき御衣を織り初めし。吳織漢織と申しし二人の者。今又めてたき御代なれば、現にあらはれ來りたり。ソキ「ふしぎの事を聞くものかな。これは昔の君が代に、唐國よりも渡されし。『あや織二人の人なるが。今現在に現はれ給ふは、何といひたる事やらん。シテ』早くも心得給ふものかな。まづこの里を吳服の里と。名付け初めしも何故ぞ。われ此所にありしゆ名なり。ツレ「又漢織とは織物の、絲を取引く工ゆる、綾の紋をもなすゆゑに。漢織とは申すなり。シテ「吳織と機物の絲と引く木をばくれはとはいへば、くれは取る手によそへつ。』吳織とは申すなり。ツレ「されば二人の名によせて。シテ「吳織。ツレ「綾とは申し傳へたり。二人「然ればわれらは唐人なれば。倭詞は知らねども。シテ「吳織あやに戀しくありしかば二村山とよみし歌も。二人を思ふ心なり。地「吳織。怪しめ給ふ旅人の。怪しめ給ふ旅人の。御目の程はさすがに、名にし負ふ都人の。所から唐人と。われらを

御覽ぜらるゝは。げにかしこしやよき君に。仕ふる人かありがたや。仕ふる人かありがたや。地『それ綾といへば。唐土吳郡の地より織りそめて。女工の長き營なり。シテ』然るに神功皇后三韓を従へ給ひしより。地『和國異朝の道廣く。人の國まで靡く世の。わが日の本は長閑なる御代の光は普く。國富民豊かなり。シテ』東南雲收りて。地『西北に風静かなり。應神天皇の御代かよ。吳國の勅使此國に初めて來り給ひしに。綾女絲女の女婦を添へ。萬里の滄波を凌ぎ來て。西日影残りなく吳服の里にやすらひ。速日に立つる織物の。錦をりをりの綾の御衣を奉る。勅使奏覽ありしかば。歡感殊に甚だし。それより衣かけつゝ。衰龍の御衣の紋。營も名高き山鳩色をうつしつゝ。氣色だつなり雲鳥の。羽ぶさをたむ綾となす。いとまかしこかりけり。シテ』然れば萬代に絶えせぬ御調なるべしと。地『御定めありしより。吳服の文字を和げて、吳織漢織と名付させ給へば。年を迎へて色をなす。綾の錦の唐衣。返す返すも君が袖。古きためしを引く絲の。かゝる御代ぞめでたき。これにつ

けても此君の。これにつけても此君の。めでたきためし有明の。よすがら機を織給へ。二人『いざいざさらば機物の。錦を織りて我が君の。御調に供へ申さん。地』げにや御調の數數に。錦の色は。二人『小車の。地』丑みつの時過ぎ。曉の空を待ち給へ。姿をかへて來らん。さらばといひて吳織。漢織は歸れども。鶏はまだ鳴かずや。夜長なりと待ち給へ。夜長くとても待ち給へ。
 『嬉しきかなやいざさらば。嬉しきかなやいざさらば。此松蔭に旅居して。風も嘯く寅の時。神の告を待ちて見ん。神の告げを待ちて見ん。
 『君が代は天の羽衣稀にきて。撫づとも盡きぬ岩はならなん。千代に八千代を松の葉の。散り失せずして色は猶。正木の葛長き代の。ためしに引くや綾の紋。曇らざりける時とかや。地』此君の畏き世ぞと夕浪に。聲立て添ふる機の音。シテ『錦を織る機物の間に。相思の字をあらはし。衣拵つ砧の上に。怨別の聲。松の風。又は碓打つ浪の音。地』しきりにひまなき機物の。シテ『取るや吳服の手繰の絲。

吳服

わが取るあやは。シテ「踏木の足音。地」きりはたりちよう。シテ「きりはたり。ちようちよう」と。地「悪魔も恐る、聲なれや。げに織姫のかざしの袖。」

地「思ひ出でたり織女の思ひ出でたり織女の。たま〜逢へる旅人の。夢の精霊妙童菩薩も影向なりたる夜もすがら。よもすがら。寶の綾を織たて織たて。わが君に捧げ物。御代のためしの二人の織姫。吳服あやはのとりどりに。吳服あやはとどりの御調物。供ふる御代こそめでたけれ。」

れつきとした武士、住吉へ参詣せらる、道にて、ふとしやり出てやまず、羅儀なる折簡、道に寝て居たるを食、ムク〜と起きあがり、「親の敵のがさぬ」とつめよれば、彼の武士大におどろき「身共は人を討つたる覺えなし、必ずはやまるな」と申さるれば、非人いふやう「しやりが止んだら一文下さいませ」。〔輕口淨瓢箪〕

有馬温泉は切り疵に必ず效があると聞いて居た料理人、或時祝ひ事ありて鳥を料理するに、間違へて一羽餘分に首を切り落したり、主人是を見て立腹し「困つた事をする奴ぢや」といへば、料理人ぬからず「直ぐに有馬へ湯治にやりませう」。〔笹傳〕

【灘】 三七三哩四

【三の宮】 三七五哩四

【神戸】 三七六哩四

東海道線が終るのである。横濱が東京の門戸となつてゐるやうに、此處は關西大阪の門戸で、人口は四十四萬二千、東北に亘つて六甲山脈があつて、鷹取山、再度山、摩耶山などの翠微が海光水色と相掩映して、舊淡川の水路の三角洲が長く海中に突き出し、東に神戸港、西に兵庫港を形成してゐる。港に面したところは平坦だが、西北に至るに従つて地勢が漸く隆起してゐる。遠く淡路島の青櫓、明石海峡の帆影を眺め得るのは即ち此の隆起の部分、山手通り、山本通りの邊である。市中の最も繁昌してゐるのは榮町通りで神戸金融の中心地。銀行會社の如きものが多く、商業地は元町通りの邊。海岸通りは交通運輸の中心となつてゐる。重なる産物は塩寸、綿絲、麥稈眞田で、名産は牛肉は神戸牛の名世に高く、瓦煎餅も亦有名である。市内には三の宮、神戸、兵庫の三驛があつて、兵庫驛は山陽線に屬して、此處を起點として須磨、明石を経て下の關に通るのである。市内電車賃一區二錢、自動車賃五人乗一時間五圓、貸切一日四十圓、人力車一日一圓五十錢、馬車一時間參圓、半日八圓、一日十二圓である。重なる官公衙は、兵庫縣廳、神戸市役所、各國領事館などである。銀行は川崎銀行、農工銀行を始め、横濱正金、第一、三井、北濱、住友、三菱、日本商業、臺灣等の各支店である。會社には、日本郵船、大阪商船、東洋汽船、太平洋汽船の各支店、日本橋會社、鐘淵紡織工場、川崎造船所、三菱造船所、日本製粉工場、増田製粉所など亦世に聞えてゐる。遊覽すべきものは、▽商晶陳列館、は三の宮驛の東南三町、▽諏訪山遊園

大 阪 路

地、は同西北十二町、▼布引の瀧、は尾東北二十三町生田川の水源で今神戸水道の源泉となつてゐる。伊勢物語には業平朝臣の遊覧した事實を傳へ、平家物語には、清盛が此處で露屋に會つた怪談をのせてゐる。▼砂防工事、は布引瀧堰堤及鳥原谷堰堤の上流部に施した工事である。▼生田神社は同東北三町、官幣中社であつて、境内に梶原源太の梅がある。社後の生田の森と共に源平一の谷合戦で名高い。當時此の地は平軍が東門とした處で知盛、重衡が之れを守り、源軍は範頼五萬騎で向つたのである。梶原景時、子季景亦隨つて範頼軍の第一軍にあつたが、突進して城門を破り手勢五百騎と共に知盛、重衡の二千餘騎と馳合せて戦つたのである。景時衆寡敵せず城外に引き退くと、子の景季の妻が見えない。驚いて又城中に突進する。と、此の時景季は甲を打ち落されて、大重となつて戦つてゐる。疾き亂れた一枝の梅を折りつて、敵に挿した其のゆかしさに敵も味方も感じ合ふたといふのが、「瓶の梅」の由来であるが、神社にあるのは其の當時の梅ではなく、幾度も枯れて植ゑかへたものである。▼再度山、は同西北一里、▼摩耶山、は同東南一里十町であつて元弘の赤松則村義峰の地として名高く、山は海拔二千二百十尺で群山中の最高峰である。

菜の花や摩耶を下れば日の暮るゝ

蕪村

▼米利堅波止場、は同南六町、▼舊居留地、は同東南五町、▼會下山、は神戸驛の西北十六町、▼濱川遊園、は同四八町、劇場樂座がある。▼楠寺、は同北六町、別格官幣社濱川神社、は同北一町、市民皆楠公さんと呼んで尊信措かず、境内に水月黃門光圀の修せられた「嗚呼忠臣楠公之墓」がある。碑の文字は光圀の自筆、碑陰のは明徹士朱之瑜である。▼淡川、は神戸と兵庫との間を流れ海に注ぐ川で、

平時は水濁れ大雨の時は濁水が奔流して泥洲が港口を埋めるので、明治三十五年に起工して會下山の南端で水路を刈藻川と會せしめ西南流して海に注ぐやうにしたのである。

楠公の墓に屋根あり春の雨

子規

談講 楠正成の妻 (神戸)

茲に忠臣楠正成公の夫人の傳記を一席伺ひます、抑も此正成公の夫人は萬里小路大納言宣房卿の姫君にして、お名前は滋子姫と申されました、何ういふ事で楠公の奥方になられしといふに、其頃は河内の地侍赤坂に館を構へて、正成は楠兵衛正成といつて、無位無官の郷士でありました、其正成が大納言の姫君を妻にいたしたには因縁のある事で、元弘の帝には恐多くも、密かに武家を追討いたして、王政に挽回したいといふ、叡慮が御盛んでありましたから、大内に無禮講といふ會をお催しに成しました、此の無禮講といふは、總て大内へ出這入りする者は武家公卿の嫌ひなく、玉座の邊りへ列なり玄惠法印といふ者を講師として、和漢兩朝の軍學兵書

楠正成の妻

歴史の講談をいたさせ、其跡が會議となり、思ひくの論を吐て、其の宜しきを探るといふ、今の衆議院たちが、三百人罷々と聲を枯らして騒ぎ立てるといふ議會とは少しく違つて居りますが、先づ斯様のものにて之を稱けて元弘の帝の無禮講と稱へ時には御酒宴があります、此の會は度々催され、楠兵衛正成も熱心の勤王家でございませうから、此の無禮講の席へ立入り、立憲法印の講談も聴き、又は其軍議にも列りまして、口を出したから、萬里小路大納言殿が、アノ壯者はとお目を附けられ、終に萬里小路の臣、上田兵庫頭といふものの娘にして、さうして河内へお嫁入りがあつたのであります、此の縁によつて楠氏の一族中には上田氏の家名が残つて居ります、建武三年の五月、楠正成は都へ出てまして、軍御評定の御席に列りなりましたが、湊川に出張を仰せ付けられ兵士五百餘人を従へ、都より直ちに攝津湊川へと出陣致す事に相成り、本國河内へも立寄るべき所を、君命を重んじて歸國もいたさず、其の途中なる攝津の國櫻井の驛といふ所にて十三歳になる息子正行を陣營へ

招かれ、こゝに正行に遺言をして、元老の恩地左近と諸共に之を一旦河内へ歸されました、河内の赤坂城では該の奥方は正行公が櫻井から立歸つて云々と、父の遺言を語る、最早奥方は其時より、キツと御思案を成されて、夫正成朝臣に於ては湊川の露と消へ玉ふ事をば以前に知られし故に、常體の婦人であるなれば、跡逐駆て湊川へ、オーさうじやなど、いふ事もありませんが、然んな端したない事はいたしません、涙を吞んで湊川の沙汰を待つてお在なさんと、果せる哉、夫正成朝臣に於ては戦破れ弟の楠正季と兄弟刺交へて、落命致しました其の所は湊川の片邊なる、廣嚴寺といふ寺院の無爲庵と申す庵堂でありまして、(無爲庵は今はありませんが廣嚴寺は歴然と残つて居ります)是に就ては橋本八郎、宇佐美河内守、神宮寺太郎、和田五郎、是等を始めとして、楠家の一族七十餘人湊川に於て共に自刃を遂げました、扱悪運の強い足利尊氏は、愈々益々勢を得て進み、新田義貞も叶はずして僅かに三十餘人の兵を従へ、都へ逃げ歸つたと云ふ有様にて、天下は七分通り足利

のものと相成りました、誠に残念至極の事であるが、どうも亂國の有様は仕方ないものでございます。此時に大將楠正成の首級はといふと、是を六條の河原へ梟首いたしました、然るに楠氏の首が都の巷へ梟首され、今度も楠の首級であると獄門が出ると、正成の首ならとあつて、京童の口吟みに「疑がひは人によりてぞ起りけり正成なるは楠の首」と道路の風説紛々として、諸所に於て楠の首を見るといふ、都の評判は益々盛んでございます、依つて大將軍足利尊氏は、是は永く獄門にして曝して置くといふは宜しからずと、其の首を洗ひまして首桶に入れ、正成の遺族へ返して遣はさうといふ事になり、足利の一族瀬々川左門入道淨林といふ者へ懇ごろなる口上を言ひ含めて、是を河内の本城へ使節として遣はしました、扱瀬々川左門入道は都を立つて、河内の國を指して下向いたし、大手の城門へ來つて、左「將軍足利尊氏の使節、瀬々川左門入道淨林、當城の主楠正成殿の首級を持参いたしたり、宜しく御取次下され」と斯くも申すと、門番から取次へ、取次より奥

へ申達をいたす、早速大廣間へ足利の使節を招待いたして、楠公の後室滋子の方が對面をいたさんとあつて、喪中ではありますが、使節へ面會をいたしました、其傍に十三歳になる、息多門丸正行公も使者に對して禮儀いたすも残念であるけれども、小さいお手を突いて控へてござる、此時に瀬々川左門入道第一番に悔の口上を述べ、次に足利尊氏の懇ごろなる言葉を傳へ、就ては攝河泉に於て、英名を轟ろかしたる楠正成の首を、長く梟首に曝さん事、將軍に於て不本意に思はれる事ゆる、楠家の一族にお渡し立歸れとの事、首級を御檢ためあつて御受納下され度、且又將軍家の傳言に、何事に依らず不都合の事あれば、尊氏慎んで了承いたす間、お願ひの筋も之れ有るなれば、承はつて取次もいたさうし、萬事御腹藏なく、將軍方へ御報知之あるやうにと懇に述べました、尙又當今は都の東寺を本陣といたして罷り在れば東寺の本陣將軍家の執事を宛に御申達あつて宜しからう」といふ、吳々も念を入たる瀬々川入道の言葉、是を承はつたる後室滋子の方を始めとして、傍に

控へたる多門丸「父上の御首級拜見仕り度うございます」後室は「只今念の爲めお検ため申して受取り申すてございます」と口に覆面をいたして、正行と共に其の首桶を開いて見ますと、何と申しても五月末でございます、最早日數も経過いたしたる首でございますから、勿體ない事だが日本の名將楠公のお首級も腐敗に近き有様、變り果てたる首級の様子に、後室は押し來る涙を押へて「是はく足利殿の御志し又御使節瀬々川殿の御懇切如何にも楠河内判官正成の首に相違之なく、慥に受取り申しましてございます、吳々も將軍家へ宜なに御傳へ下され度お使者のお役目御苦勞に存ずる、本来なれば都より、遠路遙々河内まで御下向になりました、御使節ゆる、相當の御饗應をもいたすべきなれども、何分喪中の事でございますますゆゑ、失禮の段は御免下され度し、此儘に御引取り下されたう存ずる」と、涙を隠して、けなげの御挨拶、瀬々川に於ても、尙名殘惜氣に種々親切なる事を述べて、立ち上れば後室も玄關まで送り出で、此處に於て御挨拶を述べ、使節は涙を

拂つて赤坂城を引取りました、後室は足利の使者を歸して再び大廣間に引返して來ましたが、思へば淺猿しき處の夫の死首、豫ての覺悟とはいひながら、昨日や今日斯る姿になり玉ふとも思はざりし御出陣の其時に、既に今日の事を悟り玉ひしか、様々と跡々の事を言ひ置かれ、又其の上に櫻井の驛より歸し玉ひし倅正行、御遺言も之ありしゆゑ、大君の爲め御奉公にて、御討死は覺悟の上とはいひながら、今更御首を見るに就け、過し昔の事ども思ひ、そゝろに涙を浮かべしが、左あらぬ體にて膝を進め「コレ多門丸、其方は何といたされるぞ、斯る折からに至つて、只女々しく泣いてばかり居つても詮ない事、是より後の思案は如何に、此母にばかり心配をさせやか」と勵まされて正行は涙を拂ひ、多「母上様どうか、御首級は多門丸へお預け下さるやうに」と父の首級を首桶の儘抱へまして、奥を出で、豫て設けた楠公の持佛堂の方へ馳せ行きます様子、跡に後室は廣間の内に泣き倒れて居りました、餘り倅正行が首級を持つて這入つたきり、安否が分りませんから、不圖心付き、

力なく、正行公の引取つたる持佛堂の傍へ来て、様子を窺いたるに、餘り静かて
 ありますから、ソツと覗いて見ると、父楠正成が遺品に賜りし、菊水の太刀右手
 に抜き持ち諸肌を脱ぎまして、既に脇腹へ突き立てんとする有様、正面の首級には
 堆朱の香爐に蘭香の香を燻らせ、既に覺悟の體でありますから、母君は是を見たと
 大きに驚き、忽ち其の場へ馳せ入つて、倅正行を取つて押へ、「コレ正行、イヤサ多
 門丸、狂氣いたせしか、柎檀は嫩より芳ばしといへり、汝幼なれども父の子なれば、
 是程の事に血迷うべき汝にあるまじ、子供心にも能々事の次第を考へ父の御遺言を
 ば思ひ出だせよ、故判官正成殿が、兵庫へ向ひ玉ひし時、汝を櫻井の驛より歸し玉
 ふ事、全く跡を弔へといふにもあらず、又自害をいたして後れて後より冥土へ來れ
 といふ上意にも之なく、只其の思召しは、我假令天運盡きて修羅場の鬼となるとも、
 恐れながら 天皇何方に御座あると承はれば、死に殘されし一族郎黨を如何やう
 ともなして、扶助いたし置き、今一度義兵の旗を擧げ、朝敵を亡ぼし、我大君の御

代を立てよと、思召せばこそ、汝を歸されしものなり、其の御遺言を俱に聞いて汝
 も能く會得いたして此の赤坂へ立歸り、母にも夫と物語いたしたてはないか、其の
 御遺言を能く會得いたした其の方が、何時の間に忘れ居つたるか、自害せんとは何
 事ぞ、悲しきとあつて其方が死んで跡々はどうなる事ぞ、天晴父の意を穢さず、近
 頃無理なる事ながら、一時も早く成長して、軍學兵書に眼を醒し、武術を勵み士卒
 を養ひ、民を憐み、頼て立派の大將と相成つて、家に傳はる菊水の旗を翻し、朝
 敵足利殿を討取り、天皇の宸襟を慰め奉り、下萬民の苦しみを救うは、是武士の
 勤めぞや、此御遺品の太刀こそは、腹を切れとの爲にはよもあるまじ、是朝敵を追
 討する爲めの寶劍であるといふ事を忘れしか、正行如何いたしたぞ、此の母も疾く
 に死にたけれども、汝の成長いたするまでは、母の身體にして母の身ならず、惜か
 らぬ命を生存る事ぞかし、返すくも汝の勤めは朝敵足利尊氏の首を切り落すが一
 つの役目と覺悟をいたせ、父の教訓はよも忘れはいたすまい」と搖立搖動かして口

補正成の妻

説きますると、此時正行涙を拂ひ多「エー逸まつたり母上、父の別れの悲しさに、一時取詰めましたるは前後不明の狂人に等しく、父の御遺言も思ひ出し、今母人の御教訓返すくも胸に答へて面目なし、此正行中々死ぬる場合にあらず、憂も辛きも艱難して、頓て成長せし後に、望みある身體、モウ母人、必ず御心配御無用にして下さいまし」と母を慰め其の身の不束を詫び、夫れより正行は苟且の遊びにも家來の子供を對手に、戦争の真似をなし、此の陣は斯ういたすもの、是は敵を破るの計略である、此處は多くの敵を引受ける場所なりと軍法の掛引などをいたし、追々成長いたして吉野の帝へ御忠節を盡し奉り、二十四歳を一期として四條畷の露と消え、彼の地へ小楠公といふ社を残されたるは、人は一代名は末代、御年僅かに二十四歳を限りとしたしたが、此の勤王の美名は日本あらん限り跡々の歴史にも残るといふ最も芽出度き忠臣烈女の物語り、今日は滋子姫、即ち楠正成公の御臺の方の御傳記に止まります。 (松林伯固遺稿)

明壽奇策不可模 正勤王事是眞儒 德君一死七生語 抱此忠魂今有無
 (西郷隆盛作)

逆浪衝天四海沸 翠華播蕩出神京 勤王節峻金剛壘 敵愾風披棄水旌
 尊氏狡謀千古臭 楠公忠烈萬年榮 淡河一自三將星落 唯有悲潮鳴不平
 (賴山陽作)

豹死留皮豈偶然 淡川遺跡水連天 人生有眼名無竭 楠氏精忠萬古傳
 (水戸烈公)

落五十三驛 (附錄)

林屋正藏翁

東海道五十三驛を、京都から江戸へ来る旅を其儘落語にしたといふ、古いお話しを申し上げます。

「コレ、聞けば貴様は江戸へ行くといふぢやねえか、俺の貸した金はどうするつもりだ、京といふ今日は、否か大津か、草津に一つの返答を聞くんだ、石部も水口先で、チヨロ〜と、あの金をサツバリ土山とするつもりか、そんな事が何處の坂の下にあるものか」△「イエ、關々との御催促、龜山これをすまぬ事だらけ、どう庄野やらと思ふて居ます、石薬師で手を詰めたやうなものでございます、モウ四日市か、お待ちなすつて下さいまし」△「ドッコイ、其手は桑名、七里置いても渡すといつたぢやねえか、モウ待つ事は宮だ、鳴海だけ待つてあるのだぞ」△「その様な池鯉鮒もハイも着かぬやうにいつて下さいますが、今度はどのやうな事があつても、ほうつては岡崎」△「そんなら斯うぢや、明日の鐘が御油と鳴つたら取りに来るが吉田か」△「へエ、旦那、二川しい、俺が斯ういふ心は知らぬか白須賀」△「俺ぢやとて、荒井言葉を出したい事は、何の御番所、モウ言ふ舞坂とは思へども、何日も濱松の風で音ばかり、其れも二月か三月の事ならよいけれども、また其れなりぢやないか」

△「赤増もつて左様な事は致しません、皆な袋井のよいたくみ、掛川錢の一文、日阪さまに振うてなど、返します、モウ金谷はいたしません、子供も大井川、皆な裸體暮し、渡りかねて居ります、それにまた女房の島田の傍には、チツトもよりつかぬのか、嬬の腹が藤枝、ほうつて岡部もいたされません、鞠子に物が要る事だらけ、安部川此方へ府中に暮して居りますから、其處で皆な私が江尻ました、朝も疾から興津、いろ〜薩埵の事をしながら、蒲原きつて使に行つてくれまいかとかと言ひますから、オツと吉原、少し位原の痛い事があつても、行かずに居れば、水も沼津に居なければなりません」△「サア、其のやうに精出して三島のやうにさんせや金が出来たら箱根へ入れて、山に登るやうな事もあらう」△「旦那、小田原を仰しやいます、そんな事を聞くと氣が大磯々々といったします、私も何時運が平塚か知りませんが、只今の藤澤を、早ふのがれたいと思つて居ります」△「運さへ向いて来ればな、戸塚もない所から、よい程ヶ谷の事が来て、神奈川がタント出来るぞ」△「神奈

川が出来たら他人に貸す事もございませうか。川崎から返さぬときはどう品川がよろしうございませう。」「コレ、川崎から返さぬといつて、俺が此方に貸した事を考へて見さんせ。」「そんなに關東でございまするか。」「此方は關東あるまいと思ふて居やんすだらうが、指折りかぞへて見やんせ、江戸長い事ぢや、丁度五十三駅になるわい。」

これは旅の道づれ

御旅行に就いての注意

- 一、昔の旅では駕籠や馬があつて、夫に依つて行きましたが、今では必ず汽車に乗らなければなりません。中には汽船で行かれる處もありますが、先づ汽車が第一と云つて宜からうと思ひます。
- 一、汽車は大抵の駅で十五分、又は繁昌の停車場では一時間前位から切符を買りますから、成可く早くお買ひになるが宜しうございませう。
- 一、成可く釣銭を貰はないやうになさるが宜しい、貨金は其處の驛夫に尋ねるか、或は貨金表を御覽になつて、然して若し止むを得ない場合に釣銭を貰ふやうでしたら、釣銭が不足して居るか居ないかを、受取る時に能く確かめなければなりません。
- 一、夫れから名所舊蹟避暑遊樂、温泉海水浴などにお出でになる方の爲めに、鐵道院で特に色々な割引を致す事があります。
- 一、夫れから鐵道院は二十五人以上のお方になると、其の人と行先に依つて相當の割引を致します。嬉しい事は停車場でお聞きを願ひます。
- 一、昔から可愛い子には旅をさせると云つて、旅は辛いもの、やうになつて居りますが、些し馴れて來ると旅ほど面白いものはないやうになります。夫は汽車汽船の設備が誠によく出来て居るから、些し長い旅の汽車になりますと、大抵列車のボーイが居ります。其のボーイに色々お申し付けになれば、總て傍からお答へを致します。例へば二等車に乗つて居て、途中から寢臺車に乗り替へやうと思ふ時、又は何か購て買物をしたい時、スリッパの

御旅行に就いての注意

御旅行に就いての注意

欲しい時、遠慮なくホーイに仰在れば直ぐに用を足して呉れます。其の心附けも鐵道院の規則として、遣らないやうにして頂き度いと云ふ事です。夫ですから御婦人やお老人でも一人旅をなすつても差支はありませぬ。

一、夫に寢臺車をお申込になるには、成可く早くお申込なさる方がお徳用です。若し混雑して居ますと良い場所を取る事が出来ませぬ。尤も一旦申込んで後で取消すと云ふ事は難かしいと云ふ規則になつて居ります。

一、大抵な停車場には告知板と云ふものが出て居りまして、お約束の方が其處へお出でになつて居るか居ないかと、お互に報せ合ふ約束をして置けば、其の板を見て判るやうになつて居ります。是はドン／＼御利用なさる方が宜いやうで、取分け人を待ち合はせるには最も都合の宜い物です。

一、お持ちになる手荷物では、腰掛けの下や網の上へ一寸載るだけの物は差支ございませぬが、餘り大きい物は載りませぬし、他の客の迷惑にもなりませんから、之は出發の驛でお預けになつた方がお得です。其の場合一等ならば百斤(十五貫目)、二等ならば六十斤(九貫六百匁)、三等ならば三十斤(四貫八百匁)までは無賃で扱つて呉れます。併し夫も生物や危険な物は扱ひませぬ。其のお心算でお乗なさると後で御迷惑をなさいませぬ。

一、若し行先が神戸であるとして、京都や大阪を御見物なさらうとするならば、手荷物を一時預けと云ふのになさると大層都合が宜うございませぬ。一時預けと云ふのは、降りた時停車場に必ず看板が出て居ります。其處へ託しますと預かり證を呉れます、之を貰つて京都なり大阪なりを御覽になつて、又汽車に乗る時に其の荷物を預り證と引替へに受取ります。預り賃は只つた二錢です。重い荷物を持つて歩かないでも済む事になつて居ります。

一、繁昌の停車場になりますと、西の方へ行く列車、東の方へ行く列車、色々列車が澤山混合つて居て、大阪へ行く人が東京へ来る列車に間違へて乗らないと云へませぬ。列車には必ず何處行きと云ふ赤い札が下つて居りますから、其の札をよく見てお乗りにならないと不可ませぬ。

一、若し乗換へをして行くやうな處がありましたら、よく御注意なさらないと不可ませぬ。随分乗り越しをして時間が遅れて、急用に間に合はなかつたと云ふ事聞きます。乗り越さぬやうに乗り換へ場所降りる驛などに御注意なさらないと不可ませぬ。取分け夜行ではつい睡いものですから、寝て了はれないとも限りませぬ。然う云ふ場合二等車にはホーイが附いて居りますから、暇めホーイに此處へ行くのだから此處で乗り換へるやうに起こして呉れと頼んで置かなければ不可ませぬ。併し頼んだからと云ふて、餘り安心をして居ると乗り過す事があります。御注意までに申して置きます。

御旅行に就いての注意

院線内片道 二十五哩以上三百哩未満 二 回 三百哩以上七百哩未満 三 回

一、若し是以上の回数を過して下車したり、或は二十五哩以内の切符で途中下車をしますと、其の乗車券は降りた所だけで、其の先きに行く事は許されませぬ、無効になります。但し此の規則に依つて降りるにしましても、必ず其の切符を、驛の係りに見せて、下車した事の證明を受けなければなりません、夫れをしないと、後にいらく面倒が起る事があります。

一、乗車券の通用期間は、發行の當日から計算する事になつて居ります。片道の乗車券は、五十哩以内が一日、五十哩以上百哩以内が二日間です。百哩以上は、百哩若しくは其の未滿を増す毎に、一日づつ、加へて往き往復乗車券の場合には、片道五十哩以内が三日、五十哩以上は片道通用期間の二倍までは許されて居ります。

一、途中下車をなさるには、片道二十五哩以上乗車の際に限り斯う云ふ標準に依つて、何處の驛でも降りて復乗継ぐ事が出来ます。

Made in Japan

不許複製
旅道の連
奥附

發行所 東京馬喰町 三芳屋書店

電話馬喰町一九九三番
東京芝区愛宕町三丁目二番地

編者 東道の主人

發行者 東京市芝区三田三丁目七番地 神谷竹之輔

印刷者 東京市芝区愛宕町三丁目二番地 笠間音次

印刷所 東京市芝区愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

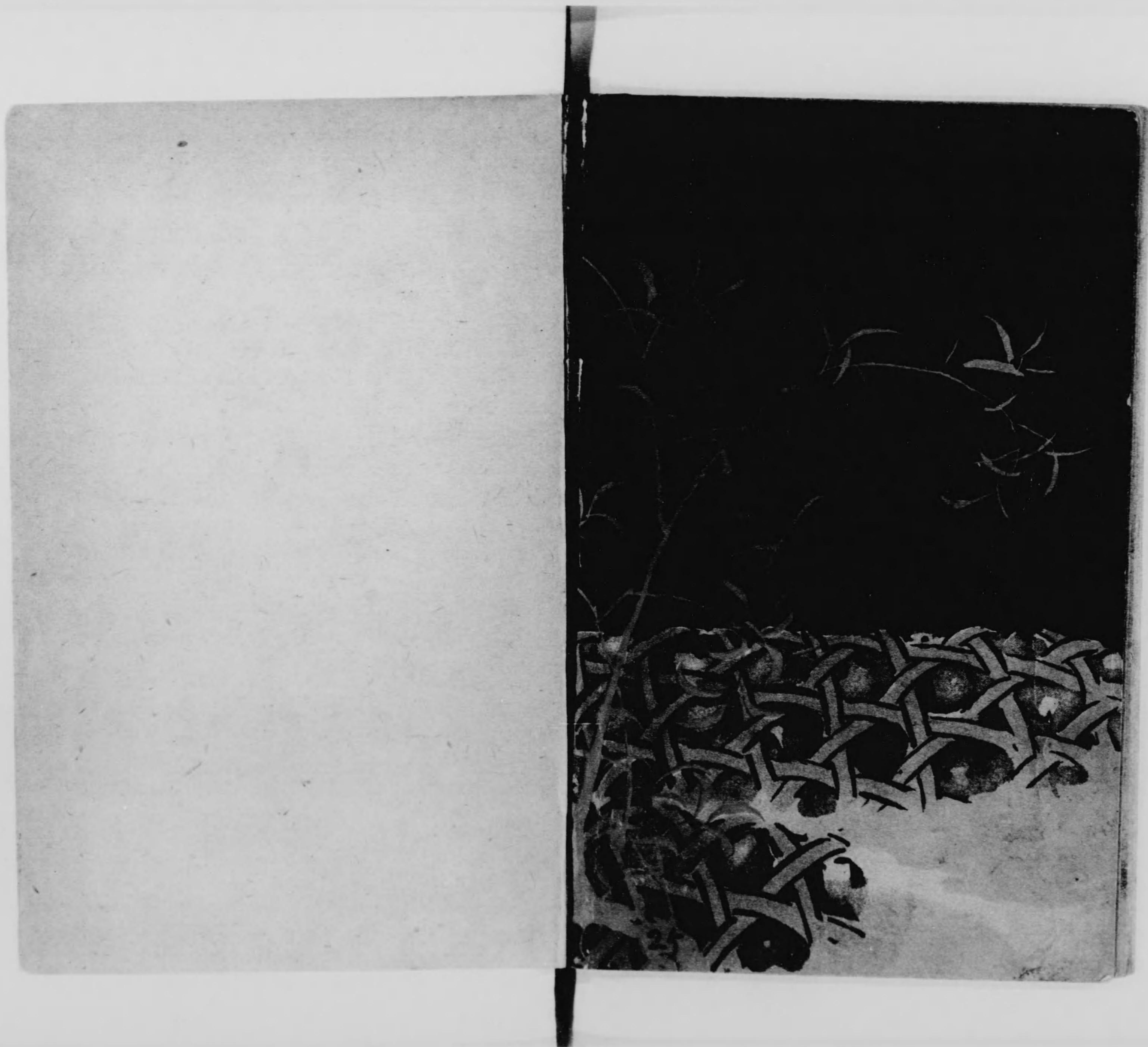
大正七年四月十九日發行

定價金五拾五圓

院線對哩標準賃金早見表

哩程	一等賃金	二等賃金	三等賃金
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

院線對哩標準賃金早見表終



370
123

終

